開善寺境内遺跡

飯田市上川路公民館建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1991. 3

長野県飯田市教育委員会

開善寺境内遺跡

飯田市上川路公民館建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1991. 3

長野県飯田市教育委員会

序

今回発掘調査を実施した場所は、市内竜丘上川路地区の一画にありますが、付近には、古刹開善寺、県史跡である御猿堂古墳や馬背塚古墳が存在し、文化財的にも重要な地域の一つです。特に、隣接する開善寺は歴史も古く、また、寺領も広大なものであったという記録もあり、何らかの係わりが予想される注目すべき地域です。

昭和48年に飯田市考古資料館建設に先立ち発掘調査を実施しましたが、その調査結果によると、現在の開善寺の前身である中世の堂宇が確認されており、また、周辺からは、布目瓦が大量に発見されることから、白鳳期における上川路廃寺の存在も考えられる場所でもあります。

そうした歴史的環境にとりかこまれた当該調査箇所は、すでに埋蔵文化財包蔵地として周知されており、発掘調査も周到な準備のうちに、慎重かつスムーズに進行しました。

発掘調査の原因となったのは、上川路公民館の移転改築によるものです。

飯田市は、昭和31年以来、1市1町11か村が合併をしてきましたが、およそ小学校単位に公民館を残してきました。現在では、旧市5館、各地区1館の配置となり、17館が独立館として活動をしています。17館の下には、各地域単位に分館を持ち、この上川路公民館も、竜丘公民館の一つの分館として、地域住民の公民館活動の場、自治振興の拠点として活発な活動をしています。コミュニティー活動の重要性や生涯学習の推進が叫ばれている今日、新調なったこの公民館を拠点に地域文化の振興や住民自治の向上が図られることを期待しております。

調査結果については、後ほど詳細に報告いたしますが、こうした発掘調査の蓄積によって、当時の地域の人々の生活や文化が解明され、歴史的な位置づけがされることと確信しております。

今回の発掘調査実施にあたり、上川路地区のみなさんや隣接地の方々、また、調査に従事いただいた作業員の方々ほか関係各位には、深いご理解とご協力をいただきました。心からお礼申しあげます。

平成3年3月

飯田市教育委員会
教育長　福　島　　稔

例　　言

1，本書は上川路公民館建設に先立つ緊急発掘調査報告書である。

2，調査は、飯田市教育委員会が直営事業として実施した。

3，本書の発掘調査に関し、遺跡名は昭和48年に、飯田市考古資料館建設に先立ち実施した発掘調査で用いた「開善寺境内遺跡」（上川路廃寺）を用い、略号をＫＺＫとした。

4，調査実施にあたり、調査対象部分に２m四方のグリットを設定し、作業を行なった。グリットは対象地の西隅を起点とし、北に向かってＡ・Ｂ・Ｃ～、東方へ１・２・３～とした。区画の呼称はＡ１・Ｆ４などとなる。

5，調査は平成元年８月21日から実施した。排土の運びだし等で一時中断したが、９月29日には現地での作業を終了し、平成２年度末まで整理作業及び報告書の作成を行なった。

6，本報告書の記載は、溝状址を優先した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。

7，本書の執筆にあたり、調査に至るまでの経過・まとめ等は小林正春が、遺構等の記述は佐合英治が分担執筆した。なお、文書の一部について小林が加筆・訂正を行なった。

8，本書に掲載された図面類の整理、遺物実測は佐合があたった。なお、同作業にあたり調査員及び整理作業員が補佐した。

9，本書の編集は調査員全体で協議の上、佐合が行ない、小林が総括した。

10，本書に掲載した遺構図の中に記載した数字は、遺構検出面からのマイナスcmを表している。

11，本書に掲載した石器の表現として、使用痕及び擦痕は図内及び図外に実線で、研磨痕は図内に実線で図外に先端部塗りつぶしの矢印、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で、自然面は図内にドット、断面には図外に矢印で示した。

12，本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本　文　目　次

序
例言
目次
Ⅰ　経過
1，調査に至るまでの経過 …… 1
2，調査の経過 …… 1
3，調査組織 …… 2
Ⅱ，遺跡の環境
1，自然環境 …… 3
2，歴史環境 …… 3
Ⅲ　調査結果
1，遺構と遺物
1）溝状址 …… 8
①　溝状址1　②　溝状址2
2）竪穴 …… 10
①　竪穴1　②　竪穴2
3）土坑 …… 11
①　土坑1　②　土坑2　③　土坑3　④　土坑4　⑤　土坑5　⑥　土坑6
4）その他の遺構 …… 14
①　穴址　②　土器包含層
5）遺構外遺物 …… 14
Ⅳ　まとめ …… 19

挿　図　目　次

挿図1　開善寺境内遺跡及び周辺遺跡図 …… 4
挿図2　調査位置及び周辺図 …… 6
挿図3　開善寺境内遺跡遺構全体図 …… 7
挿図4　ＫＺＫ　溝状址1 …… 9
挿図5　ＫＺＫ　溝状址2 …… 10
挿図6　ＫＺＫ　竪穴1・2 …… 11

挿図7　ＫＺＫ　土坑１・２ …… 12
挿図8　ＫＺＫ　土坑３・４・５・６　及び周辺穴 …… 13
挿図9　ＫＺＫ　北西穴群及び用地境土層断面図 …… 15

図　版　目　次

第1図　ＫＺＫ　竪穴１・２出土土器 …… 22
第2図　ＫＺＫ　竪穴２、土坑１・２・４出土土器 …… 23
第3図　ＫＺＫ　土坑４～６、穴出土土器 …… 24
第4図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 25
第5図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 26
第6図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 27
第7図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 28
第8図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 29
第9図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 30
第10図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 31
第11図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 32
第12図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 33
第13図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 34
第14図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 35
第15図　ＫＺＫ　遺構外出土土器、埴輪 …… 36
第16図　ＫＺＫ　遺構外出土瓦、土器 …… 37
第17図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 38
第18図　ＫＺＫ　遺構外出土土器 …… 39
第19図　ＫＺＫ　竪穴１・２、土坑１・４出土石器 …… 40
第20図　ＫＺＫ　土坑６、穴出土石器 …… 41
第21図　ＫＺＫ　遺構外出土石器 …… 42
第22図　ＫＺＫ　遺構外出土石器 …… 43
第23図　ＫＺＫ　遺構外出土石器 …… 44
第24図　ＫＺＫ　遺構外出土石器 …… 45
第25図　ＫＺＫ　遺構外出土石器 …… 46
第26図　ＫＺＫ　遺構外出土石器 …… 47
第27図　ＫＺＫ　遺構外出土石器 …… 48

第28図　ＫＺＫ　遺構外出土石器 …… 49
第29図　ＫＺＫ　遺構外出土石器 …… 50
第30図　ＫＺＫ　遺構外出土石器 …… 51
第31図　ＫＺＫ　遺構外、穴出土石器、遺構外鉄製品 …… 52

写　真　図　版　目　次

図版１　調査地調査前（南から）、調査地全景（東から） …… 54
図版２　溝状址１・２、溝状址１土層断面、竪穴１・２ …… 55
図版３　土坑１～６ …… 56
図版４　土坑１出土土器、土坑４出土土器、石器 …… 57
図版５　土坑５出土土器、土坑６出土土器、石器、遺構外出土土器 …… 58
図版６　遺構外出土土器 …… 59
図版７　遺構外出土土器 …… 60
図版８　遺構外出土土器 …… 61
図版９　遺構外出土土器 …… 62
図版10　遺構外出土土器 …… 63
図版11　遺構外出土土器 …… 64
図版12　遺構外出土土偶、遺構外出土土器 …… 65
図版13　遺構外出土須恵器 …… 66
図版14　遺構外出土須恵器 …… 67
図版15　遺構外出土須恵器 …… 68
図版16　遺構外出土土師器 …… 69
図版17　遺構外出土埴輪、瓦 …… 70
図版18　溝状址１出土土器、遺構外出土遺物 …… 71
図版19　遺構外出土陶器類 …… 72
図版20　遺構外出土石器 …… 73
図版21　遺構外出土石器 …… 74
図版22　遺構外出土石器 …… 75
図版23　遺構外出土石器 …… 76
図版24　遺構外出土石器、遺構外出土鉄製品 …… 77
図版25　調査風景 …… 78

Ⅰ　経　　過

1，調査に至るまでの経過

飯田市上川路地区の生活拠点ともいえる上川路公民館は、老朽化が進み、その早期改築が地区民の強い要望として具現化した。

当初その建設は、現地にて改築の方針であったが、様々な問題を解決する中で、現在地より若干西方に新築されることとなった。

新築予定地に決定された場所は、埋蔵文化財包蔵地開善寺境内遺跡の範囲内にあり、特に白鳳期まで遡る古瓦を出土する一帯に隣接し、地表面でも縄文時代以降各時代の土器等が採集され、埋蔵文化財の保護が必要となった。

その保護策について、地元である上川路地区と飯田市教育委員会及び関連する市行政担当課と再三の協議を行なった。その結果、諸々の状況の中で飯田市教育委員会が発掘調査を実施し、記録保存を計る方向付けがなされた。

具体的には、平成元年５月31日付で発掘通知を文化庁長官宛に提出し、その後８月に至り現地作業に着手した。

2，調査の経過

調査は諸協議に基づいて平成元年８月21日に着手した。まず、北東部の傾斜部分の表土を人力により取り除いたが、地形の状況が把握できなかったため、南東の平坦部を二本のトレンチにより調査した。旧地表まで60cmから１ｍ程あるため、８月23日には、これと平行して重機により表土を取り除いた。排土の関係から一気に調査できず、北側から随時遺構検出作業に入った。確認した溝状址、穴を掘り上げ、写真撮影、測量調査を実施した。排土の運び出し、南東の表土取り除きのため一時中断したが、９月12日からは遺物包含層を掘り下げ、竪穴、穴を検出し、引き続きこれらの遺構を掘り下げ、測量調査等を実施した。９月27日からは埋め戻し作業と平行して、北東隅に検出した遺構の精査のため用地ぎわまで拡張した。ここで検出された土坑を掘り下げ、写真撮影、測量調査を実施した。調査地の制約から数回にわたり重機により排土作業を行なったり、雨のため調査地が完全に水没するなど天候にもたたられ、時間的なロスがあったが、埋め戻し作業を残して９月29日には現地での発掘調査を終了した。

その後、平成２年度末まで飯田市考古資料館において、記録された図面・写真の整理、出土遺物の水洗・注記・復元作業、実測・写真撮影等を行ない、報告書の作成にあたった。

3，調査組織

(1) 調査団

調査担当者　小林　正春

調　査　員　佐々木嘉和・佐合　英治

作　業　員　高橋収二郎・細田　七郎・木下　　傳・松島　卓夫
市瀬　長年・関沢　　実・塩沢　勝美・熊谷　和美
杉本　辰巳・塚平　　晃・増田　正司

整理作業員　池田　幸子・伊原　恵子・大蔵　祥子・金井　照子
金子　裕子・唐沢古千代・唐沢さかえ・川上みはる
木下　早苗・木下　玲子・櫛原　勝子・小池千津子
小平不二子・小林　千枝・佐々木真奈美・田中　恵子
筒井千恵子・樋本　宣子・丹羽　由美・萩原　弘枝
林　勢紀子・原沢あゆみ・平栗　陽子・福沢　育子
福沢　幸子・牧内喜久子・牧内とし子・牧内　八代
松本　恭子・三浦　厚子・南井　規子・宮内真理子
森　　信子・森藤美知子・吉川紀美子・吉川　悦子
吉沢まつ美・若林志満子

(2) 事務局

事　務　局　竹村隆彦（飯田市教育委員会社会教育課長）
中井洋一（飯田市教育委員会社会教育課文化係長）
小林正春（飯田市教育委員会社会教育課文化係）
吉川　豊（飯田市教育委員会社会教育課文化係）
馬場保之（飯田市教育委員会社会教育課文化係）
土屋敏美（飯田市教育委員会社会教育課文化係　平成元年度）
篠田　恵（飯田市教育委員会社会教育課文化係　平成２年度）

Ⅱ　遺跡の環境

1，自然環境

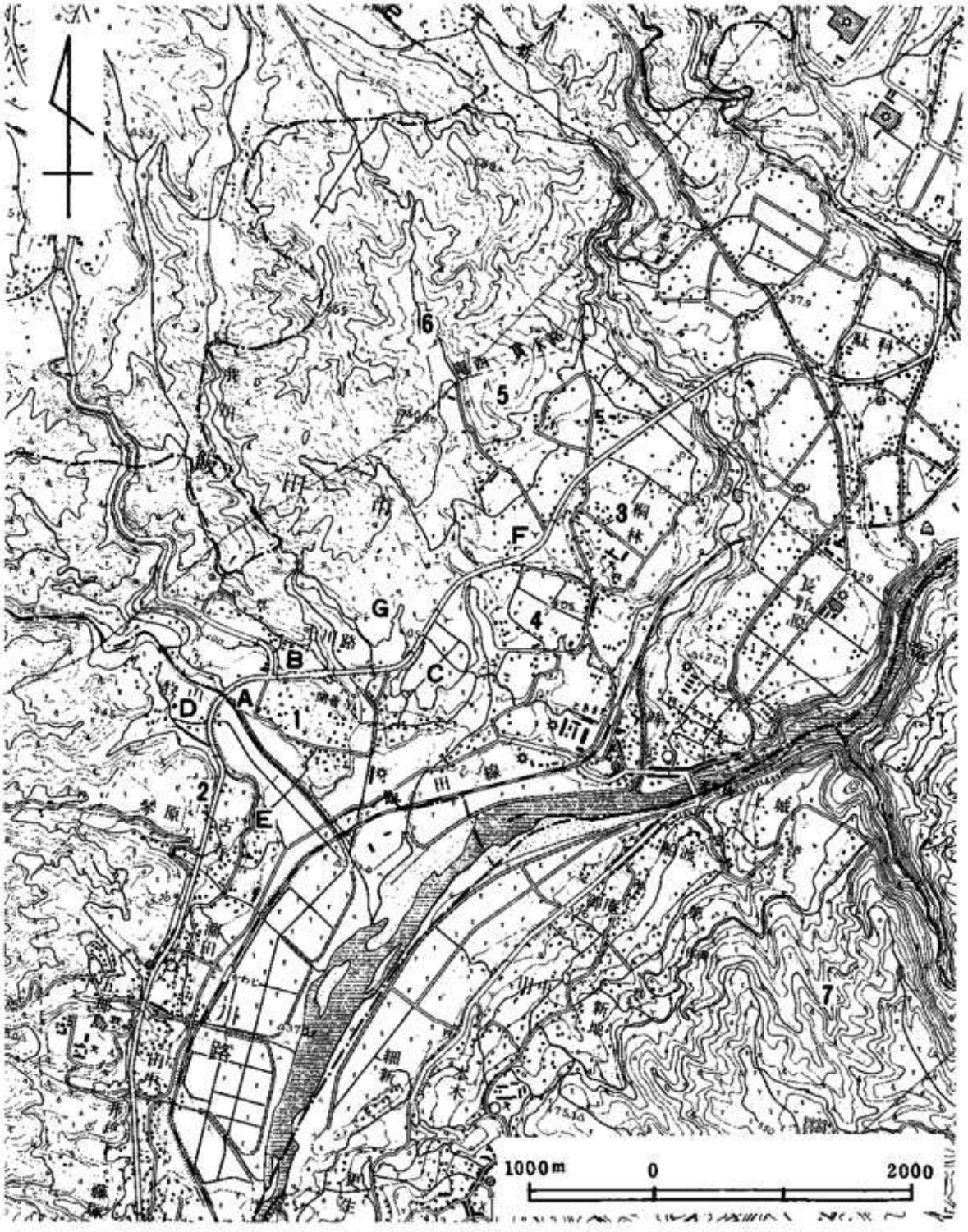
開善寺境内遺跡（上川寺廃寺）は飯田市上川路に所在し、飯田市市街地より南へ6km、ＪＲ天竜峡駅より北へ2.6kmの距離にある臨済宗の名刹「開善寺」を中心とした上川路面の段丘に広がっている。

上川路は旧竜丘村の南端に位置し、久米川を境に南は飯田市川路に接している。竜丘地区の東は天竜川の花崗岩を刻みこんだ深い渓谷により、天竜川と接しているが、沖積低地は時又の一部と、上川路面の一部のわずかであり、大部分が洪積期の台地から成る。東から西に次第にたかまる段丘地形が発達し、開善寺の北側はすぐ段丘崖となっている。この上は東西にのびる舌状の低位洪積台地となり、この北を流れる臼井川を隔てて塚原古墳群のある塚原台地となり、駒沢川によって切られて、小池、さらに一段高い桐林の段丘面となり、高位段丘の臼井原面へと続いている。西は緩い傾斜面を成す段丘崖が山となっており、この上は飯田市中村の台地面が展開している。天竜川の支流久米川をこえた西側は小高い丘陵が続いて飯田市伊豆木となる。南は約100mで久米川を隔てて、また東は最低位の沖積段丘面となって川路地区となる。南東750mを天竜川が南流し、天竜峡の渓谷入り口に至る2kmの間は天竜川の氾濫原、遊水地帯が広がっている。

開善寺境内遺跡は開善寺周辺の平坦面で、伊那谷の第9段丘面にある。標高385m前後で、天竜川との比高差は15mである。当調査地点は開善寺山門から75mを測る遺跡の南西の縁部と思われる部分にあたり、北東に1m程の段差があり、久米川へ向かって緩く傾斜している地である。

2，歴史環境

開善寺を中心とした上川路面の一帯からは、表採または耕作中に、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代から平安時代に至る土器や石器が多量に発見され、特に白鳳時代の古瓦の出土が注目されている。ほかに鉄斧、紡錘車も出土し、縄文時代以降の生活遺地として開けていた場所であったと判断される。周辺の遺跡を見ると久米川を挟んで一段高い洪積段丘面に、縄文時代前期の今洞遺跡がある。駒沢川の北には古墳時代の集落址小池遺跡があり、さらに一段高い段丘面には前の原遺跡があり、縄文時代中期、古墳時代後期の集落址である。遺跡の段丘面西端には、重要文化財の画文帯四仏四獣鏡を出土した、県史跡の前方後円墳御猿堂古墳があり、北方の段丘上にも同じく県史跡指定の馬背塚古墳がある。久米川を越えたすぐ西には花御所古墳群、南には清正寺古墳がある。清正寺古墳は飯伊地方最低位の天竜川氾濫に面して築造された前方後円墳で、標高370mである。北には臼井川をこえた台地上に塚原古墳群があり、昭和49年度に行なわれた



1．開善寺境内遺跡　2．今洞遺跡　3．前の原遺跡　4．小池遺跡　5．前林廃堂址

6．桐林古窯址群　7．御殿田古窯址　A．御猿堂古墳　B．馬背塚古墳　C．塚原古墳群

D．花御所古墳群　E.正清寺古墳　F．兼清塚古墳　G．蒜田古墳

挿図1　開善寺境内遺跡及び周辺遺跡図

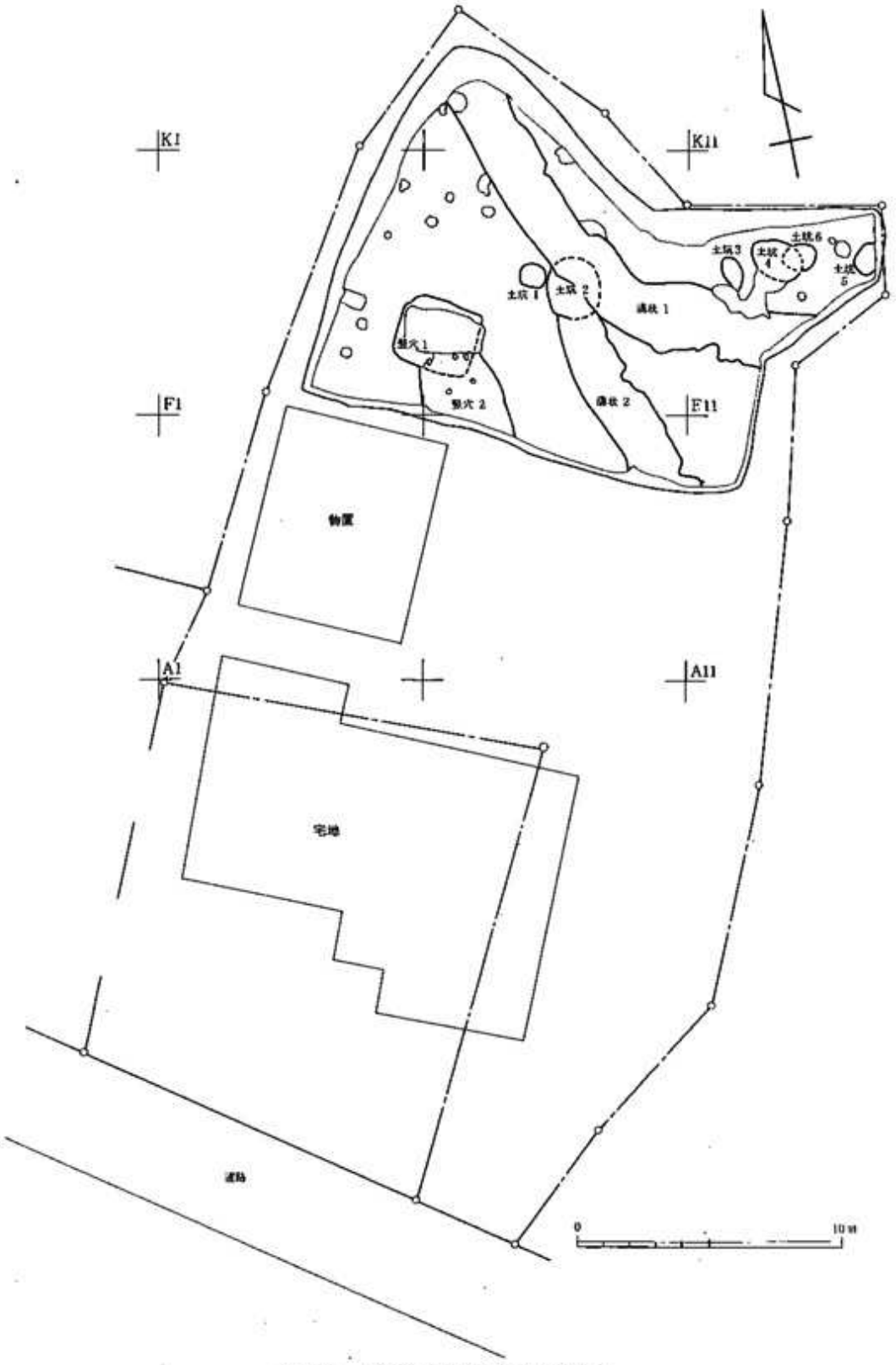
農業改善事業に伴う発掘調査で、縄文時代中期及び古墳時代後期の住居址等が確認されている。また、塚原古墳群を見下ろす形で西の台地の先端に蒜田古墳がある。前の原面の西端部には飯田地方もっとも古いとされる前方後円墳、兼清塚古墳があり、この北方の一段高い段丘面に前林廃寺址がある。これより北西の臼井段丘の南裾には駒沢川に面して宮洞、河内洞、小臼井、堤洞など須恵器の桐林古窯址群があり、天竜川を挟んで、東の対岸山裾には御殿田古窯址群が望まれる。

竜丘地区には前記した古墳を含め141基を数える古墳が築造された事実があり、古墳時代以降地域の中心として、さらには大和王権による東国経営上において重要な地であったことが窺え、古墳時代後期においてこの地に定住した一族が奈良時代に入る前の白鳳期において古墳とは異なった権力の象徴として寺院の建立を行ない、上川路廃寺もこの一つと考えられる。地域での伝承も無く、文献史上にも登場しないが、昭和48年に飯田市考古資料館建設に先立ち実施した発掘調査では、現在の開善寺の前進である伽藍の一画にあたると考えられる中世の堂宇が確認され、古墳時代後期を主体とする遺物が出土している。また、先にも述べたが耕作等により出土した布目瓦が多量にあり、大規模で且つ整備された伽藍配置を持っていたものと思われる。なお、本調査地点はこの地に隣接している。

現在の開善寺は飯伊地方の禅寺として最も古いものの一つで、鎌倉時代、伊賀良庄地頭北条江馬氏によって開禅寺が大鑑禅師を開山として創建された。北条氏滅亡後、信濃国司小笠原貞守によって開善寺として存置継承され、寺運を高めたものとみられている。かつては七伽藍、東西両班の僧坊を持ち、小笠原氏の道場であり、室町幕府によって十刹に列された名刹である。

明応８年（1499）に火災に合い、「七堂悉焼亡唯山門存矣」と山門一宇を残して七堂すべてが焼失し、永年３年（1506）にも火災にあっている。その後小笠原氏の内訌、分裂による勢力の衰退により寺運も衰え荒廃に傾く事態に至った。天文10年（1541）武田信玄の援助によって信玄と親交のあった速伝和尚が住職となり復興にあたり、旧観に復するに至っている。しかし、天正10年（1582）織田信長の信濃侵入の際に兵火に遭っている。山門を除き現在の建造物は江戸時代に再建されたもので、元禄11年（1568）境内絵図写しによると現在とほぼ同じ建造物が見られ、更にかつてあった堂宇址が示されており、その規模の大きさをうかがうことができる。山門は重要文化財、鐘楼は重要美術品に指定されている。

挿図2　調査位置及び周辺図



挿図３　開善寺境内遺跡遺構全体図

Ⅲ 調 査 結 果

1，遺構と遺物

1）溝状址

① 溝状址1（挿図1　第16図）

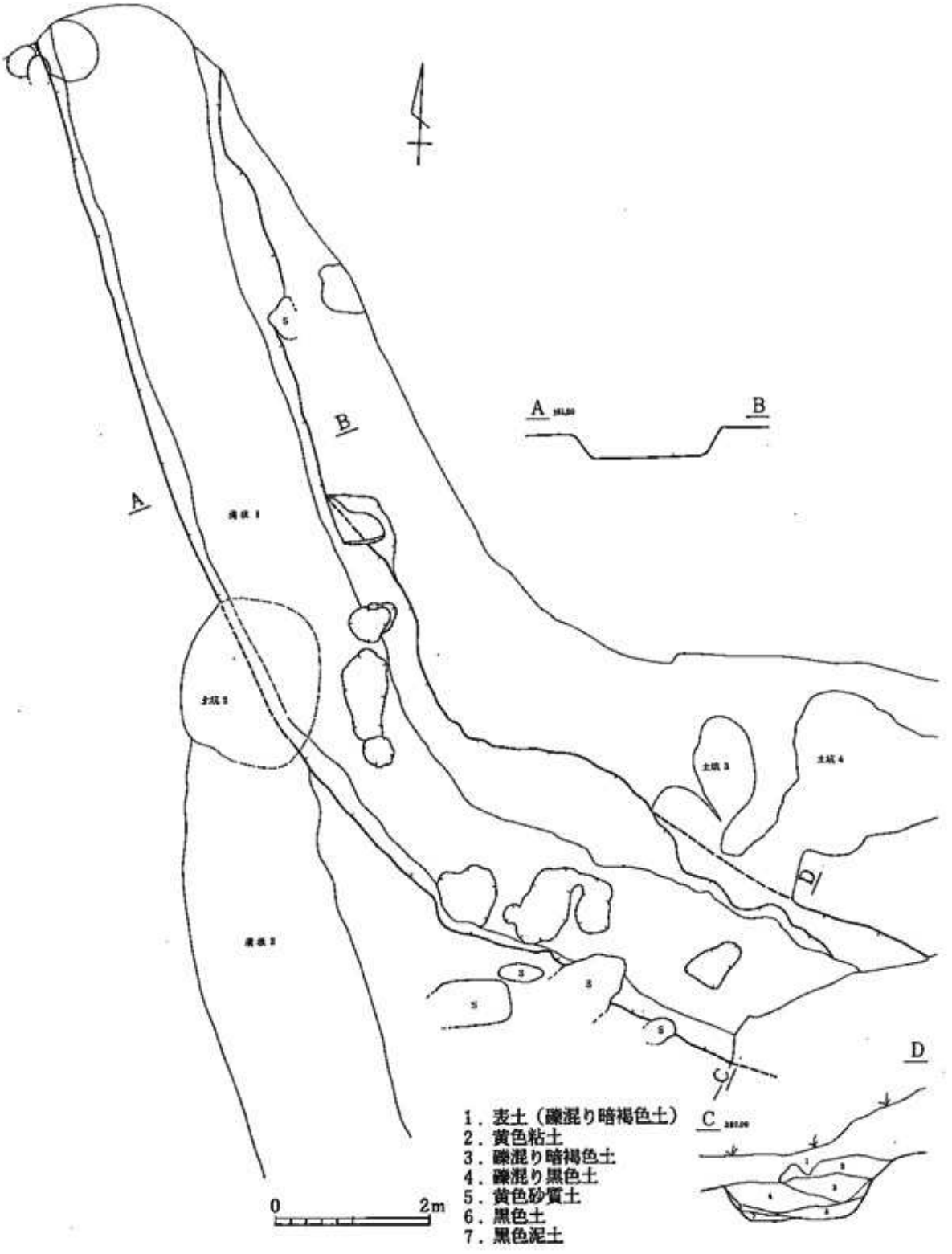
調査範囲の北隅から東に横断する形で検出された。両端ともさらに用地外に延びており調査できた長さは直線距離で15.6m、幅は1.8〜2.1mを測る。深さは全体として検出面から30cm前後であるが、斜面となる東隅の一部分では85cmを測った。確認した部分の中央で、くの字形に曲がり方向をかえている。中央から北の方向軸はN20°W、東はN65°Wである。底部は穴状の凹みとなる部分もあるが平坦で北と東側での比高差もほとんど無く、タタキ状に締まっていた。壁面はこの底部から角度をもって立ち上がり、断面形は逆台形を呈している。覆土は黒色土に石が多量に混入しているものが主体であり、ほとんど一気に埋まっているものと考えられる。

遺物には、縄文時代中期土器、石器、古墳時代土師器甕、高坏、坏、須恵器甕、蓋坏、坏のほか中世の碗か皿の高台部などが出土した。各時代のものがあるが、この内本址に伴うと考えられるものは、溝状址の底部に密着して出土した、厚い釉薬が付された陶器の高台部片（第16図4）のみである。古墳時代遺物は本址北端に集中しており、なんらかの遺構が重複していた可能性もあるが、プラン等は把握できず、縄文期遺物同様に流れ込みの可能性が高い。

時期は、覆土等の状態から、中世以降と把握したが、本址に伴うと思われる遺物が一点のみのため確実なものではない。しかし、底部が堅く締まっており、確認された場所が廃寺址の縁部にあたることから、なんらかの形で、廃寺址に関連した道路址、もしくは区画等の施設の可能性が考えられる。

② 溝状址2（挿図5）

溝状址1の中央部から枝別れしているように検出したが、切り合い関係は不明である。確認した長さは7mを測り、南の未調査部分に延びている。軸方向はN15°Wである。幅2m、深さは45cm前後である。底部は凹凸があり、北から南へ15cm傾斜している。東の壁面は緩く立ち上がり、中段に稜を持つ、西は角度をもって立ち上がり垂直に近い部分もある。覆土は上部が黒色土、下層は漆黒色礫土で、いずれも一気に埋まっている。漆黒色礫土は西の壁下にもぐりこんでいく部分が認められ、自然堆積の端の部分であった可能性が高く、本址は黒色土の部分のみであったと


A
B
C
D
0
2m
1．表土（礫混り暗褐色土）
2．黄色粘土
3．礫混り暗褐色土
4．礫混り黒色土
5．黄色砂質土
6．黒色土
7．黒色泥土

挿図4　ＫＺＫ溝状址１

も考えられる。

遺物には、縄文中期土器、石器、土師器甕がある。時期の異なる遺物が一緒に出土し、流れ込みと考えられる。

時期は、遺物等から判断できず、性格も不明である。

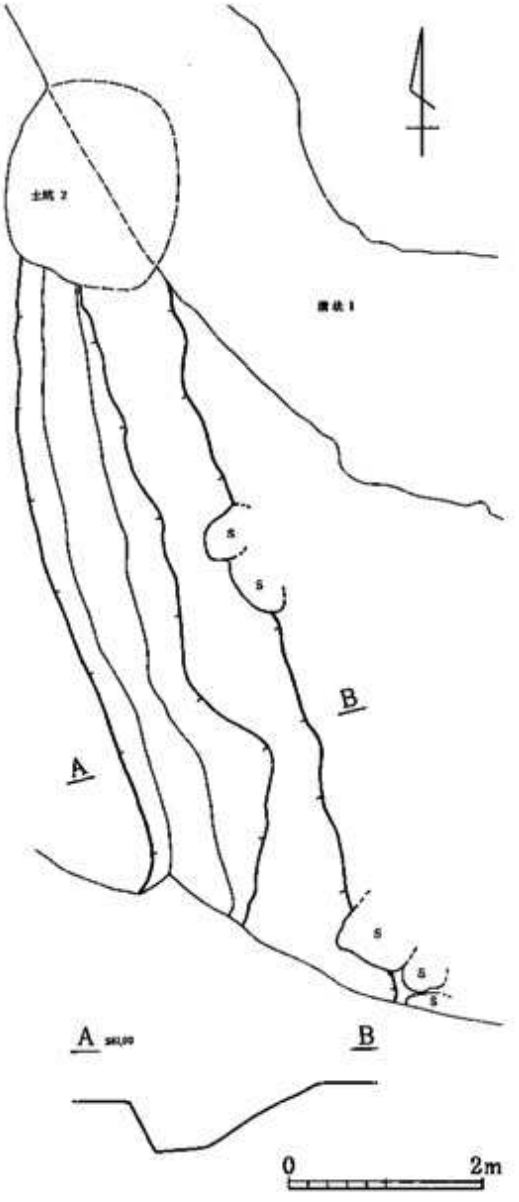
2）竪穴

① 竪穴1（挿図6　第1・19図）

調査範囲の南西に確認した。竪穴2と南隅で重複しているが切り合い関係は不明で、中央部を大きく攪乱坑に切られている。平面形は北隅が歪むがほぼ正方形で、規模は2.98×2.75mを測る。軸方向はやや長い東西方向でN62°Wを示す。壁高は8cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。底部は平坦なものであるが、軟弱なものである。覆土は黒色土の一層である。

遺物には、縄文土器、石器、土師器片などがあるが、出土量は少なく本址に伴うものではないと考えられる。

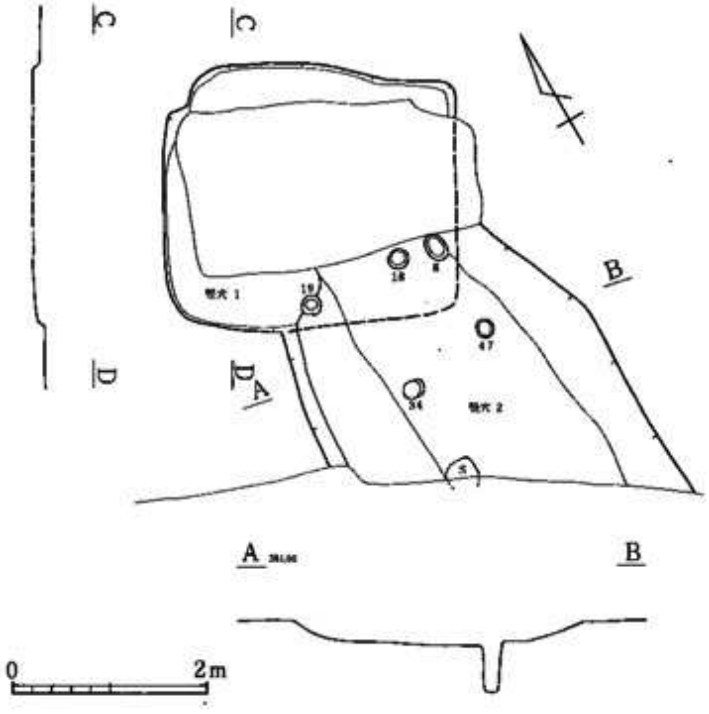
時期は、把握できず、本遺構に伴う施設も認められず、性格も不明である。



挿図5　ＫＺＫ溝状址2

② 竪穴2（挿図6　第1・2・19図）

竪穴1と北隅が重複して検出された。南側が未調査部分に延びており、溝状址となる可能性もあるが、全体形が不明のため竪穴とした。規模は東西で2.9mを測るが、南北方向には3.3m程確認したに止まった。南北の方向軸はN5°Wである。深さは検出面から27cm程である。壁面は緩く立ち上がるもので、底部との境も明瞭でない。底部は北から南へ8cm傾斜している。覆土は調査範囲全体に見られる漆黒色礫土と同じもので一気に埋まっているが、石はほとんど混入していない。本遺構内に検出された穴は、深さもまちまちで規則的な並びはないが、覆土の状態や穴の



挿図6　ＫＺＫ竪穴１・２

直径が皆20cm程となることから本址に伴う可能性がある。

出土遺物には、縄文中期土器、石器、土師器片がある。覆土中からの出土量は比較的多いがみな摩滅し、時間差も認められる。流れ込みによるもので本遺構には伴わないものと考えられる。穴からは、土師器片が出土している。

時期は、穴から出土した遺物から古墳時代と判断したが確実なものではない。性格は不明である。

3）土坑

①　土坑１（挿図７　第２図）

調査範囲の中央部に確認し、土坑２が東に隣接する。平面形は楕円に近い方形で、東西にやや長い。規模は１×0.9mである。深さは56cmを測る。壁面は角度をもって立ち上がり、底部は丸味のあるものである。覆土は黒色土の一層で一気に埋まっている。

遺物には、縄文時代中期土器と、石器の破片がある。

時期は、遺物から縄文時代中期の中頃と判断されるが、本址覆土は押し出し土である漆黒色土と大差ないもので、遺物は流れ込みにより混入した可能性もある。性格は不明である。

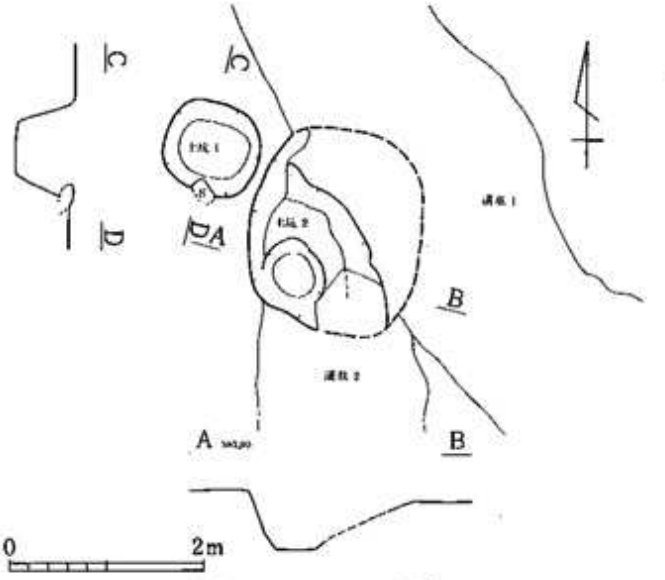
②　土坑２（挿図７　第２図）

溝状址１・２が枝別れするように検出された部分に重複して確認された。それぞれの新旧関係は不明である。平面形は切り合いがあるためはっきりしないが方形に近いもので、規模は径２ｍ

程と考えられる。深さは最深部で59cmを測る壁面は角度をもって立ち上がっている。底部は凹凸があり、南側は穴状に凹んでいる。覆土は黒色土が一気に埋まっている。

遺物には、縄文時代中期土器、黒曜石剥片のほか、土師器として内黒の坏がある。

時期は、遺物等から判断できず不明である。性格も不明である。



挿図7　ＫＺＫ　土坑１・２

③　土坑３（挿図８）

調査範囲の東側に土坑４と近接して確認された。平面形は南北に長い楕円形で、規模は1.4×0.8mを測る。深さは検出面から15cmである。壁面は比較的緩く立ち上がり、底部は凹凸がある。覆土は黒色土の一層である。

遺物は、出土しなかった。

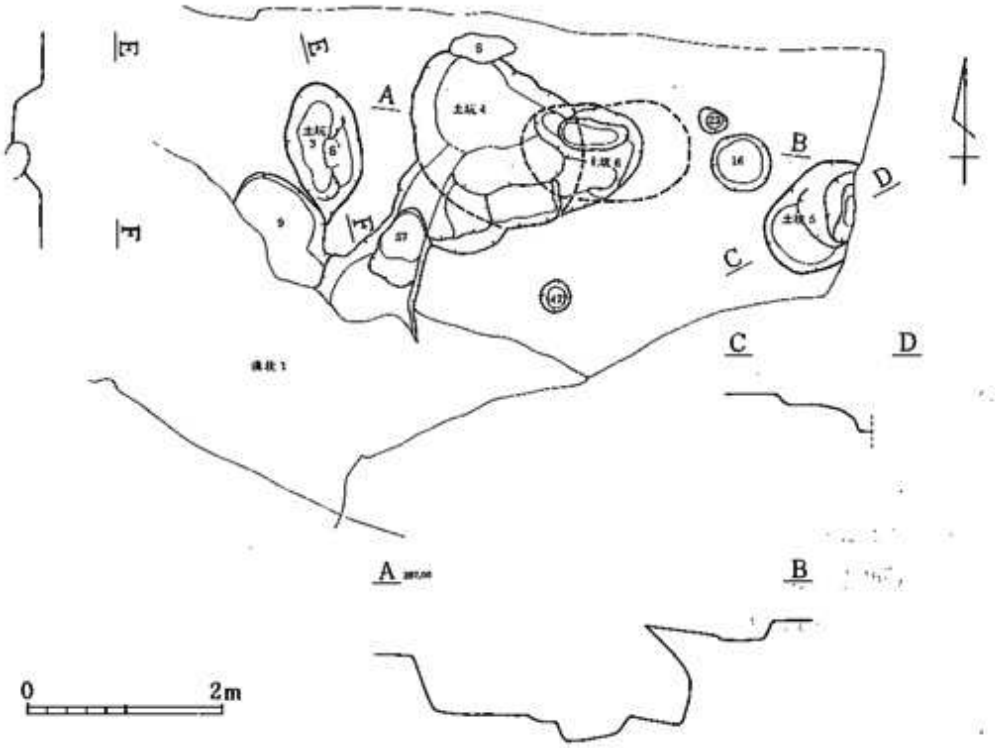
時期、性格は不明である。

④　土坑４（挿図８　第２・３・19図）

土坑６と切り合って調査範囲の東端に確認された。土坑６との新旧関係は不明で、南側を溝状の攪乱に壊されている。平面形はかなり歪んでいるが東西に長い楕円形であったと考えられる。規模は1.9×1.5mを測る。深さは63cmである。南の壁面は別遺構との切り合いがあったのか乱れているが、北側は垂直に近い立ち上がりである。底部は平坦なものである。覆土は他の土坑と同様の黒色土である。

遺物には、縄文土器、石器と図化できないが須恵器、土師器などがある。

時期は、遺物の出土量から古墳時代の可能性があるが、詳細時期、性格は不明である。



挿図８　ＫＺＫ土坑３・４・５・６及び周辺穴

⑤　土坑５（挿図８　第３図）

調査範囲の東隅に確認した。調査区外にかかっており、二つの土坑が重複している可能性がある。平面形は楕円形で、規模は1.3×１ｍを測る。深さは最深部で46cmである。壁面は角度をもって立ち上がる部分と、緩やかな部分とがある。覆土は黒色土で、一気に埋まったものと考えられる。

遺物には、縄文土器、石器があるが出土量は少ない。

時期、性格を判断できる材料はなく、不明である。

⑥　土坑６（挿図８　第３・20図）

調査地の東端に土坑４と重複して確認した。平面形は想定規模1.2×１ｍの楕円と考えられる。深さは１ｍを測る。底部はかなりの凹凸が認められた。東に向かって斜めに掘り込まれており、横穴状となっている。覆土は黒色土で、拳ほどの石が混入しており人為的に一気に埋めているものと判断される。

遺物には、縄文時代土器、石器のほか、土師器甕、内黒坏がある。

時期は、遺物が埋土と判断される覆土中からの出土で、本址に直接伴なわないため、不明である。性格としては、室などの貯蔵施設が考えられ、別遺構と判断した土坑４も本址施設の一部となる可能性がある。

４）その他の遺構

① 穴址（挿図８・９　第３・20図）

調査区内で確認された穴は16ケで、北側に比較的多い。平面形はほとんどのものが円形である。規模は径20cmから80cmを測るものまであるが、40cm程のものが多い。深さは検出面から10～58cmのものがある。覆土はみな黒色土である。

遺物として、縄文土器、石器、土師器片などを伴うものがある。しかし、それぞれの穴に直接伴うと思われるものはない。

時期は、不明である。

性格としては、いずれもなんらかの柱を建てた穴と考えられるが、規則的な配列は認められず具体的な性格は不明である。

② 土器包含層（挿図９）

調査区内のほぼ全体に認められた層で、北東側にいくほど石が多量に混入している。北側から久米川に向かって一気に流れ出たものと考えられる。漆黒色を呈し、30～40cmの厚さがある。出土する遺物は縄文時代中期の土器がほとんどである。遺物量が多いことから調査地の北側にはこの時期の集落遺跡が存在している事がうかがえる。

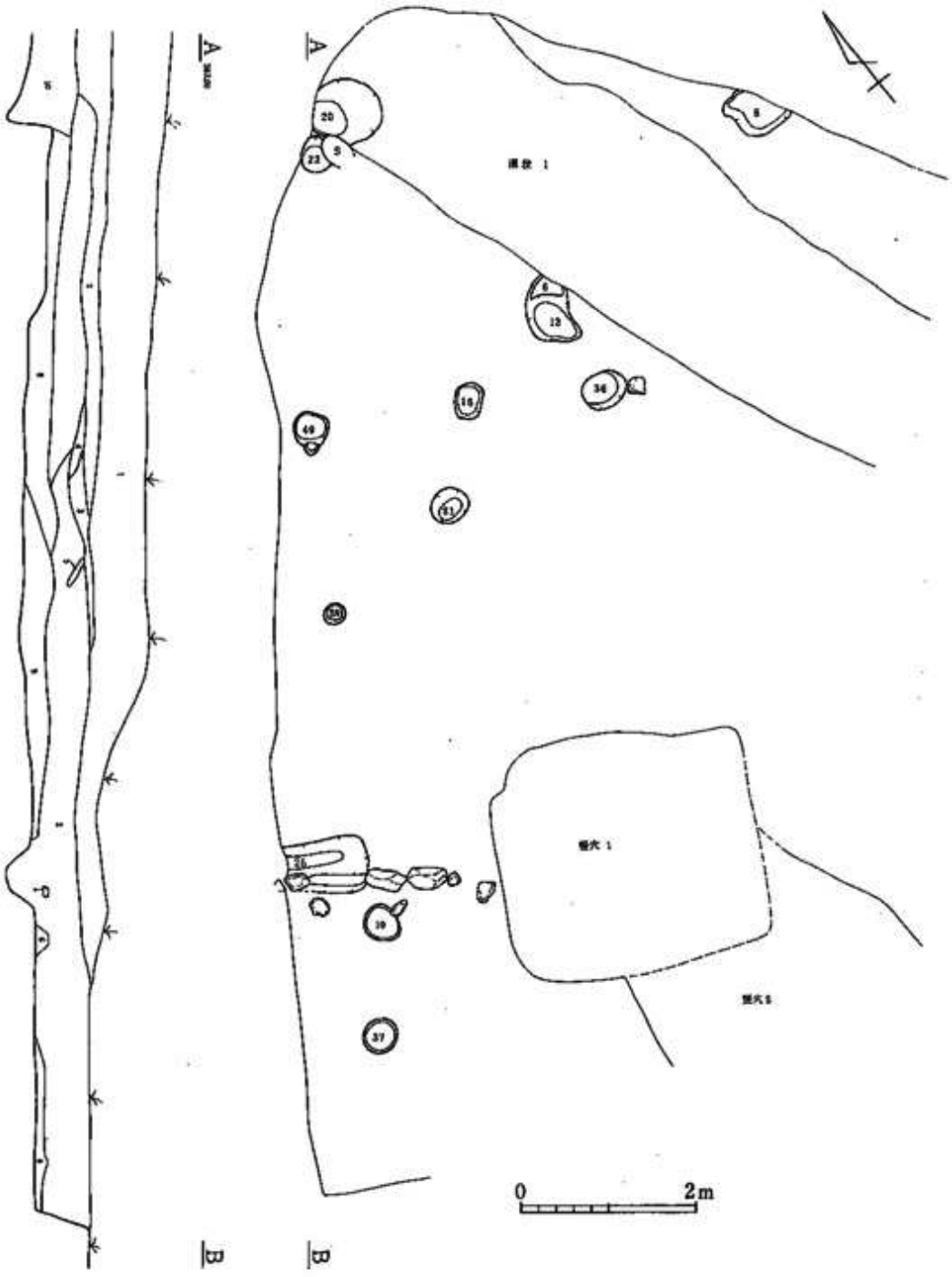
５）遺構外出土遺物（第４～18・21～31図）

縄文時代

縄文時代の遺物は、大半が中期に属するもので、わずかに後期の土器片が出土した。

第４～６・８図は、中期中葉の典型的な土器群であり、縄文時代出土資料の大半がこの時期のものである。文様・器形等該期の上伊那・諏訪地方のものと共通する。出土資料のうち完形品は無いが、かなり大きな破片もあり、近接地から投棄されたものと判断される。

第７図１～21は、いわゆる平出Ⅲ類Ａに属する土器である。所属時期は、前述土器群とほぼ同



1．礫混り表土　4．黄色土　7．黒色礫土　10．黒色土（礫含む）
2．暗褐色土　5．暗褐色砂質土　8．漆黒色礫土
3．砂混り暗褐色土　6．褐色土　9．漆黒色土

挿図9　ＫＺＫ北西穴群及び用地境土層断面図

時期のものであるが、斜格子状の沈線を施すもの（15・16）、地文に縄文を施すもの（21）など同種土器としては古い様相を示すのもある。

第７図22～31は、蓮花状文を施し、焼成・胎土も他の資料とは異なるもので、北陸系の土器群と考えられる。

第９図１～４は、土器底部で上部の文様部分を欠失するが、いずれも他の土器同様中期中葉に属するものと考えられる。

第９図５～10・第10図１～９は、粘土紐貼付文を施し、中期中葉末から後葉初期に特徴的にみられる土器である。

第10図10～16は、櫛形文を施す一群であり、前述土器と所属時期の共通するものである。

第10図17～23は、沈線文を主文様とする土器で、東海系咲畑式土器とされているものである。

第10図24～34・第11図１～４は、中期後半の土器群であり、そのうち第11図１～４は結節縄文を特徴とする当地方中期最終末期に属す一群である。

第11図５・６は土偶片である。５は腰部、６は胴部の破片であるが、いずれも角押文を施しており、中期中葉に属するものである。

第11図17は、有孔鍔付土器のミニュチュア土器であり、口縁部下に１本の隆帯を施し、その下部に穿孔があり、胎土・焼成とも良好で丁寧に作られている。

第11図８は、吊手土器の吊手部分破片で、中期中葉に属する。

第11図９・10は精緻な胎土で、沈線を施した縄文時代後期の土器である。

第11図11・12は、縄文時代晩期もしくは弥生時代初期の壷形土器の破片で、条痕文土器と考えられるもので、隆帯に特徴がある。

弥生時代

弥生時代の土器は、二片（第11図13・14）が出土したのみである。両者とも壷の破片と思われるが、詳細時期を判断できるものではない。石器として本期に位置づくと考えられるものは、第28図12～17の磨製及び半磨製石斧と第29図１の有肩扇状形石器の破片があるが、石斧の研磨は剝離痕を残しており、遺構に伴ったものではないため確実な時期判断はできない。また、打製石斧の中形、小形のものや、横刃型石器とした中で、打製石包丁ともいえるもの（第27図６～８）、敲打器、砥石の中にも本期に属するものが含まれている可能性がある。しかし、土器の出土は皆無に等しく、本調査地点周辺では、本時期の遺構等は希薄と考えられる。

古墳時代

後期を中心に土師器、須恵器が出土している。本期遺物は、調査範囲の北側からの出土が多い。このうち第12図１～16、13図１、14図４～９・12・15・17・18は、溝状址１の上層から出土した。この層は土器包含層の記述でもふれたが、調査範囲全体に見られる漆黒色土と同じものである。図化可能な遺物のほとんどは、溝状址１の北西部周辺に特に集中して出土している。

須恵器として、壷（第12図１）、甑（14図１）、高坏（８・９）、蓋坏（７）等がある。壷は頸部に波状紋を施し、外面は叩き整形で、内面は叩きのすり消しを行なっている。甑は、胴部下半が削り整形されているもので、胴部最大径やや上に穿孔がなされ、同位置に波状紋を巡らしている。14図８の高坏は背の低いもので、坏部は底部から急激に立ち上がっている。全体をロクロのなでで整形し、坏部に波状紋を付している。９の高坏は、有蓋の高坏の坏部で、底部は削り整形されている。受部からの立ち上がりは、やや内傾している。蓋坏は、身部で、受部から上は垂直に立ち上がる。口縁端部は内側からつまみ上げて仕上げられている。底部の削り成形はあまり高位まで行なわれていない。これら須恵器の焼成は良好で、胎土中に小石粒及び微小石粒を含み、甑には黒粒も見られる。

土師器には壷（14図11・15）、甕（12・13）、甑（10）、高坏（16～18・20、第15図２・３）がある。14図11の壷底部は、内面にクシ状工具の整形痕が残っており、外面はクシ状工具の整形が、なでにより消されている。15は小形のもので口縁部は破損している。破損部に意図的なものか、使用によるものかは不明であるが、すれが認められる。内面は指頭によるなで、外面はクシ状工具による整形痕をヘラによりすり消している。甑は、多孔のもので、外面は荒れている。内面にはクシ状工具による整形痕が残っている。高坏は、脚部のみの出土が多く、長いものと、短いものとがある。坏部が残存するものは14図16のみで、坏部には明瞭な稜が認められる。15図３は、三カ所にすかしをあしらったもので、坏部内面は黒色処理されている。どの高坏も焼成は普通、胎土中に小石粒を含み、外面はすべてヘラ磨きで整形されている。ほかに、本時期の遺物として埴輪（第15図４～12）があり、調査範囲の北東部から出土している。この北側に古墳の存在が考えられるが、現在は平坦地となっており、その痕跡はまったく認められない。上川路廃寺の建立に伴う造成等で削平されているものと考えられる。

奈良・平安時代以降

今次調査では、奈良・平安時代に属する遺物の出土は無かったが、上川路廃寺址に関連するものとして、布目瓦（第16図１）が出土している。全体に摩滅が激しく、一点のみの出土であることから、本調査地点には、瓦を伴った建物等は存在しなかったと考えられる。また、瓦とほぼ同位置で火鉢と思われるもの（２・３）と、図化できないが瓦塔が出土している。いずれも北の斜面の表層に近い層から出土し、これら遺物の時期は不明で、廃寺址に直接結びつくものではないが、瓦塔などは遺物の性格上、後世の寺院址等の規模を探る一つの手がかりになると考えられる。

ほかに、中世以降の遺物として、陶器、磁器、天目釉器、すり鉢などがある。陶器には碗（第16図４～６・８・９）、皿（７・11）、鉢（第17図１）、灯明皿（２）がある。第16図４の底部は碗としたが皿となる可能性がある遺物で、溝状址１の底部に密着して出土した。緑色の厚い釉薬が付されている。５と６の碗は削り出し高台で、内面はロクロ外面は削りによる整形である。８の碗には濃い緑色で、何か描かれている。手書きによるものであるが何が描がかれているかは不明である。また、底部には墨書も見られるが字体は不明である。11の皿にはプリントにより絵柄が藍色で付されている。９の碗は白色の釉薬が付されており、残りものは鉢も皿も黄色ないし黄白色で、５の碗は厚くたまった部分が茶色に発色している。また、10の碗と11の皿の釉薬は同じものである。第17図１の鉢には淡緑色の、２の灯明皿には白色の釉薬が付されている。詳細時期は不明であるが、第16図４～８は中世に位置づくものと考えられる。９～11、第17図１・２はこれより後出のものと思われる。

須恵質の胎土のものに香炉と思われるもの（第17図３）、皿（４）徳利と思われるもの（５）がある。香炉としたものの外面には灰白色の釉薬が付されている。徳利としたものは外面に淡茶色、内面に黄緑色の釉薬が付されている。底部には緑色の顔料で何か描かれているが、絵であるのか文字であるのかは不明である。皿には濃緑色で文様が付され、釉薬は内外面とも緑灰色である。これら須恵質の遺物の時期は第16図９～11等と同じ時期であろう。

磁器には鉢（第17図７）と茶碗（６・８・９）がある。いずれも藍色で文様が付されている。６の茶碗と７の鉢の胎土は、後者の茶碗の胎土と比べやや軟質で、先出期のものであろう。

鉄釉の付されたものに壺（第17図10・15・16）、茶碗（11～14）がある。10は仏花瓶で、釉薬は茶碗と同様の黒色である。15・16は茶色の釉薬が付されたもので、壺の底部と考えられる。時期は中世から近代にかけてのものと思われる。

摺鉢には第18図１～15がある。１～10はカキ目の粗いもので、７～10の底部には削り整形が認められる。どれも茶色の鉄釉が内外面全体に付され、１・７～10はハケ塗りによるものである。時期は１～10は中世、11～15が近・現代のものである。

土師質の遺物として、甕（第18図16・17）、碗（18）、などがある。16は鉢となる可能性のあるもので、外面は荒れており、内面にカキメ痕が認められる。ほかに、人面の飾り部分（19）があり、鉢などに付されていたものと考えられる。時期は中世以降であろう。

Ⅳ　ま　と　め

今回の調査は、集会所建設範囲内に限定された調査であり、遺跡のごく一部について探りを入れたといえる程度ではあるが、いくつかの新事実や問題を提起してくれたといえる。そのいくつかを示し、まとめとしたい。

本遺跡は、その名が示すとおり、当地を代表する禅宗の名刹開善寺の旧境内内に所在する。遺跡の所在する地は、上川路地区の中心にあたり、北西方の山麓からの傾斜地が終息し、平担となる位置で久米川に臨む河岸段丘上にある。概観すると連続した平担地の感が強いが、比高差２ｍ前後の小段丘が何箇所かに認められる。調査地点は、丁度その小段丘崖の所在する位置に当たり、本調査において砂礫の推積が複雑に変化する様子が観察された。基盤での比高差は1.5ｍ程、地表面での比高差１ｍ程であった。このわずかな地形変化が、縄文時代以降人々の生活において、土地利用の変化をもたらしていたといえる。

そうした地形条件下において、縄文時代集落の一端が示された。調査地点内に段丘の南端部があたり、住居址こそ確認されなかったが、土坑とともに土器、石器の良好な資料が検出された。この地点より北側にあたる小段丘上位の段丘面上に、かなり規模の大きな集落が存在すると推測される。なお、下位段丘面上は遺物出土量は多いものの遺構の存在は確認できず、土砂の流入等地形的条件下において、生活中心地外であったと判断される。

次に、今次調査において最も出土遺物の多かった古墳時代についてであるが、御猿堂古墳をはじめとする周辺の諸古墳との強いつながりをうかがわせるものである。先述の地形的制約のため、住居址等の所在地は、北方段丘面上及び南側久米川に面した付近に求められる。今次調査及び過去の採集資料等により、かなり大規模な集落が展開していたといえる。なお、今回の調査で埴輪片の出土があり、消滅した古墳の存在もしくは、埴輪製作地が近隣に所在することが予測される。いずれにしても、当地を含む一帯が、長野県を代表するとされる当地方の古墳時代後期の様相を知る上で、きわめて重要な位置付けされる地であることの一端を示してくれたといえる。

続く奈良時代及び平安時代における状況も、古墳時代と同様といえ、遺物出土量は多いものの、遺構の存在は確認できなかった。しかし先述のとおり、北側の一帯には白鳳期と考えられる布目瓦の多出する地があり、当時の伽藍配置の中でどのような位置付けがなされるかが調査前における焦点でもあったが、布目瓦自体はわずかの出土であり、その中心は今回の調査地点北側一帯にあったことが示されたといえる。しかし、既出土瓦の状況から、かなり規模の大きな寺院であったことは大方の認めるところであり、今回の調査地点も何等かの形で伽藍の一画を成していたこ

とも考えなければならず、周辺の調査等については慎重に対応すべきものといえる。

現在の開善寺の開基は、鎌倉時代伊賀良庄地頭北条江間氏によるとされ、開禅寺と称したとされる。その後、小笠原氏の隆盛の中でその守護を受け、開善寺と改称し、更に発展をとげたものである。当時の膨大な寺域の中で、本地点もその一画を成していたことはいうまでもなく、今次調査においても多量の該期遺物の出土を見ている。

以上、今回の調査結果により判断される事実、及び問題のいくつかを示したが、たまたま調査地点内において遺構の検出量は少なかったといえる。しかし、調査結果及び諸々の状況を勘案すれば、縄文時代中期以降の人々が、連綿と生活の地としていたことは否定できず、当地方における歴史解明上きわめて重要な位置付けの成される遺跡といえ、今後において、既出土資料の再検討を計るとともに、将来の諸開発等にあたっては、慎重に対応することにより、さらに具体的な姿が導き出されるものといえる。

参考文献

市村咸人　1955「下伊那史」第2巻　下伊那史編纂会

市村咸人　1955「下伊那史」第3巻　下伊那史編纂会

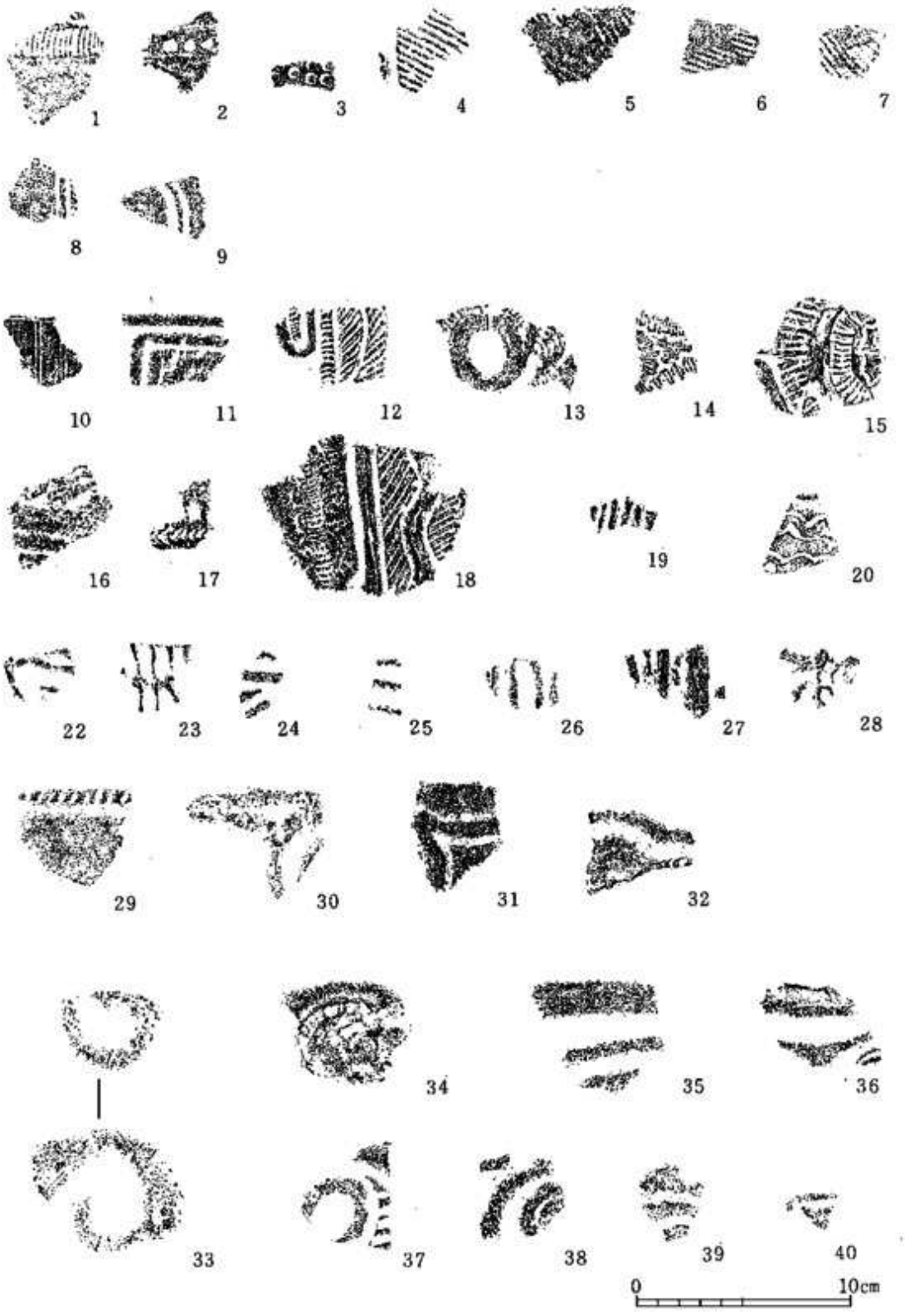
岡谷市教育委員会　1995　「梨久保遺跡」

松島信幸　1966「伊那谷の段丘」　下伊那地質誌調査資料No.2

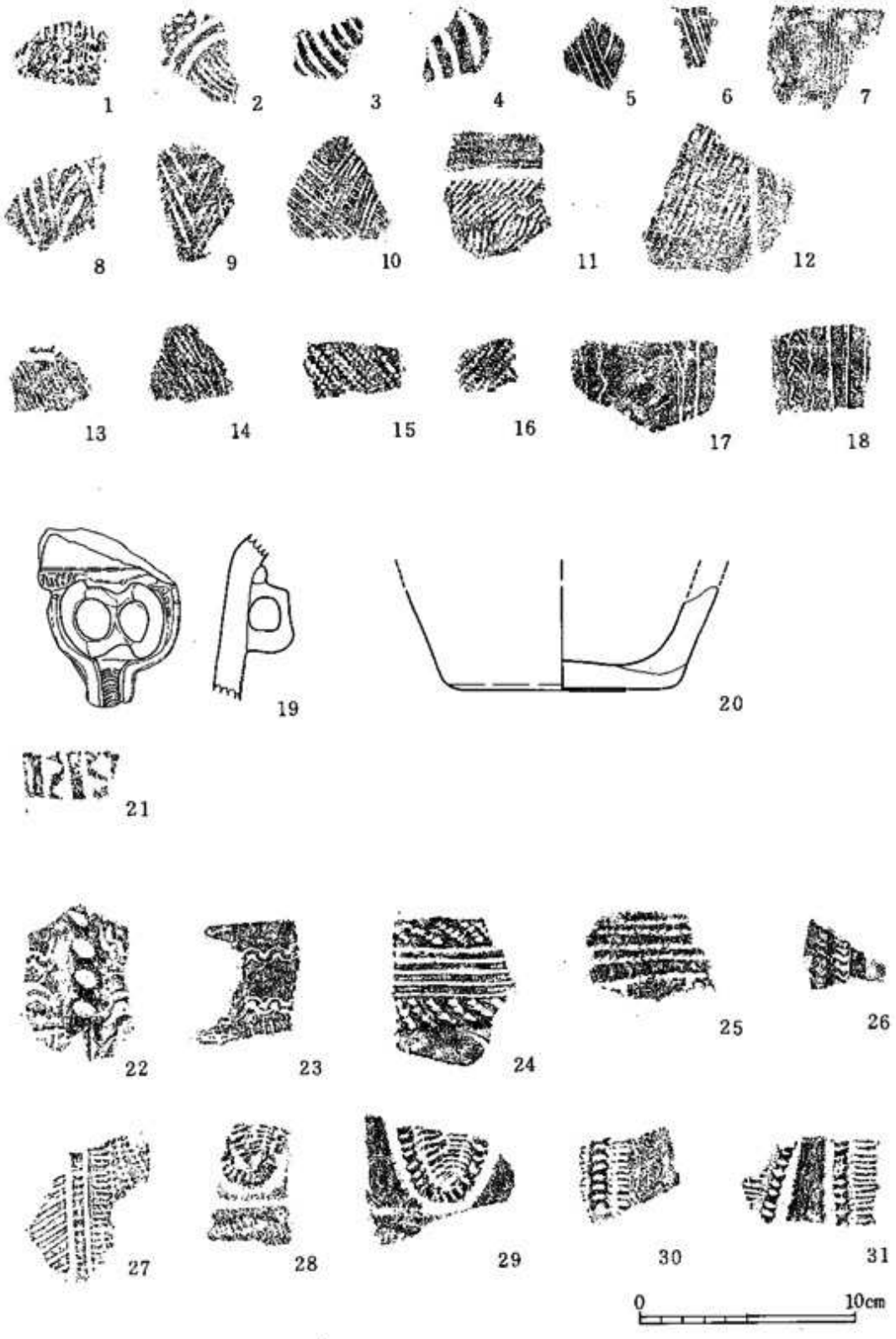
飯田市教育委員会　1974「開善寺境内遺跡」

飯田市教育委員会　1975「前の原・塚原」

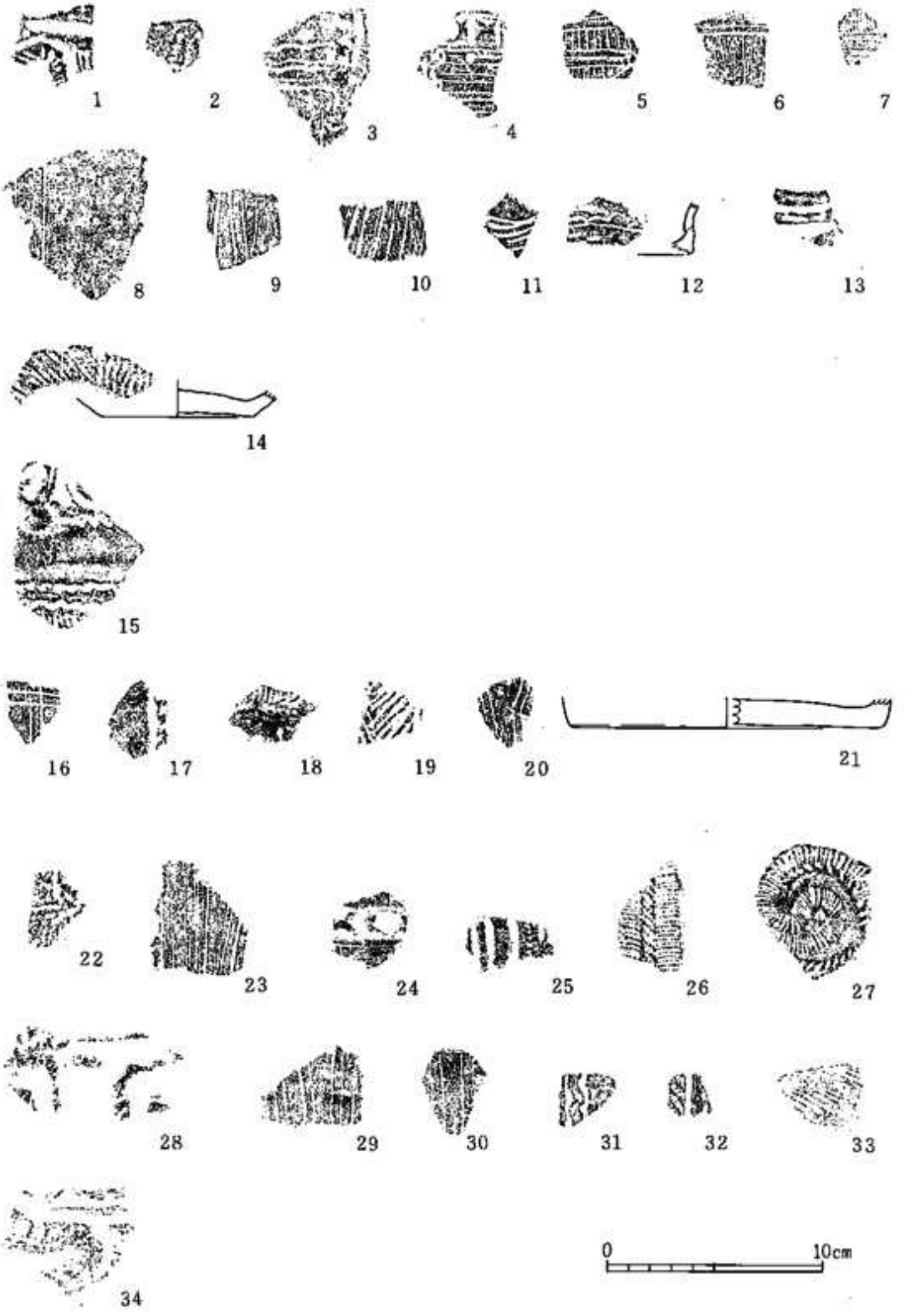
図　　版



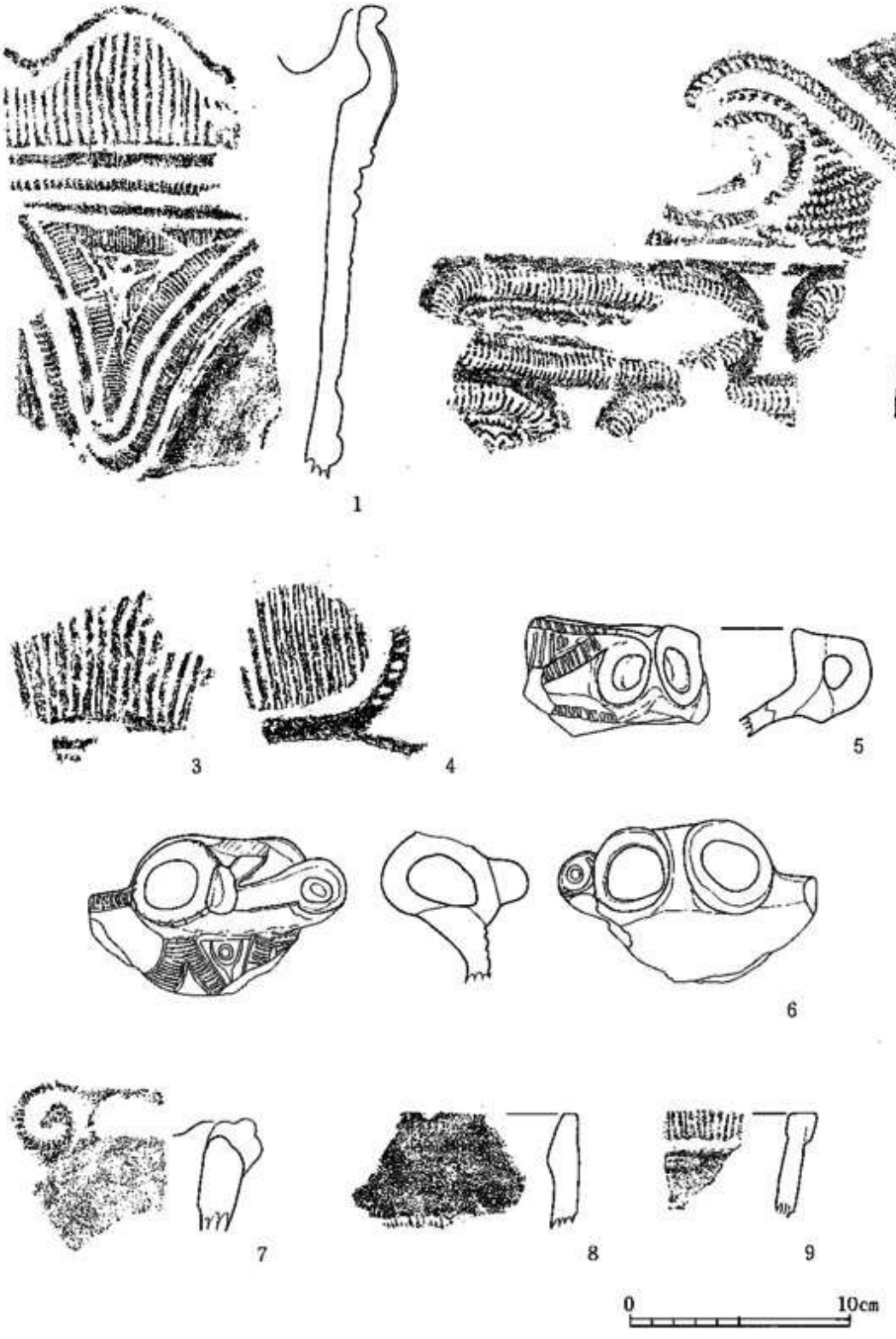
第1図　ＫＺＫ　竪穴１・２出土土器



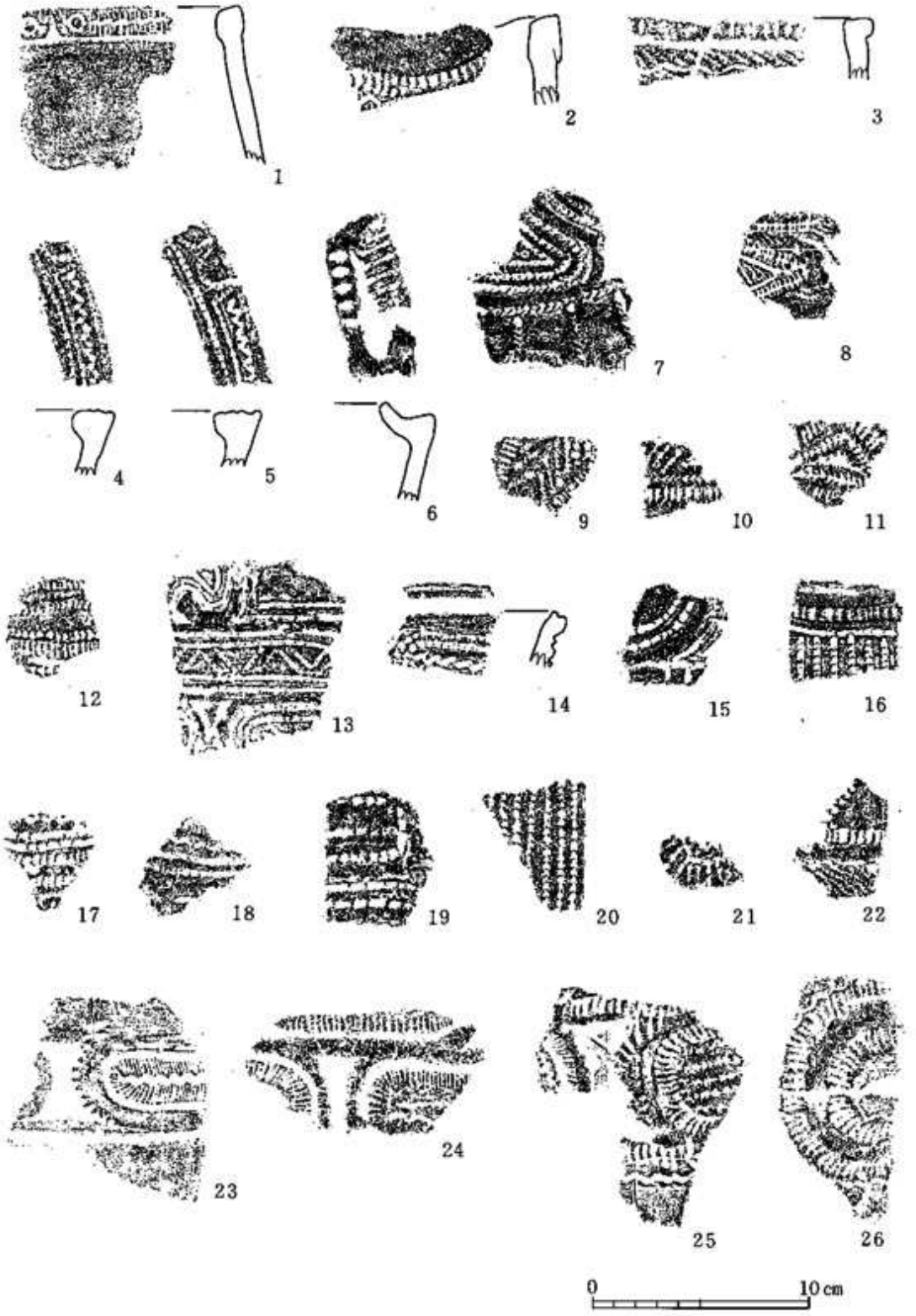
第2図　ＫＺＫ　竪穴2、土坑1・2・4出土土器



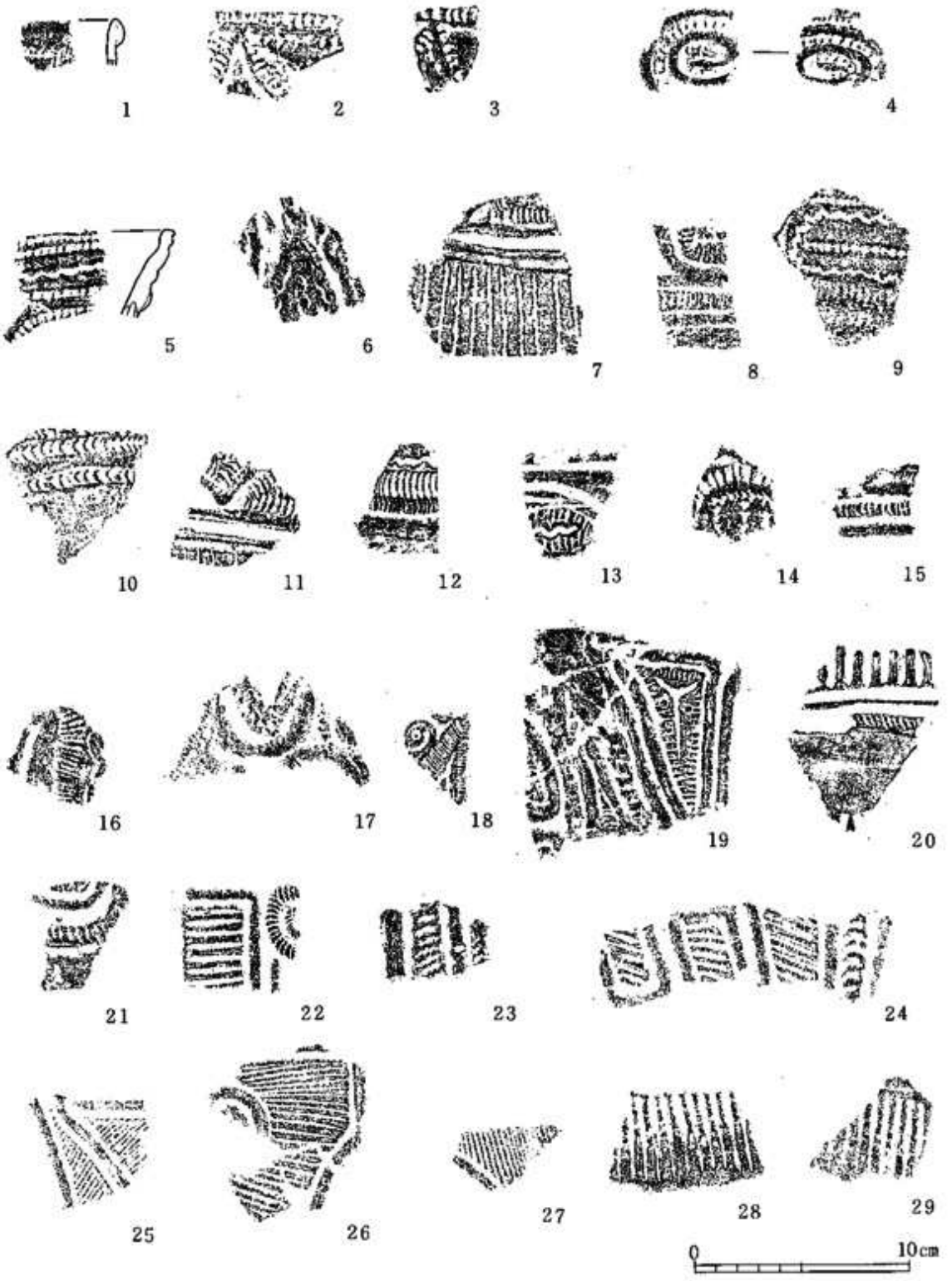
第3図　ＫＺＫ　土坑４～６、穴出土土器



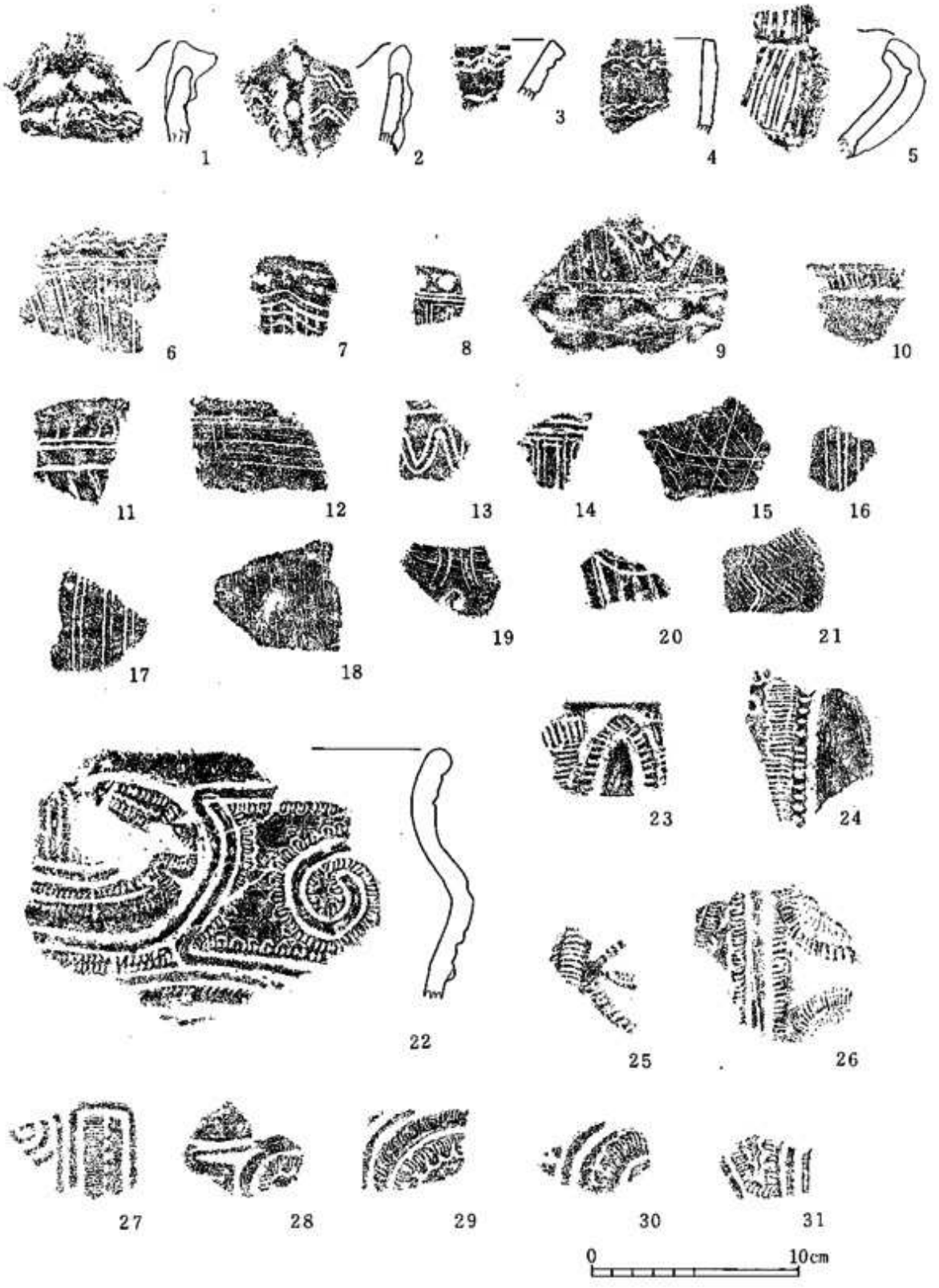
第4図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



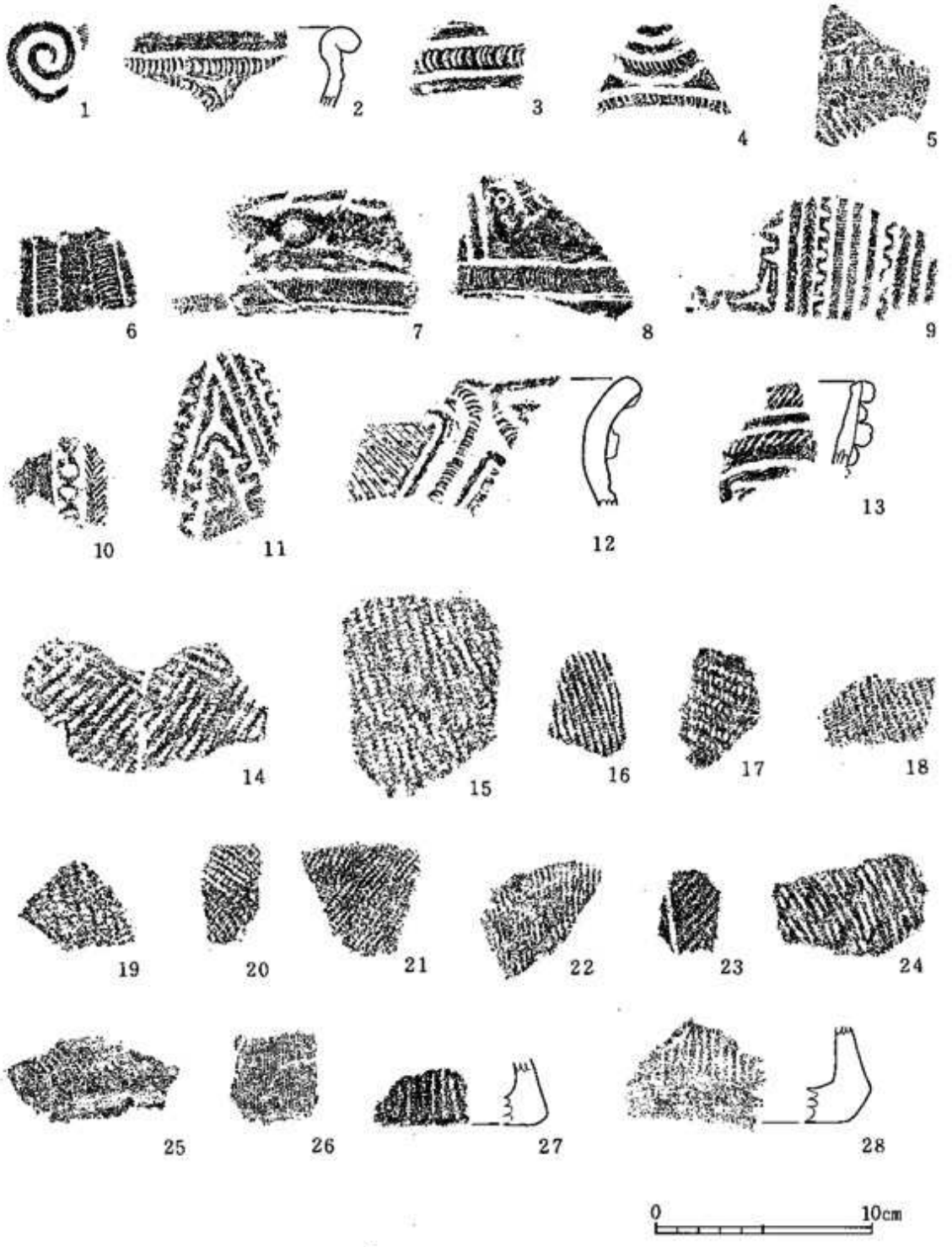
第5図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



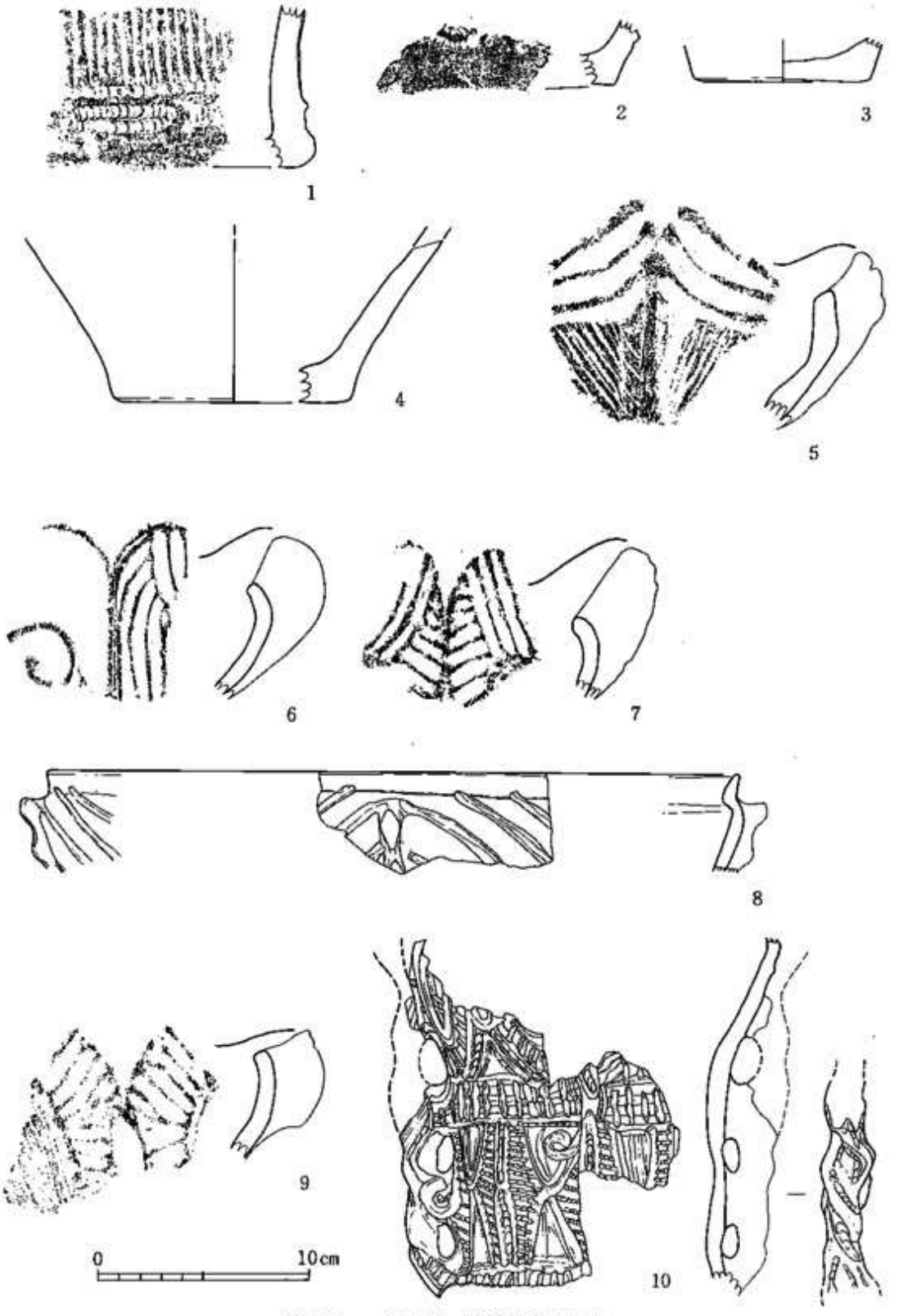
第6図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



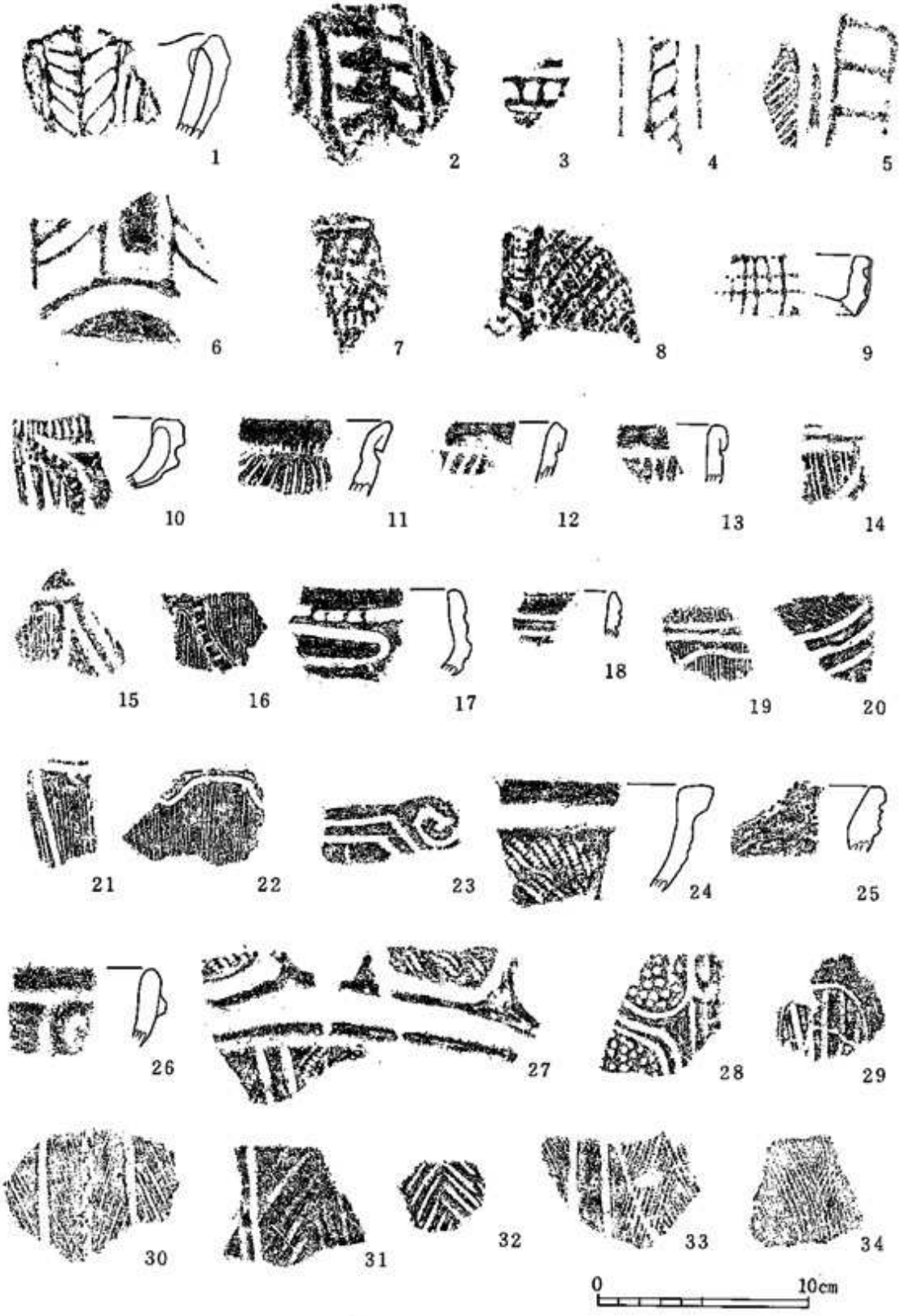
第7図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



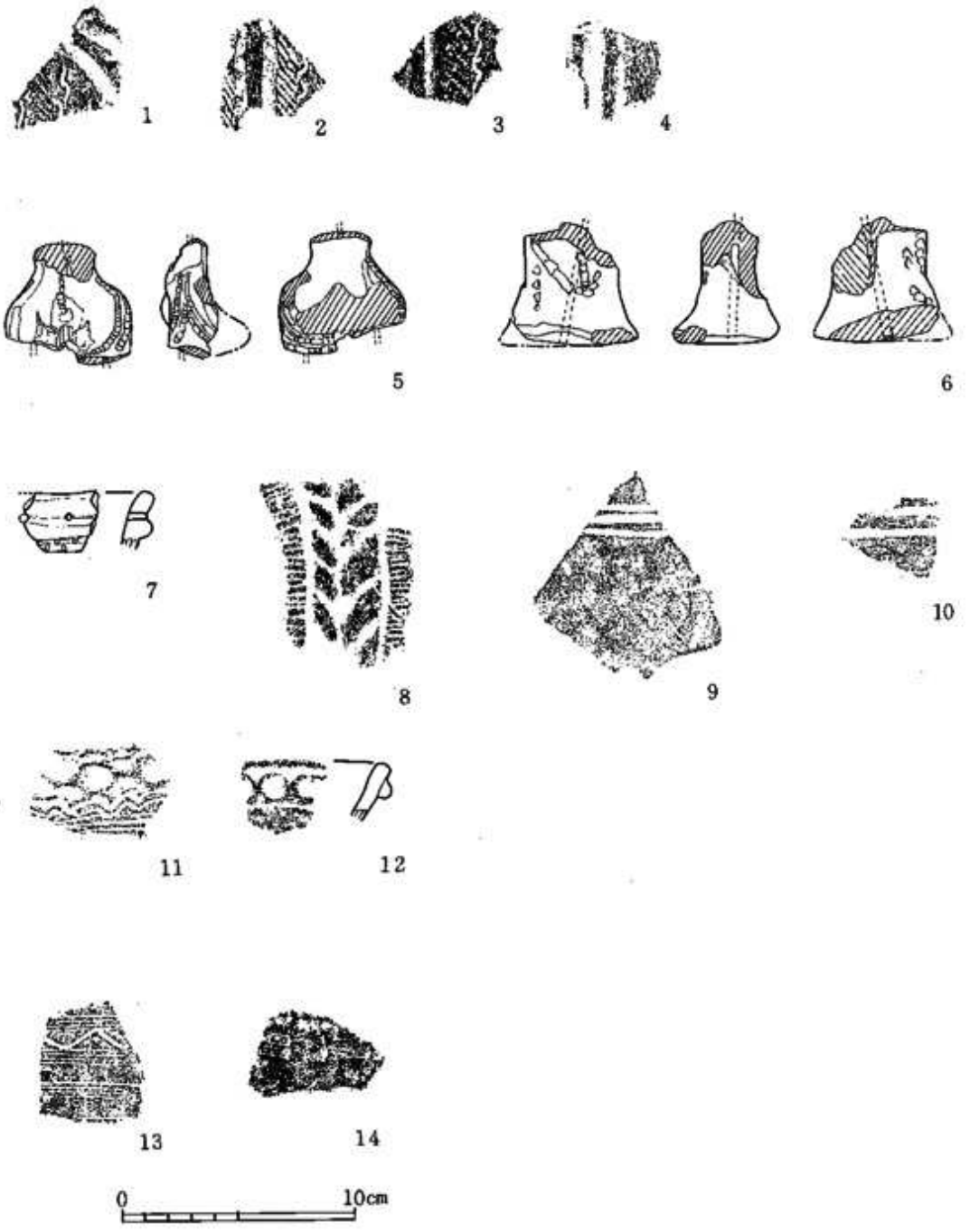
第8図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



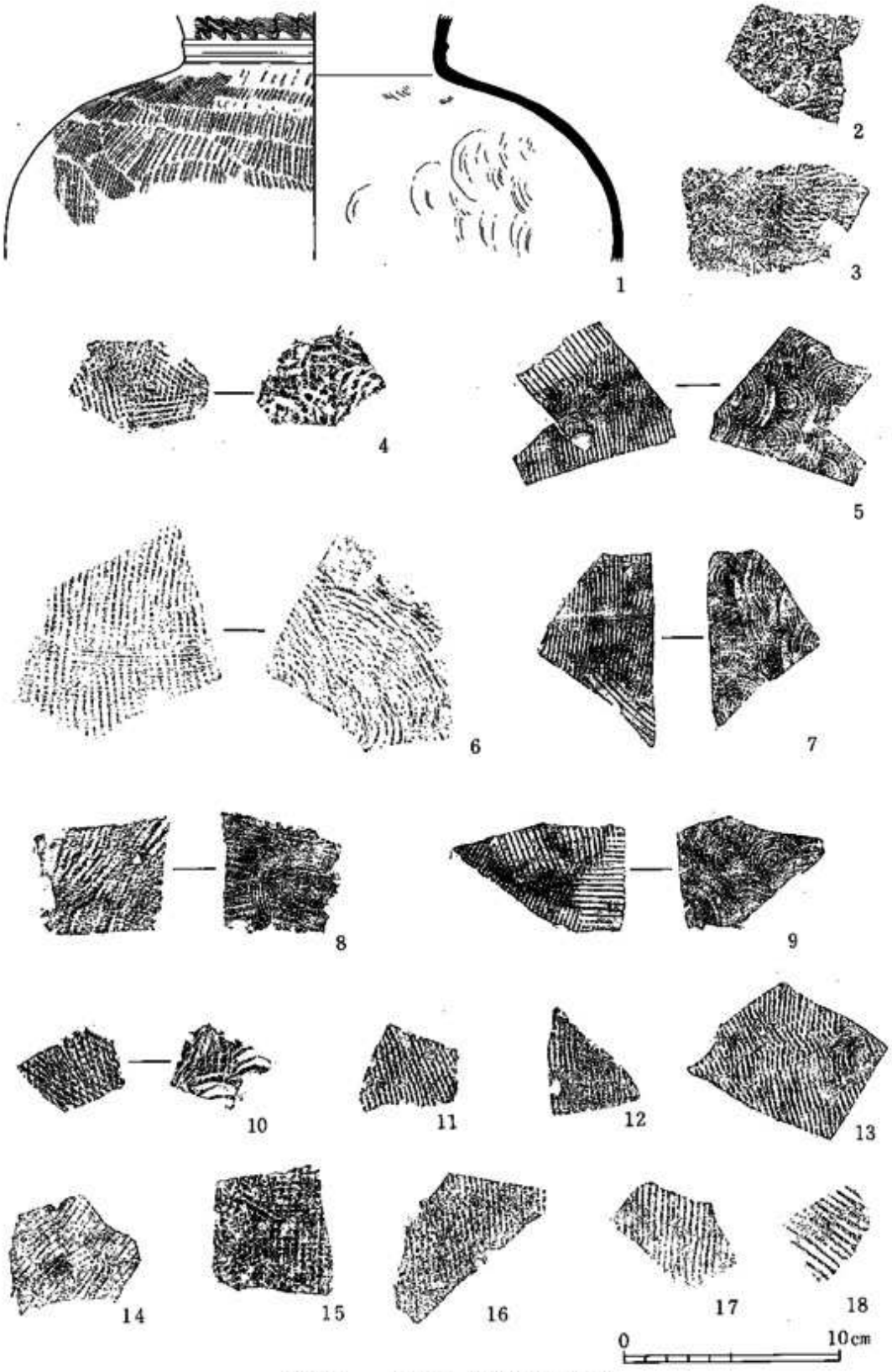
第9図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



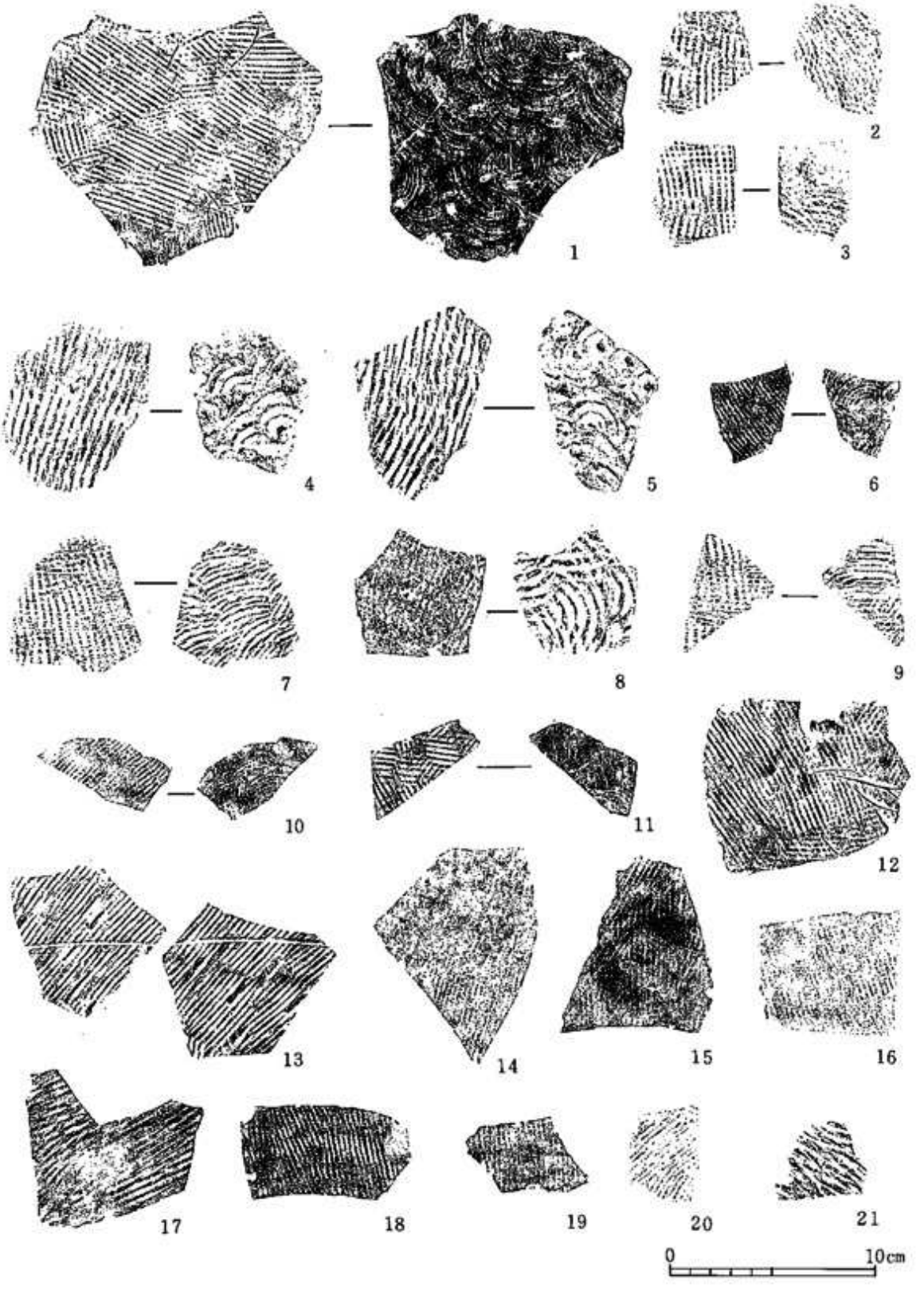
第10図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



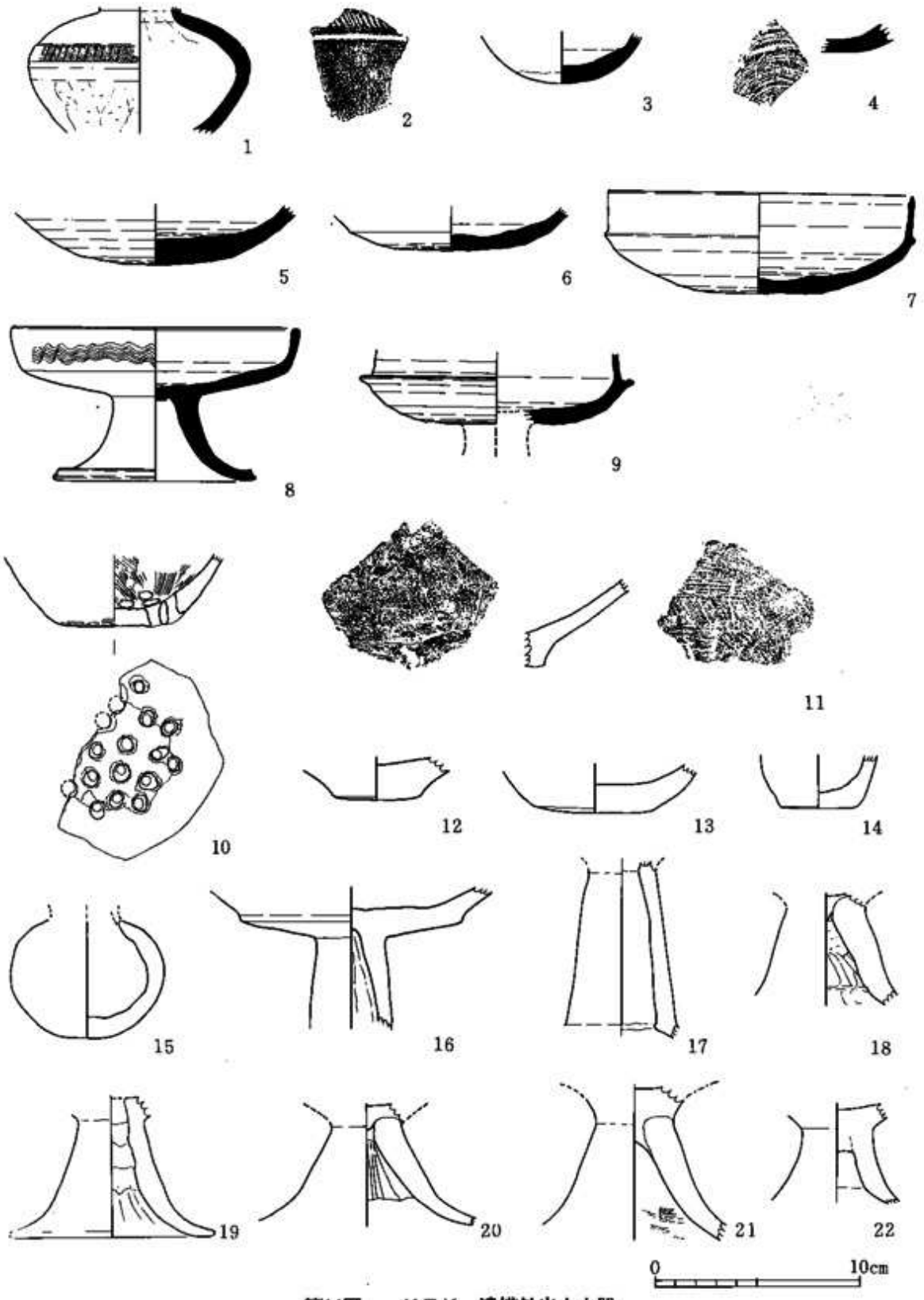
第11図　　ＫＺＫ　遺構外出土土器



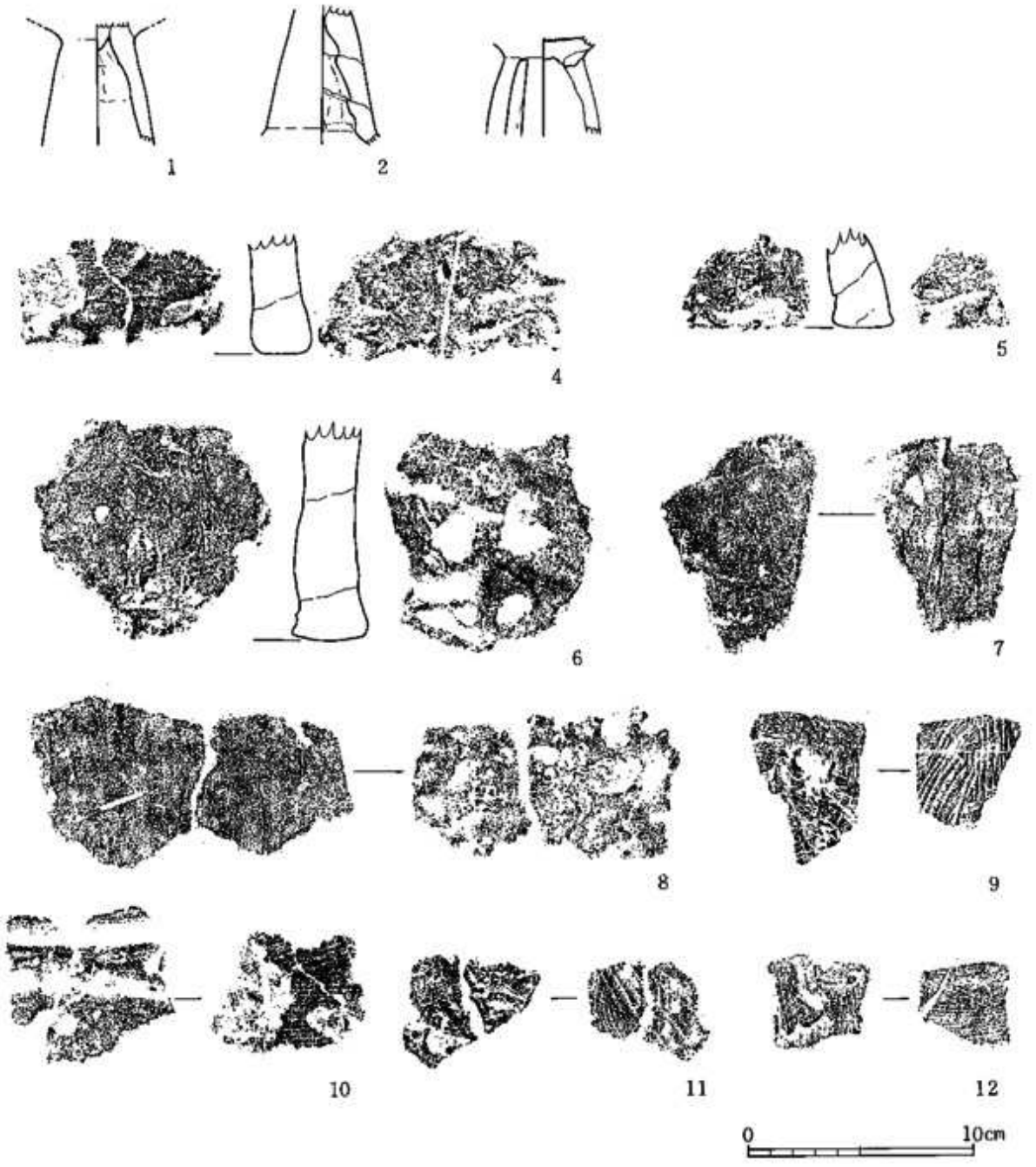
第12図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



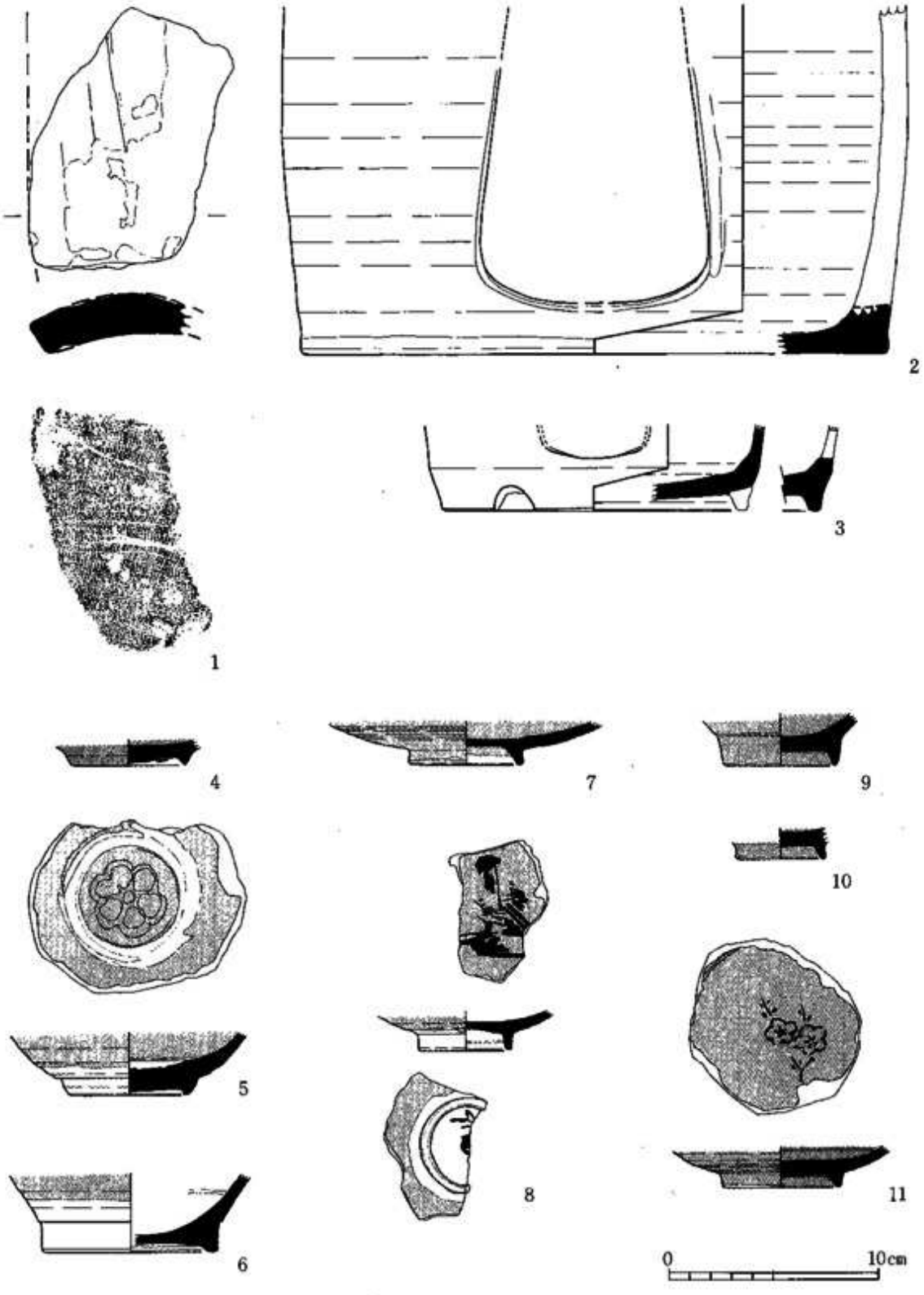
第13図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



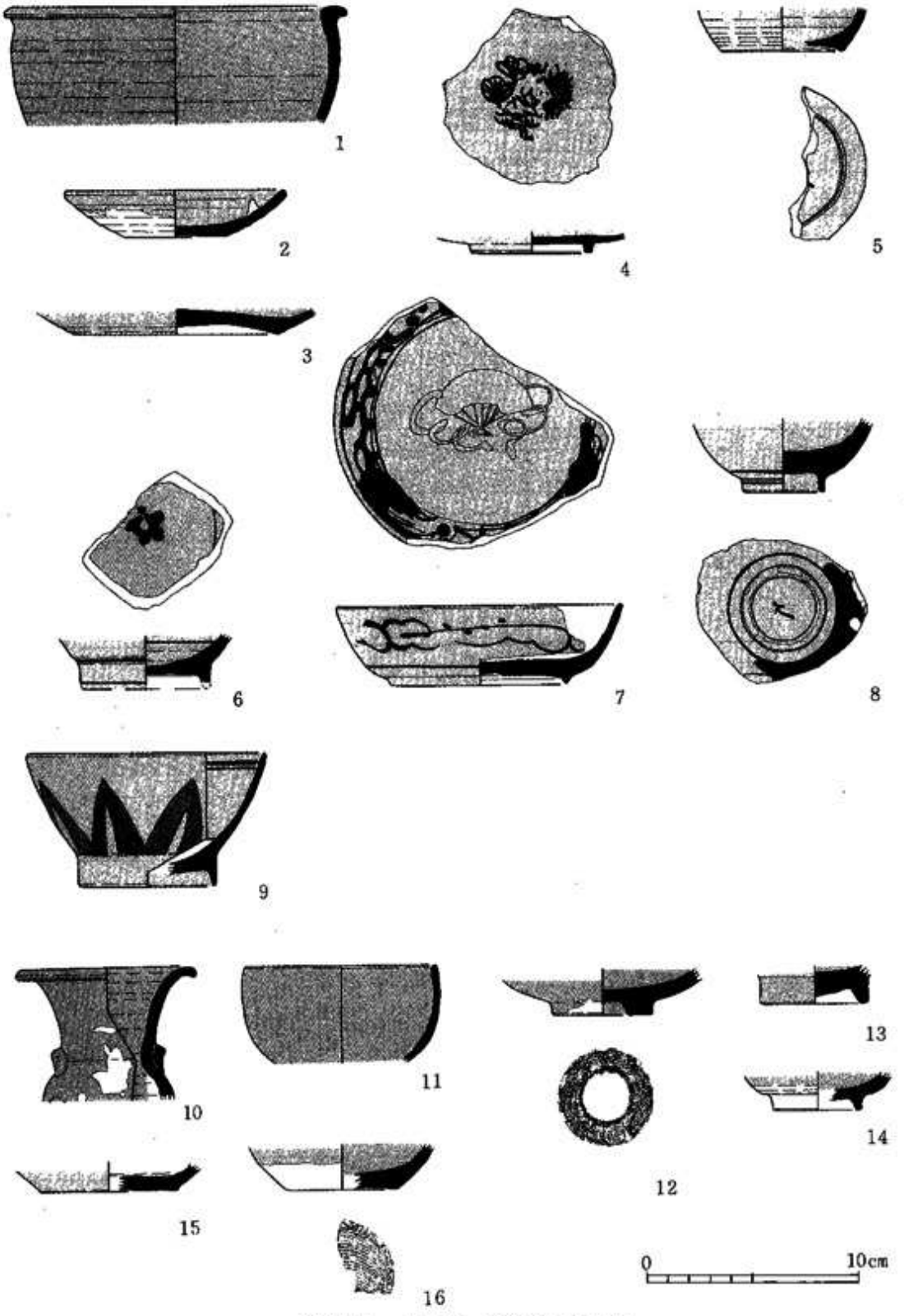
第14図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



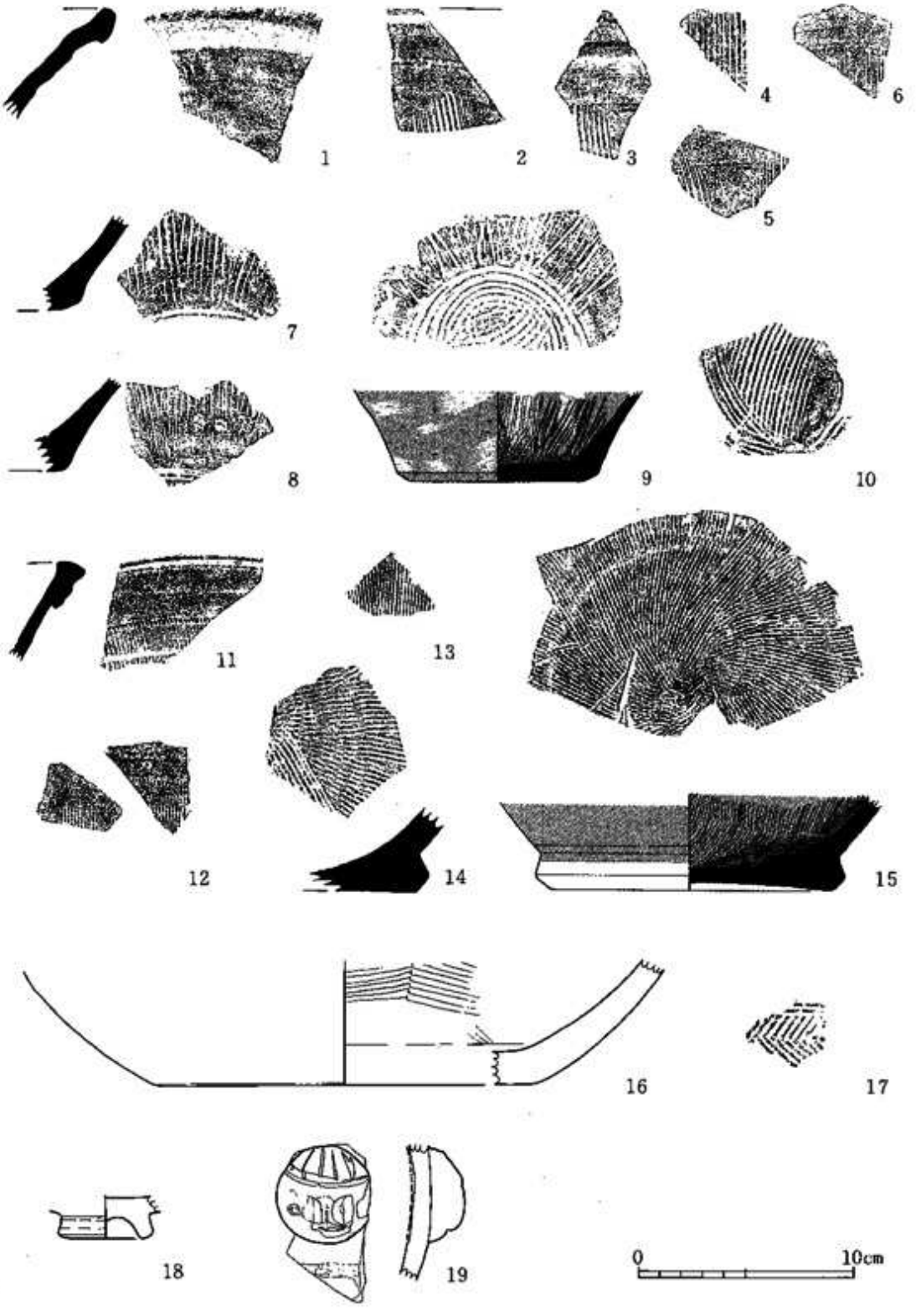
第15図　ＫＺＫ　遺構外出土土器、埴輪



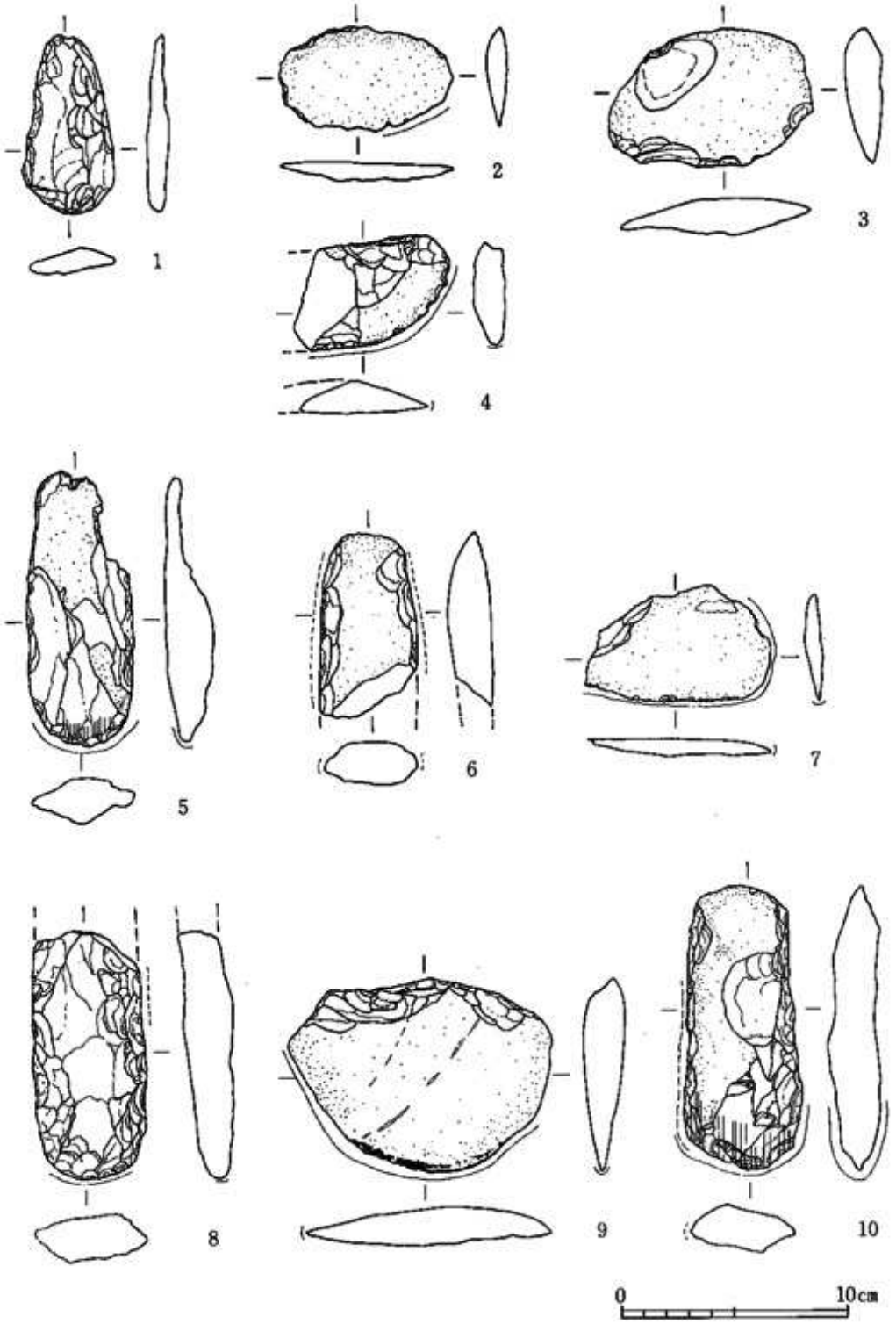
第16図　ＫＺＫ　遺構外出土瓦、土器



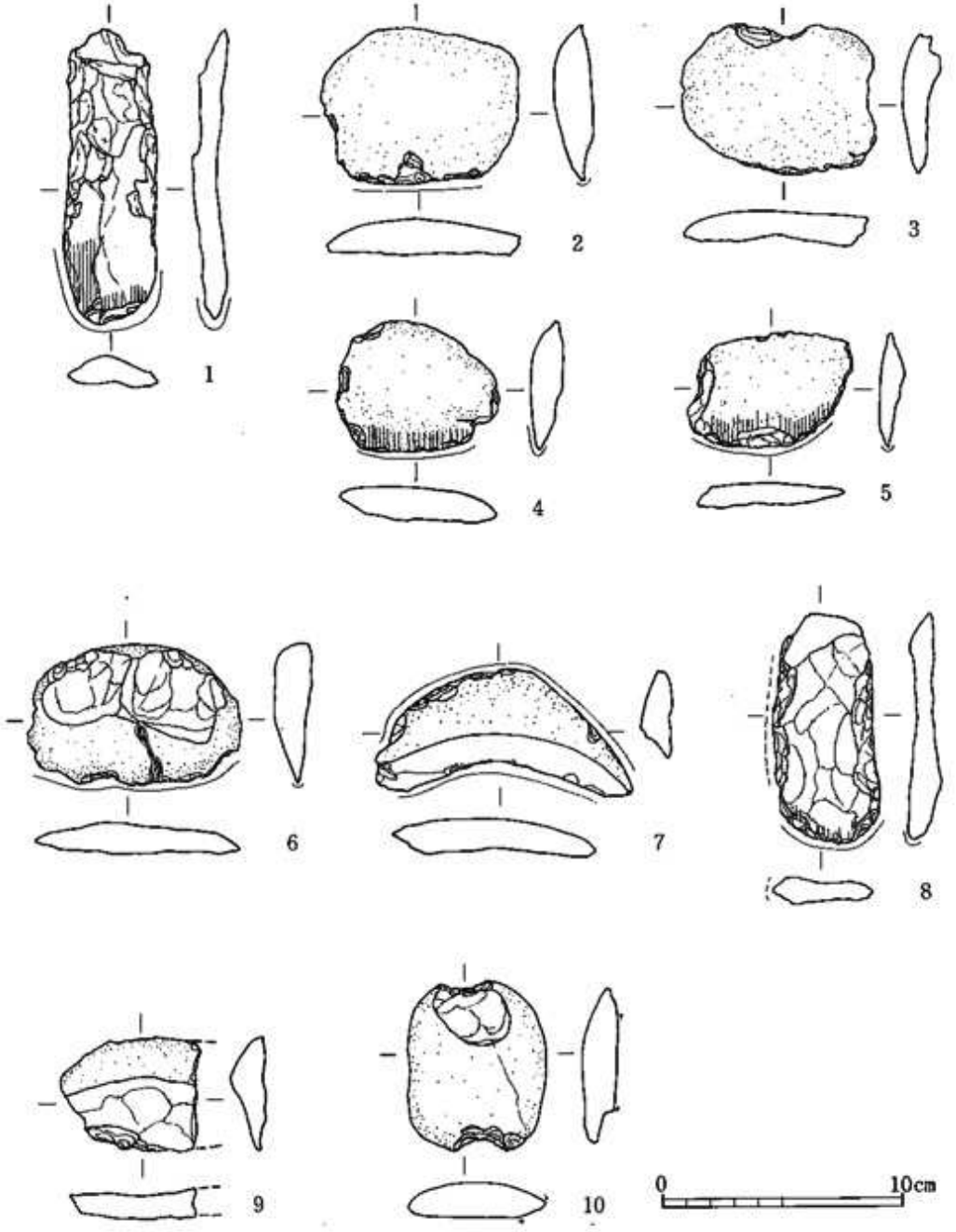
第17図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



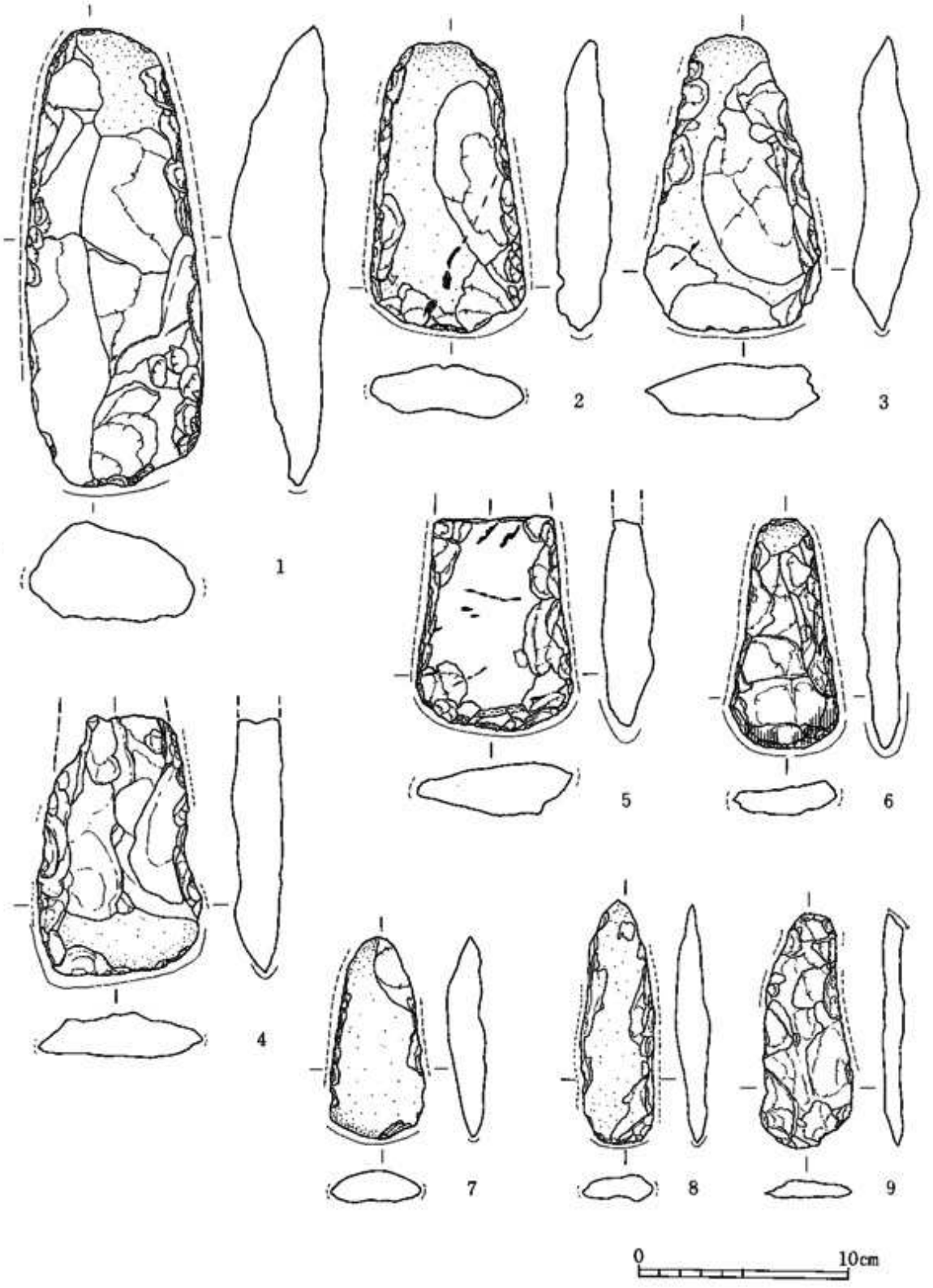
第18図　ＫＺＫ　遺構外出土土器



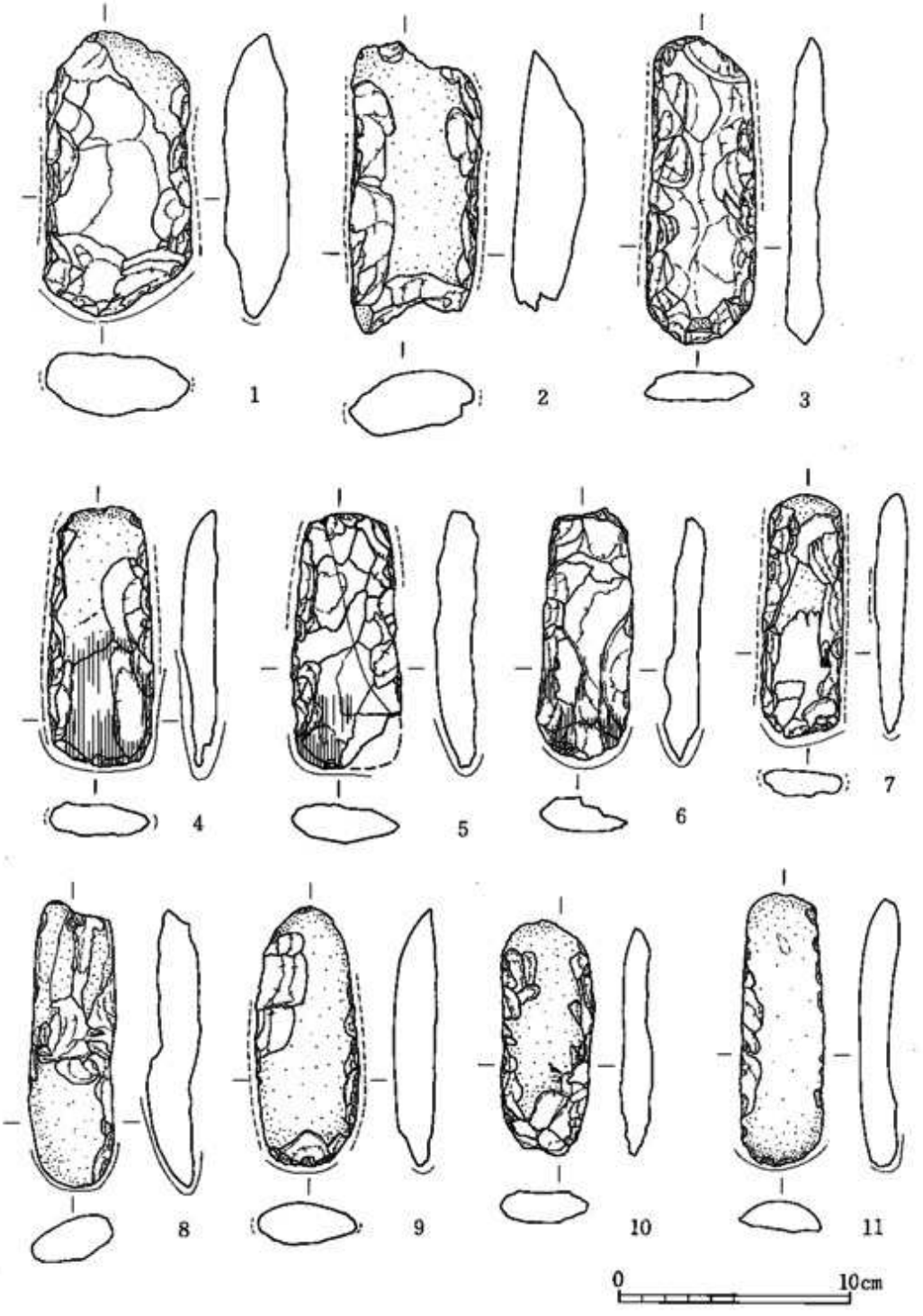
第19図　ＫＺＫ　竪穴１・２、土坑１・４出土石器



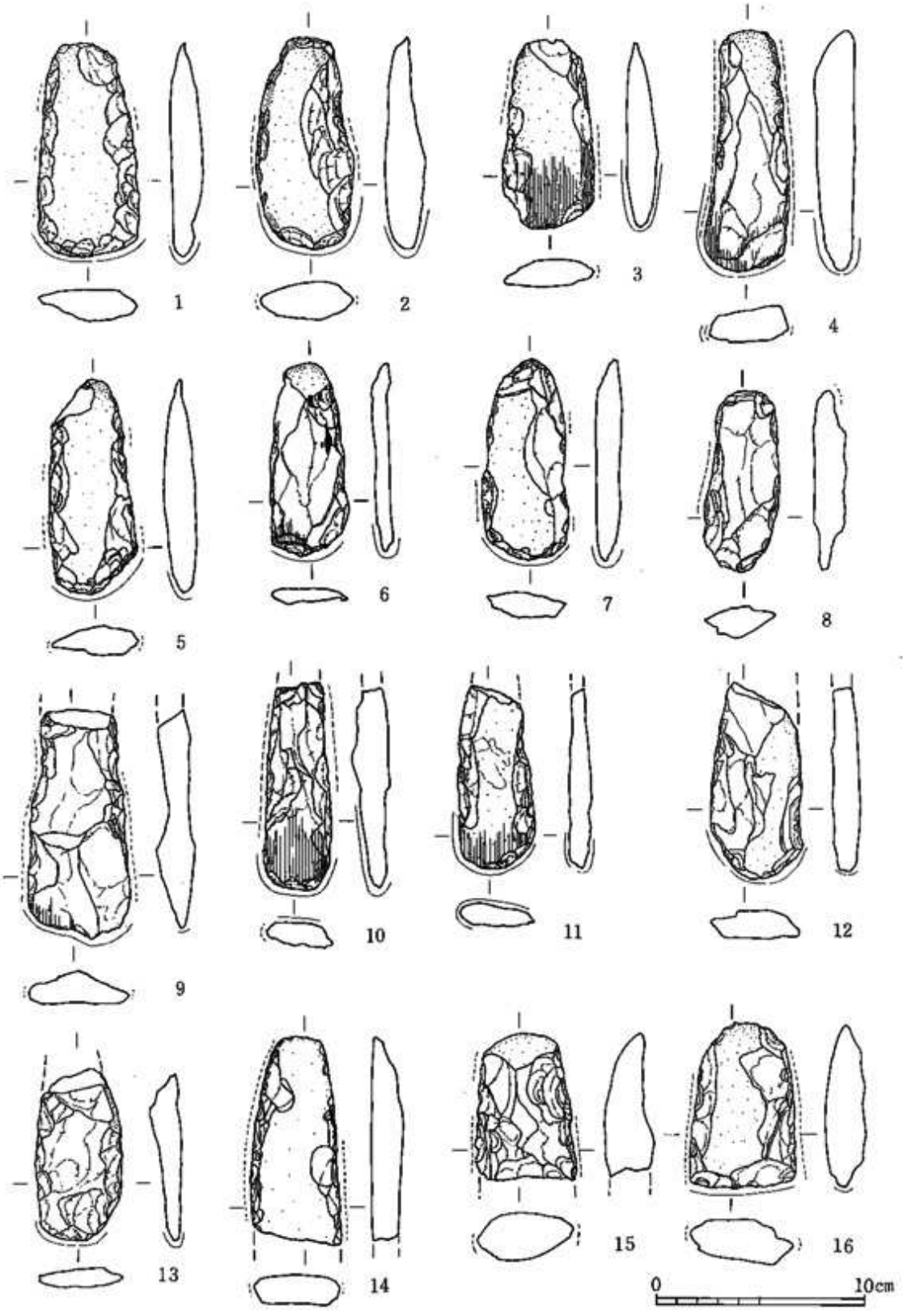
第20図　ＫＺＫ　土坑６、穴出土石器



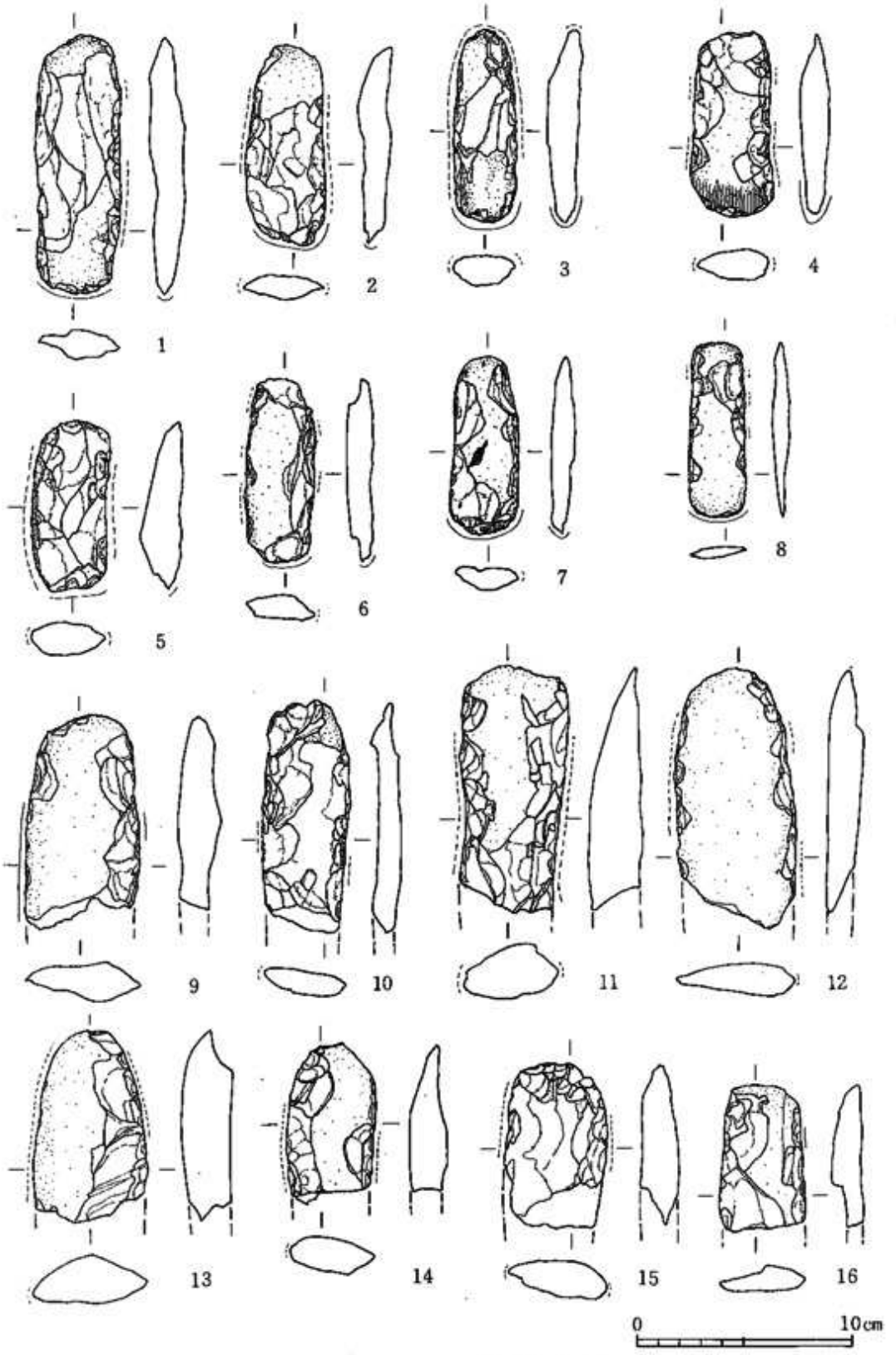
第21図　ＫＺＫ　遺構外出土石器



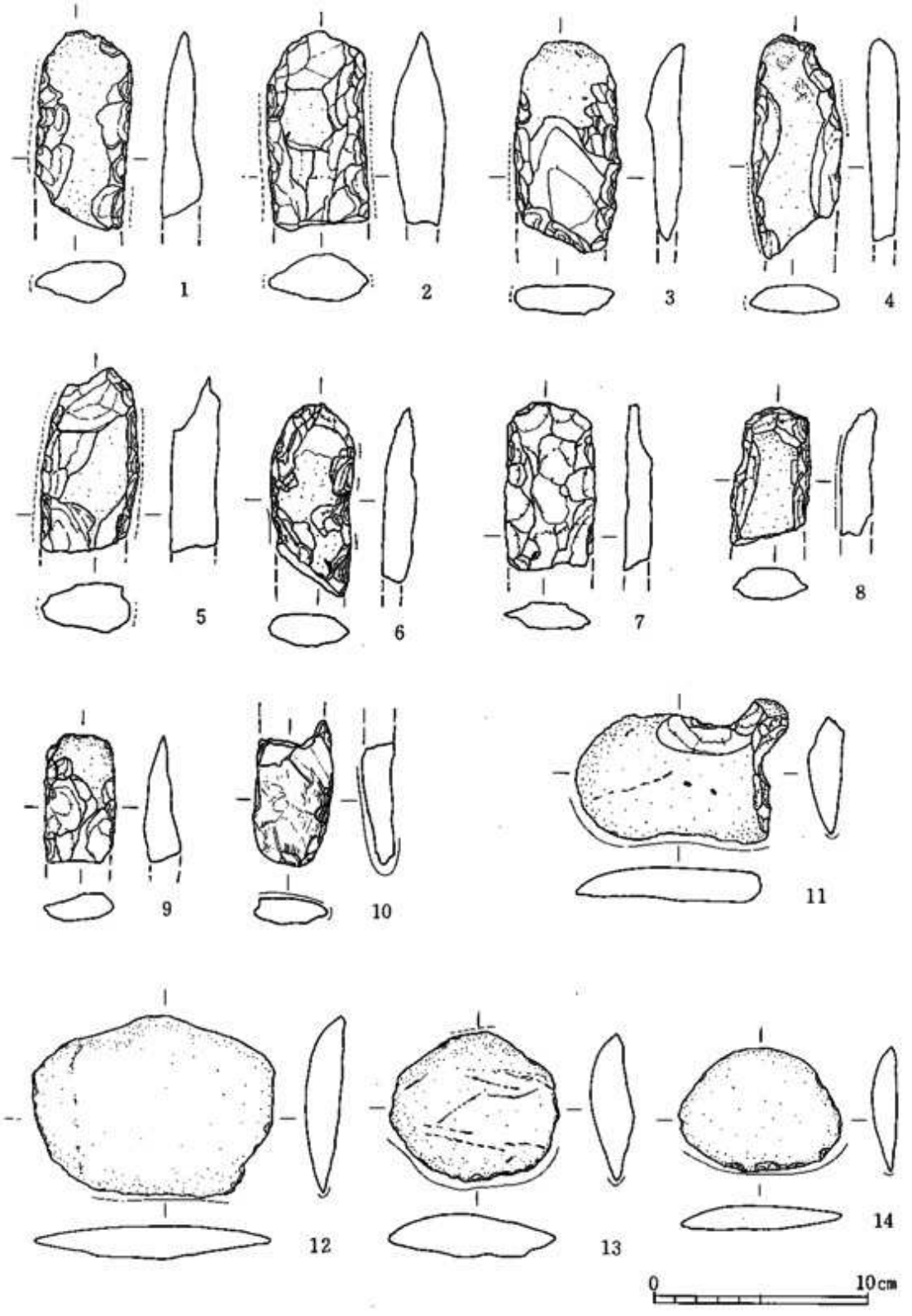
第22図　ＫＺＫ　遺構外出土石器



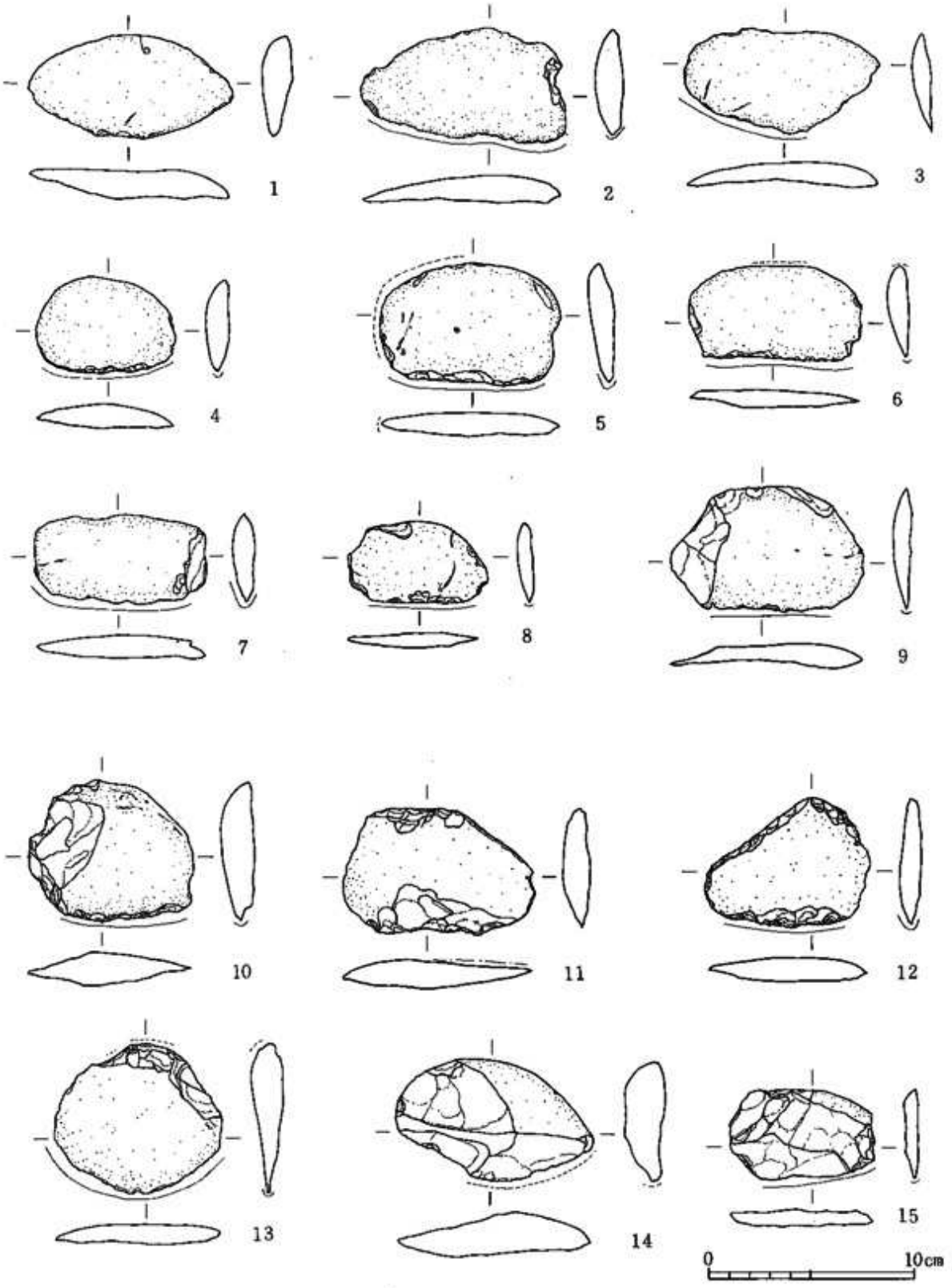
第23図　ＫＺＫ　遺構外出土石器



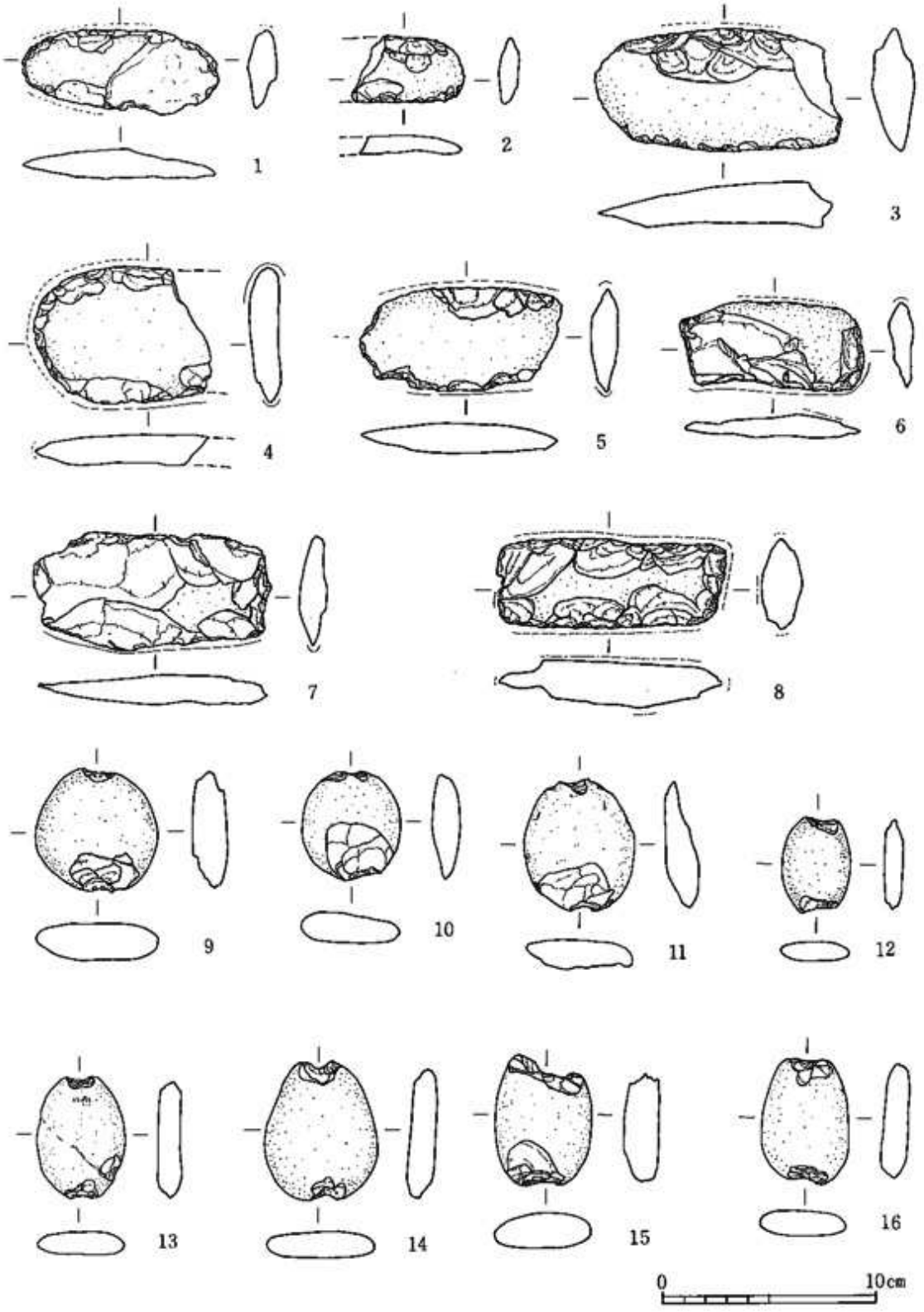
第24図　ＫＺＫ　遺構外出土石器



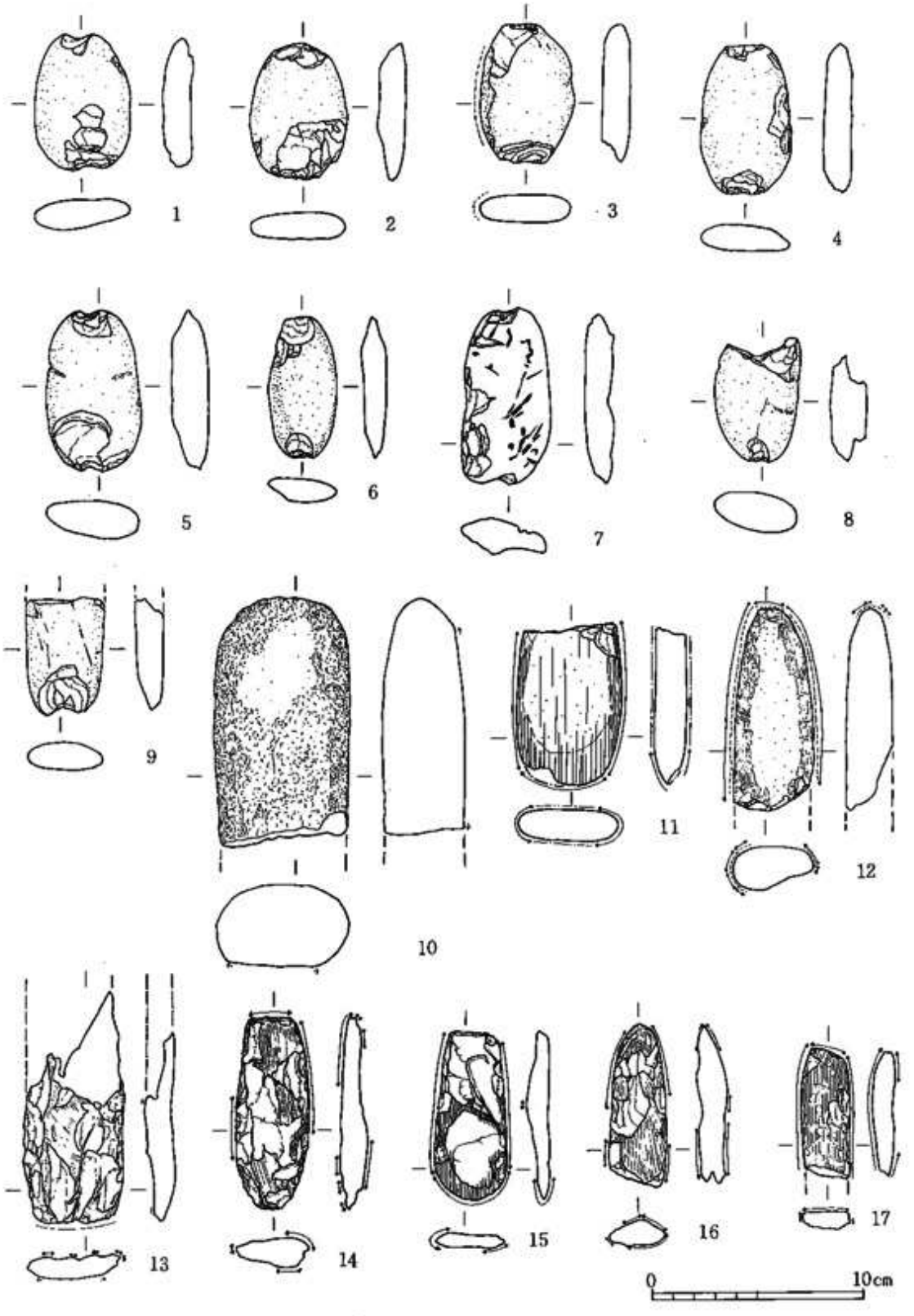
第25図　ＫＺＫ　遺構外出土石器



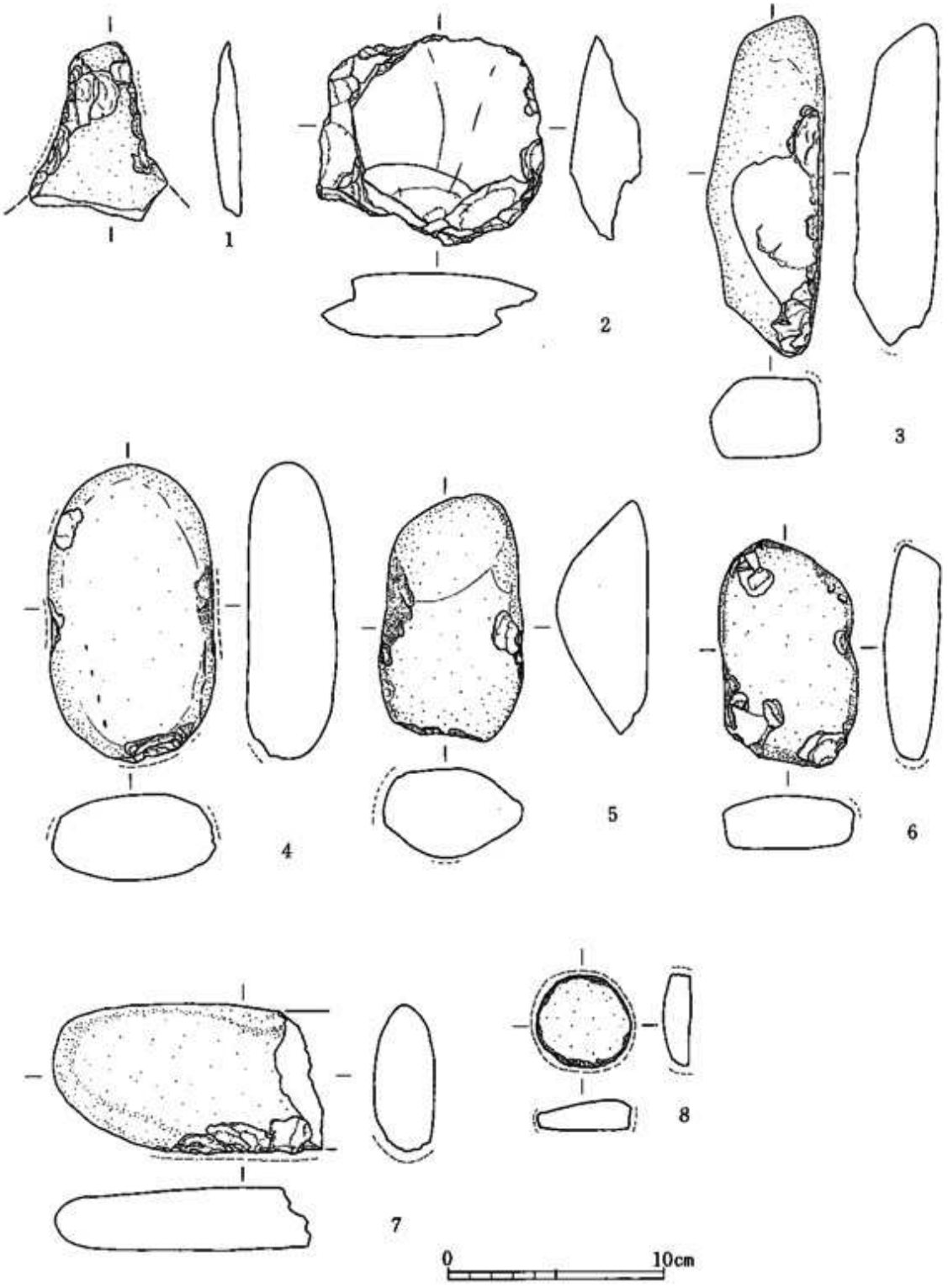
第26図　ＫＺＫ　遺構外出土石器



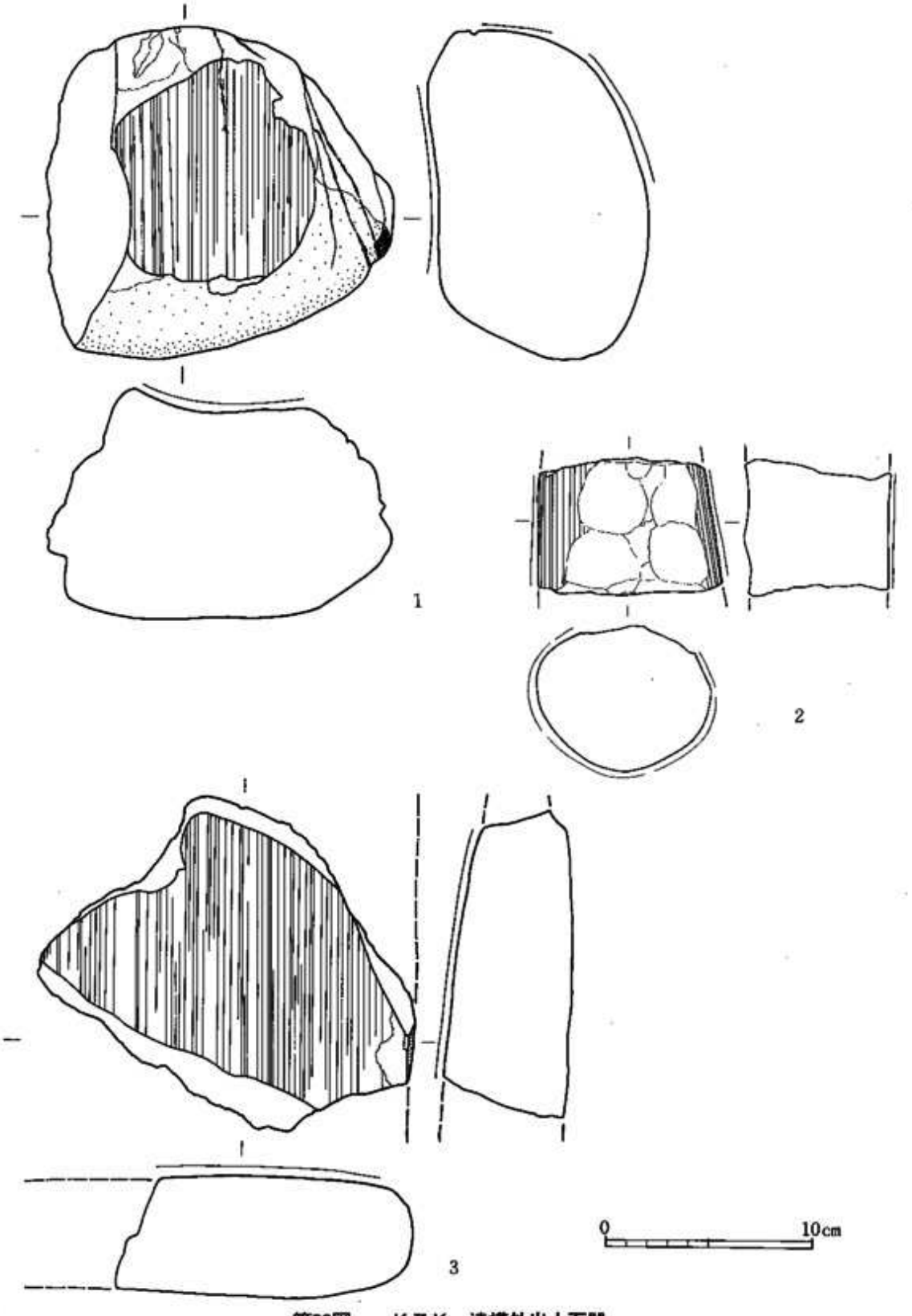
第27図　ＫＺＫ　遺構外出土石器



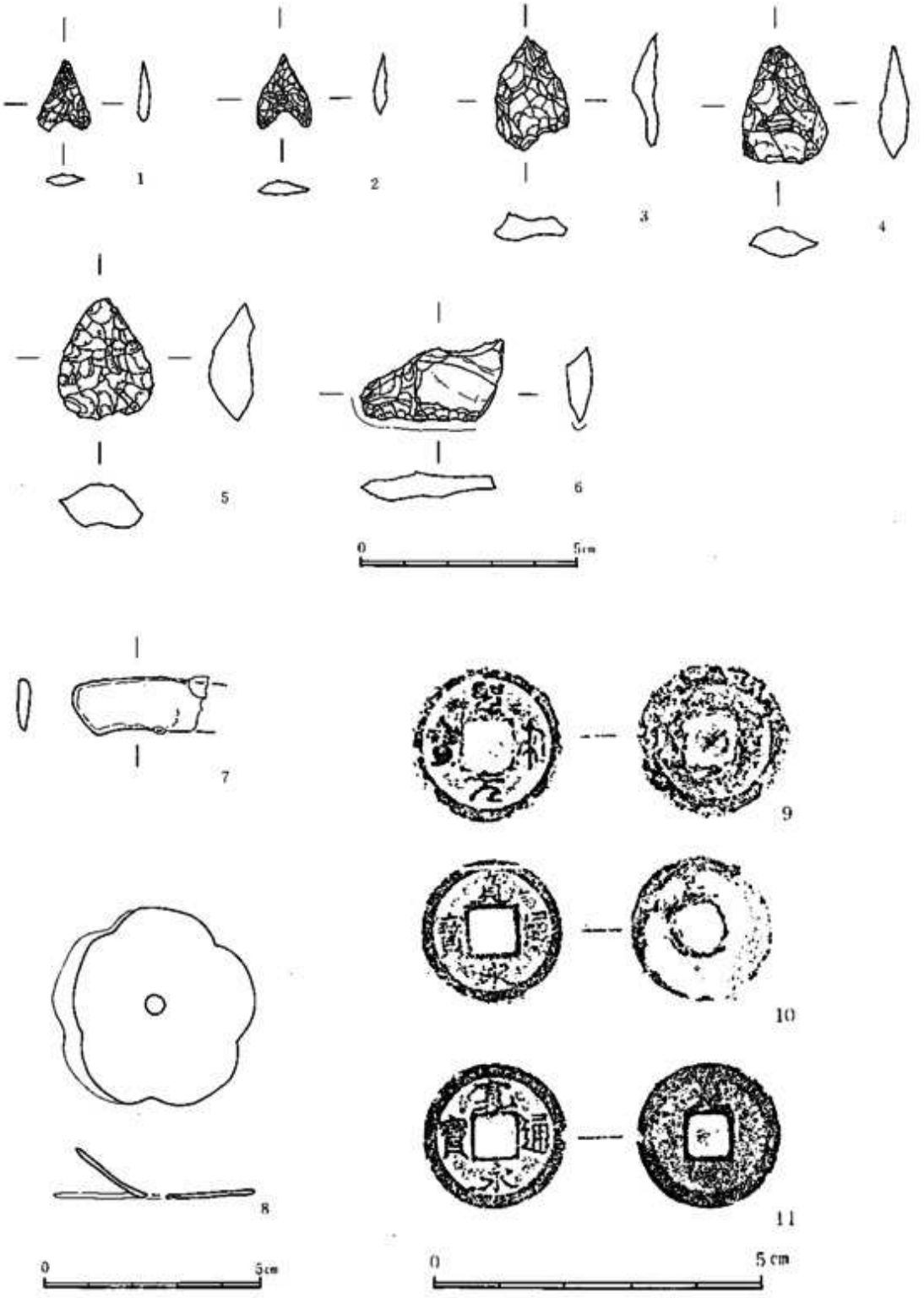
第28図　ＫＺＫ　遺構外出土石器



第29図　　ＫＺＫ　遺構外出土石器



第30図　ＫＺＫ　遺構外出土石器



第31図　ＫＺＫ　遺構外、穴出土石器、遺構外鉄製品

写　真　図　版

図版 1

調査地調査前（南から）

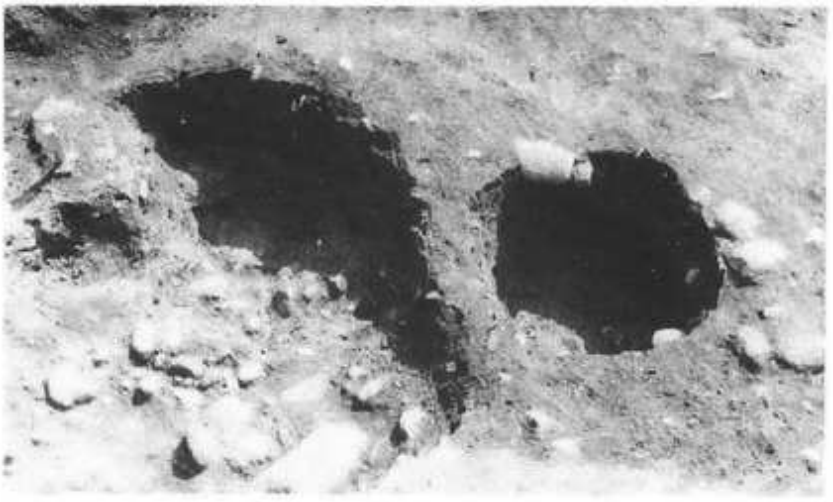
調査地全景（東から）

溝状址1・2
（奥から）

溝状址1土層
断面（東側）

竪穴1・2
（手前から）

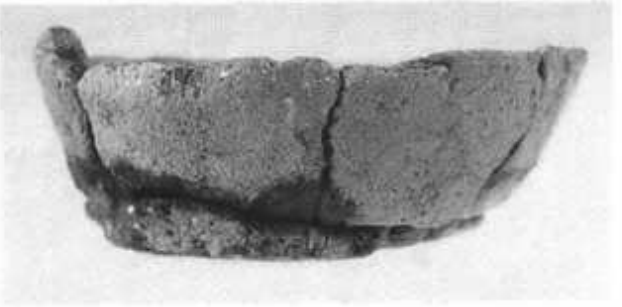
図版3



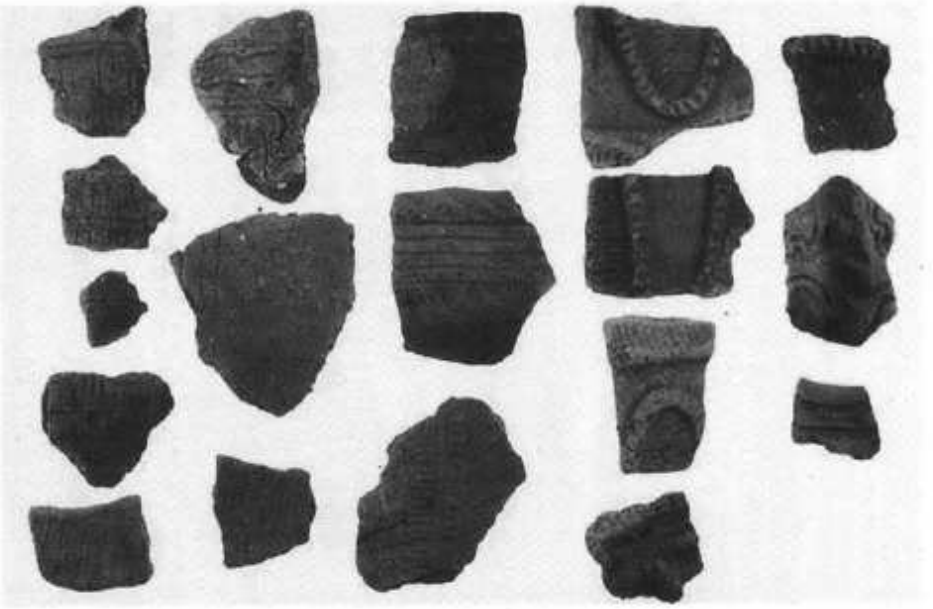
土坑1・2
（右から）

土坑3

土坑4・5・6
（手前から）



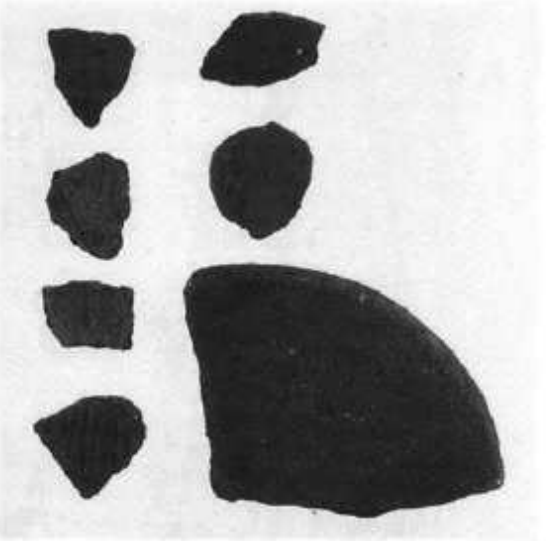
土坑 1 出土土器

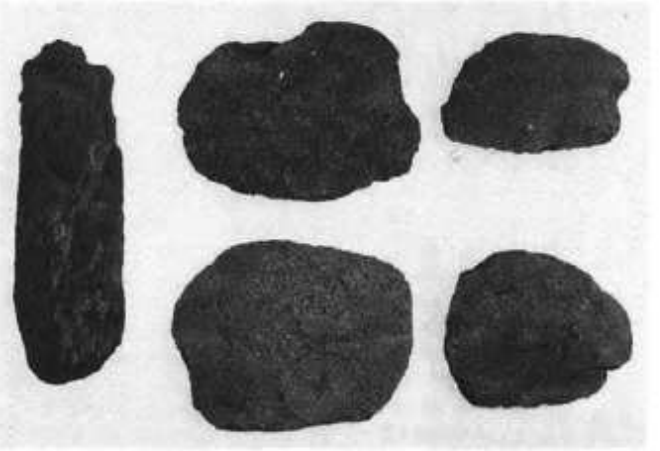


土坑 4 出土土器・石器

図版 5

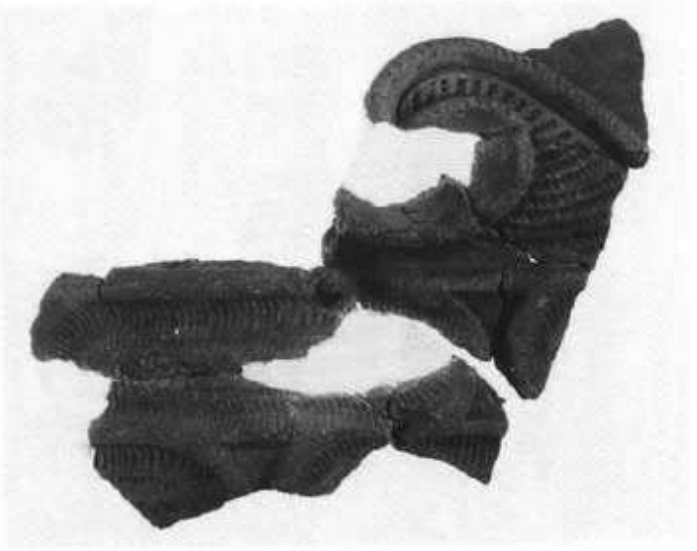
土坑 5 出土土器



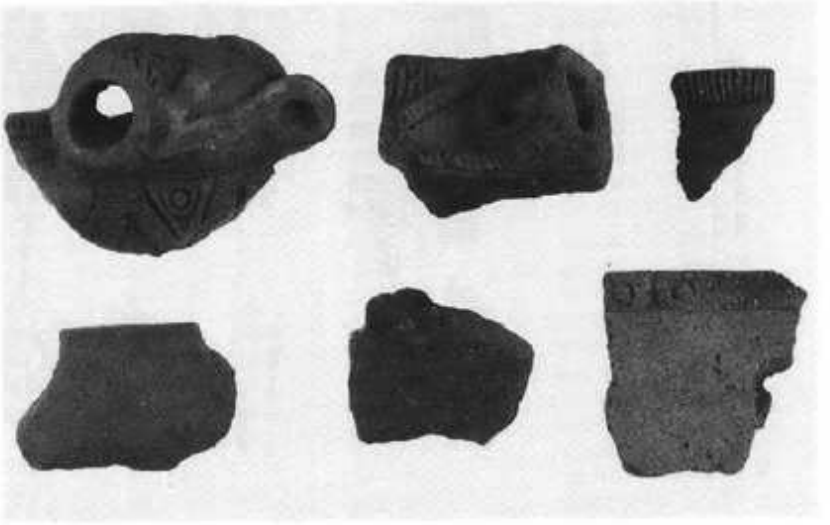


土坑 6 出土土器・石器

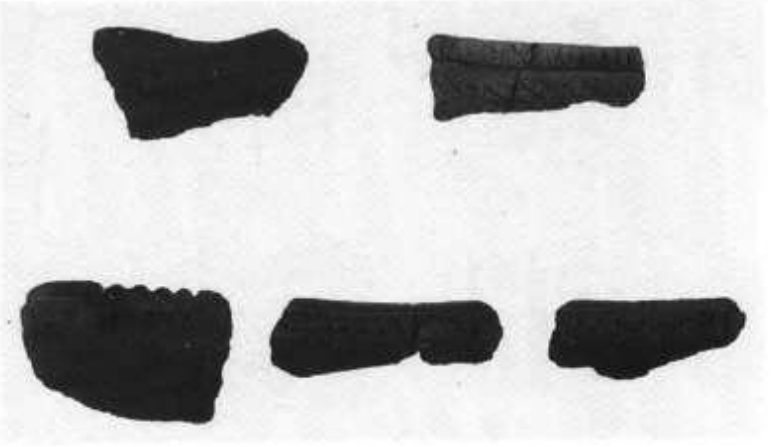
遺構外出土土器



遺構外出土土器

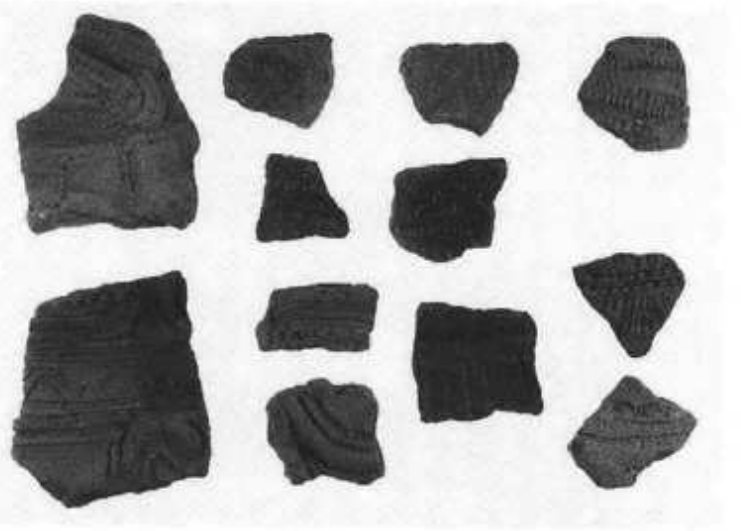


同　上

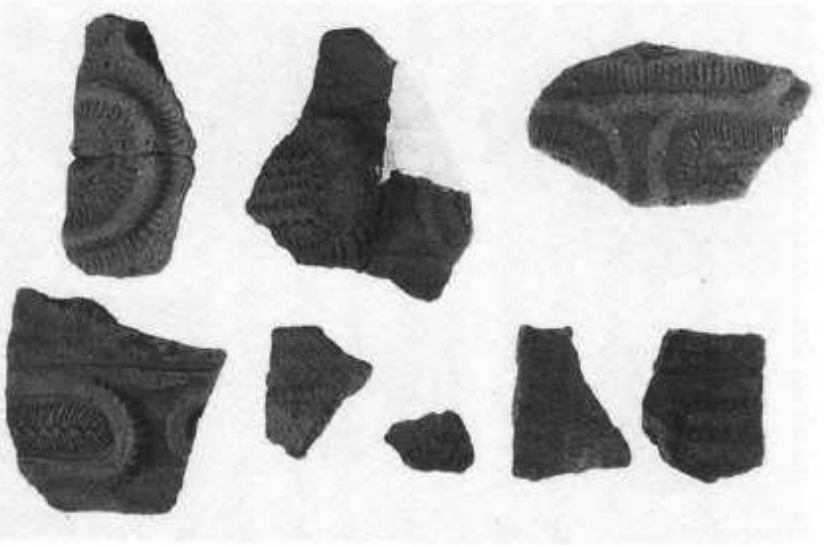


同　上

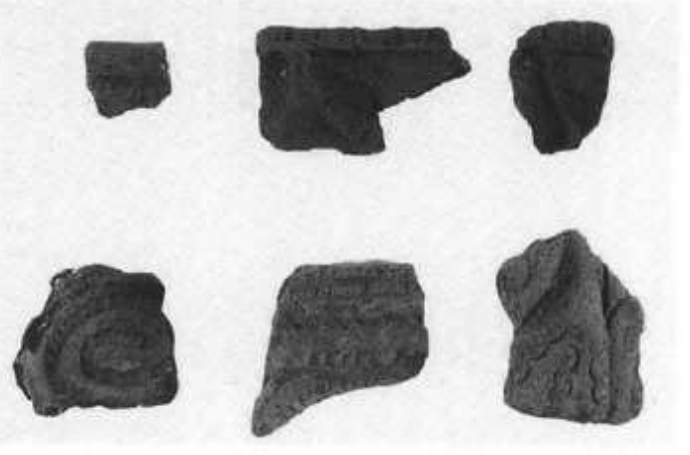
図版 7



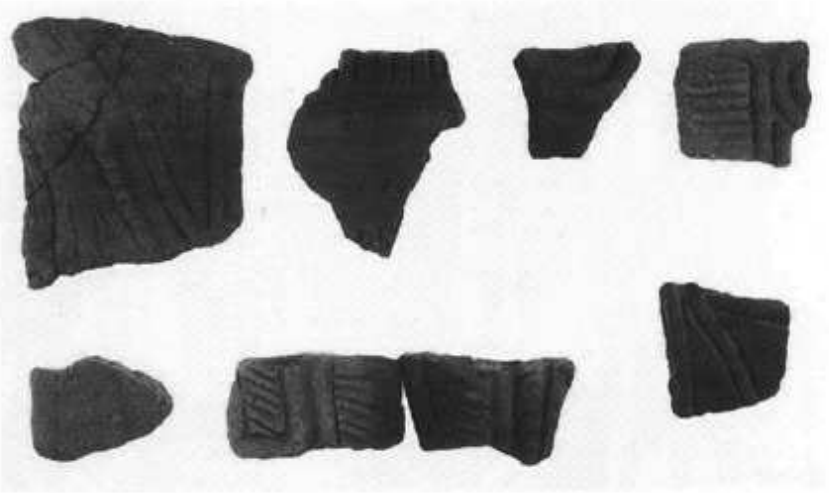
遺構外出土土器



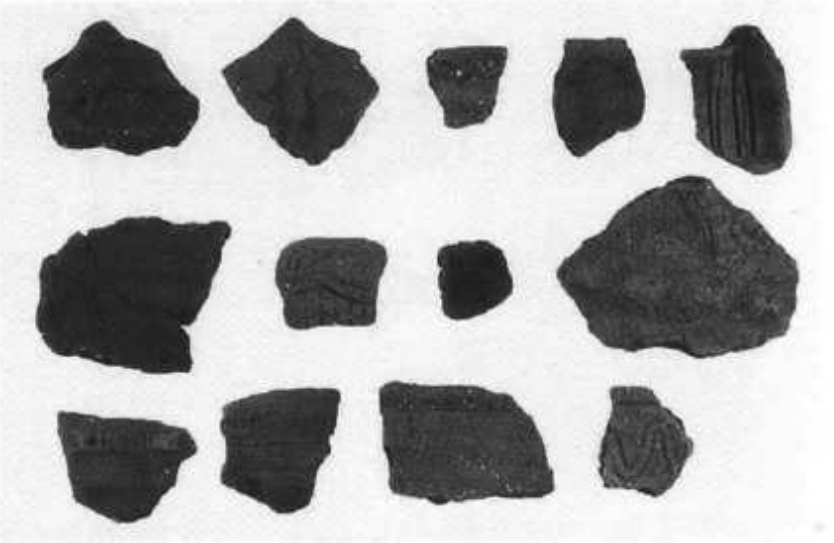
同　上



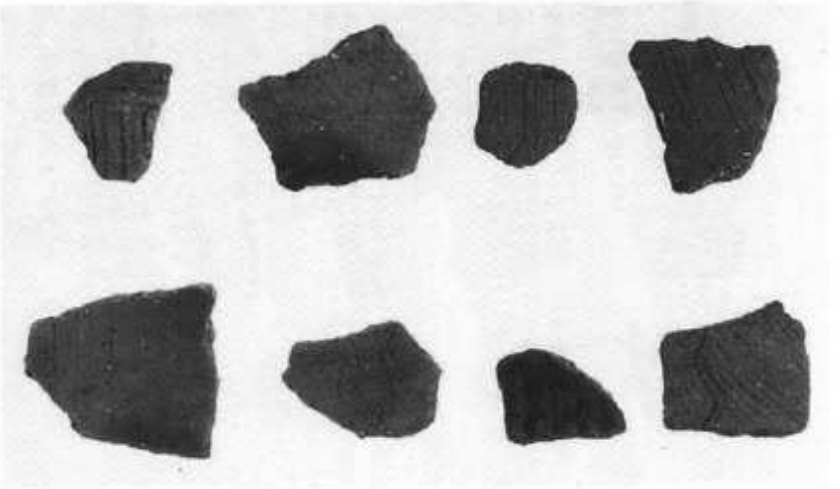
同　上



遺構外
出土土器

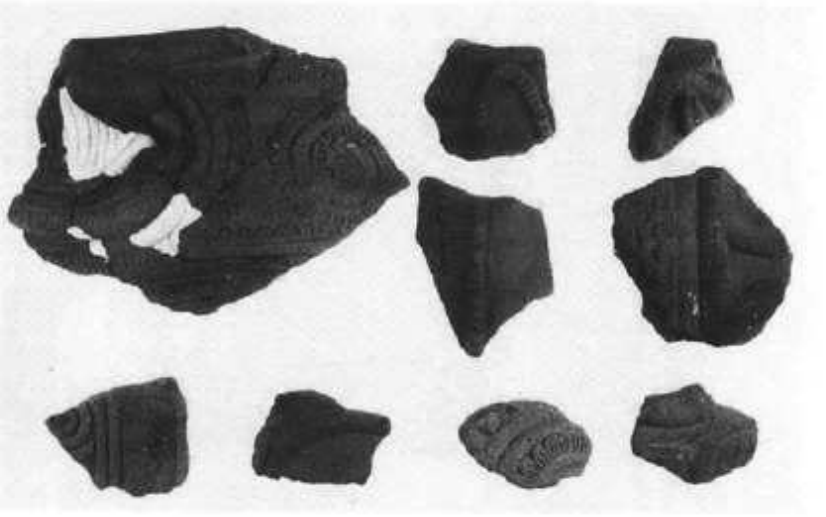


同　上



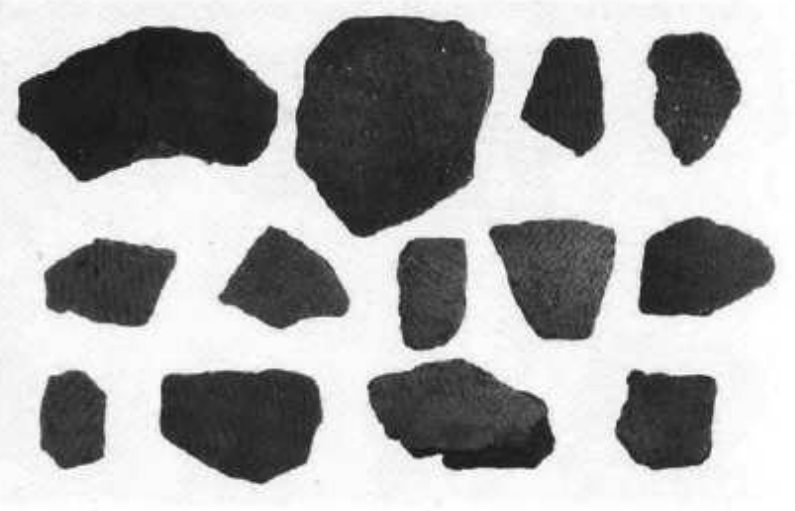
同　上

図版 9

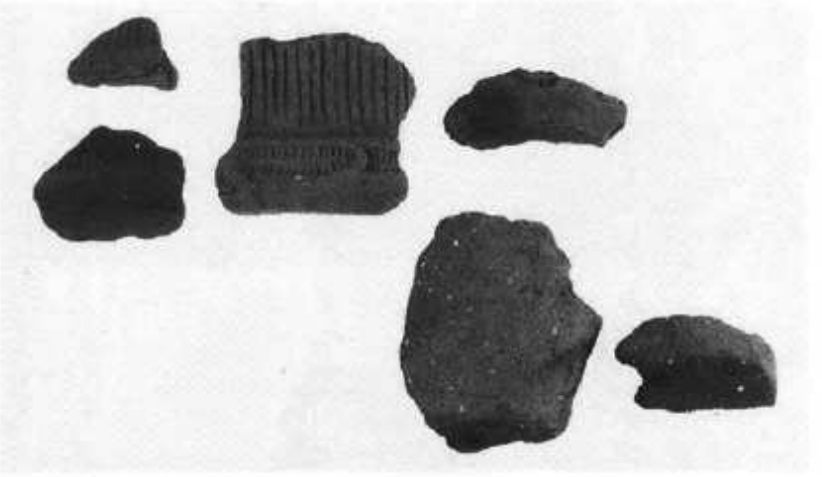


遺構外出土土器

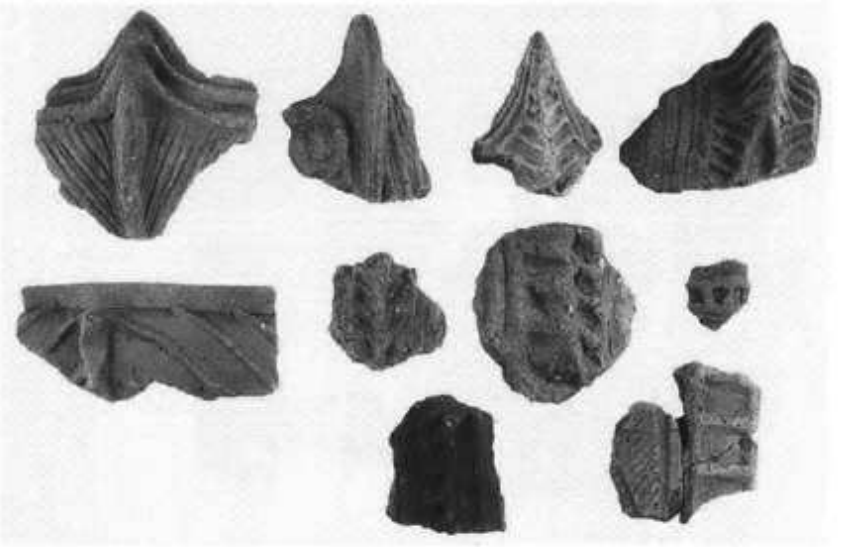
同　上



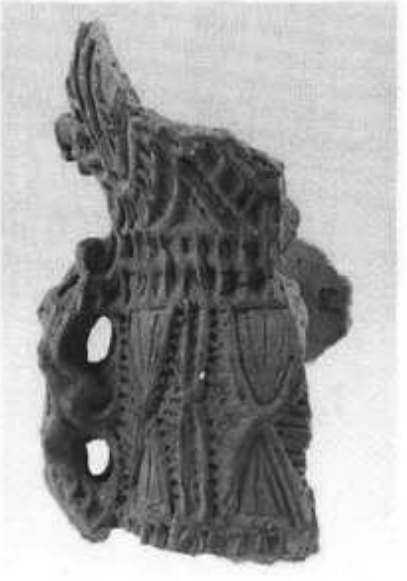
同　上



遺構外
出土土器

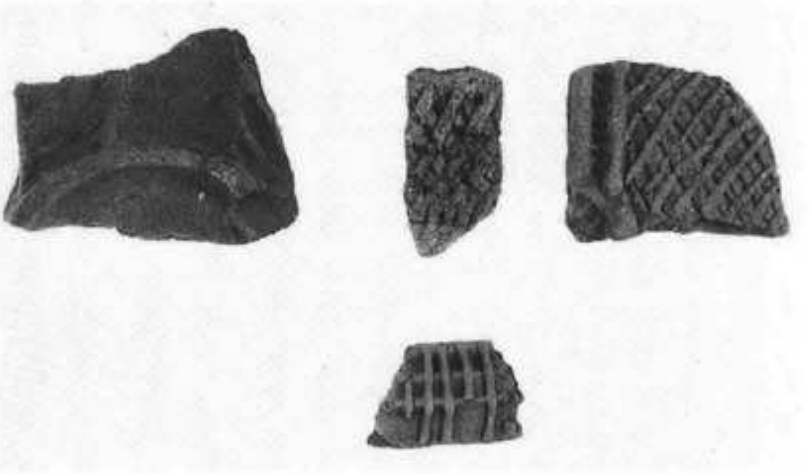


同　上

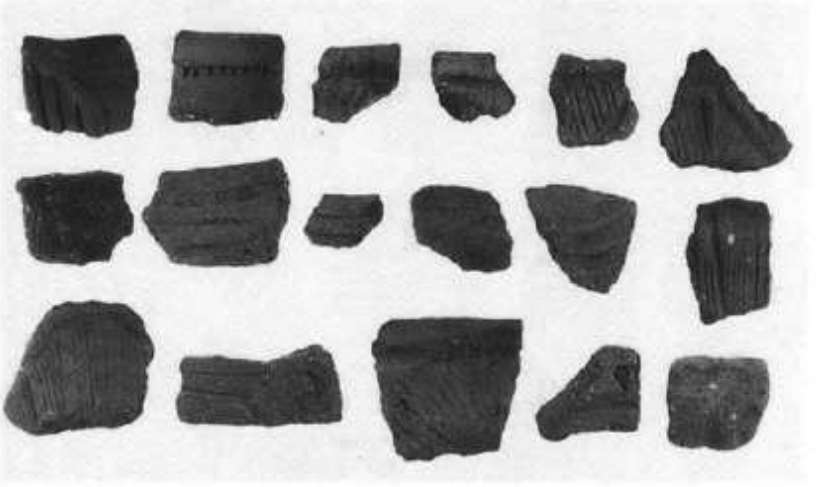


同　上

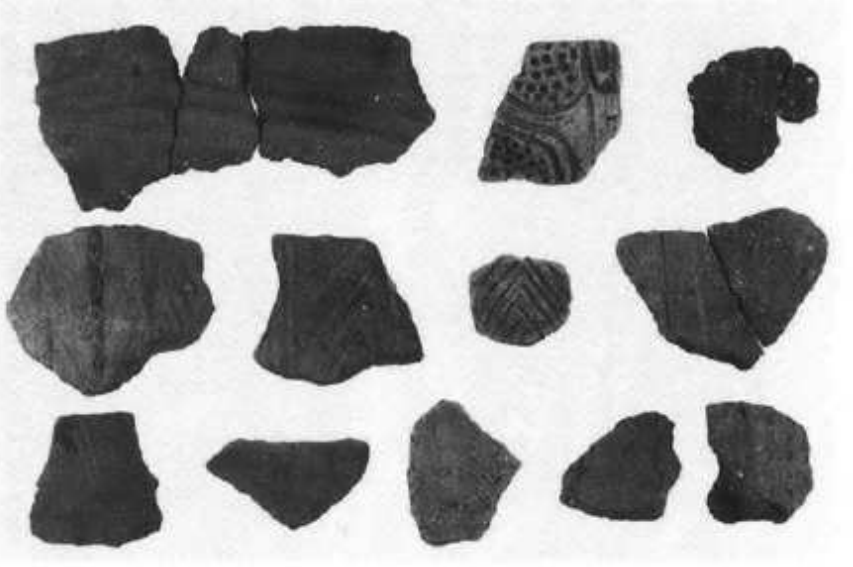
図版11



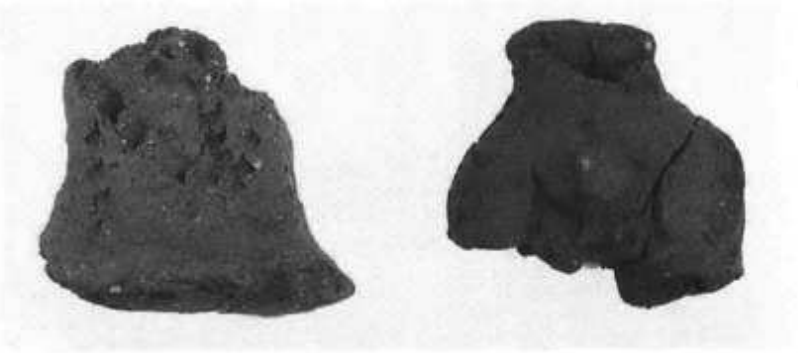
遺構外
出土土器



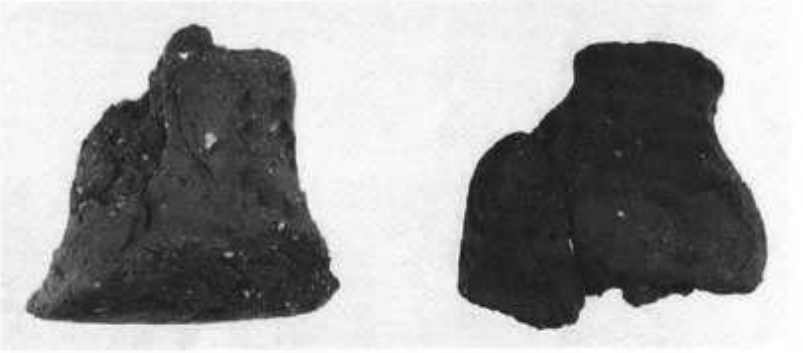
同　上



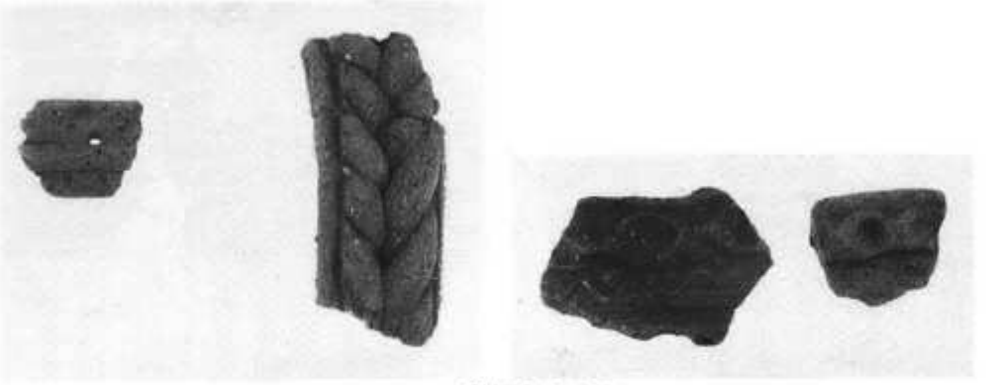
同　上



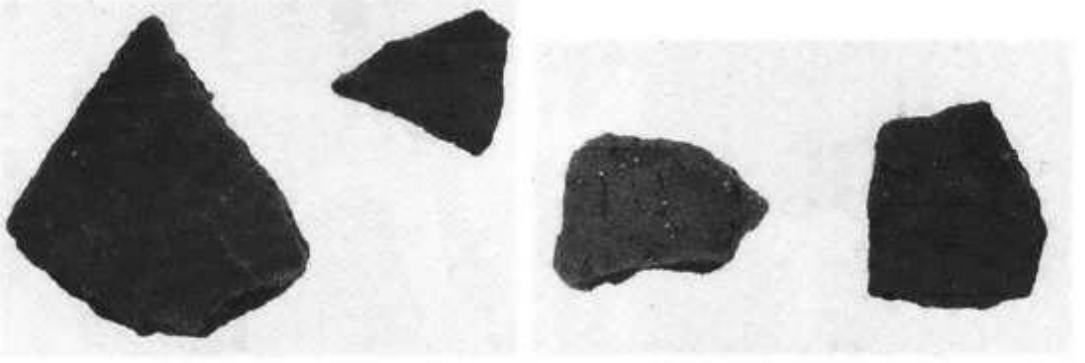
遺構外
出土土偶



同裏から

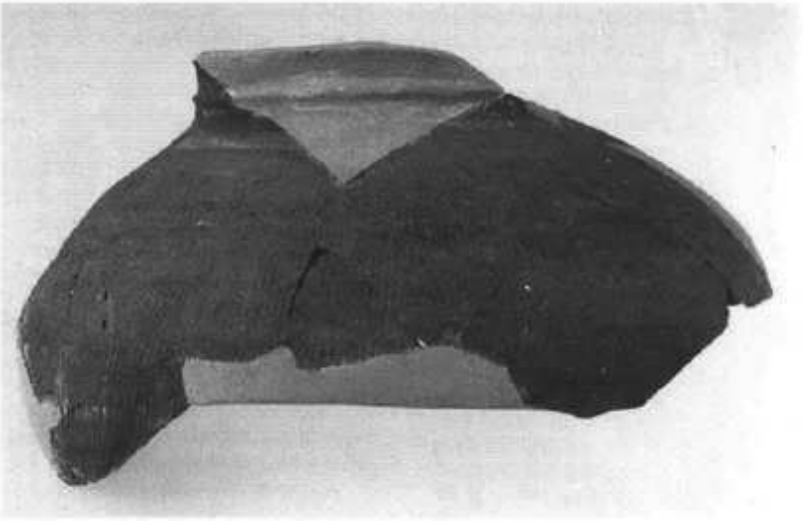


遺構外出土土器

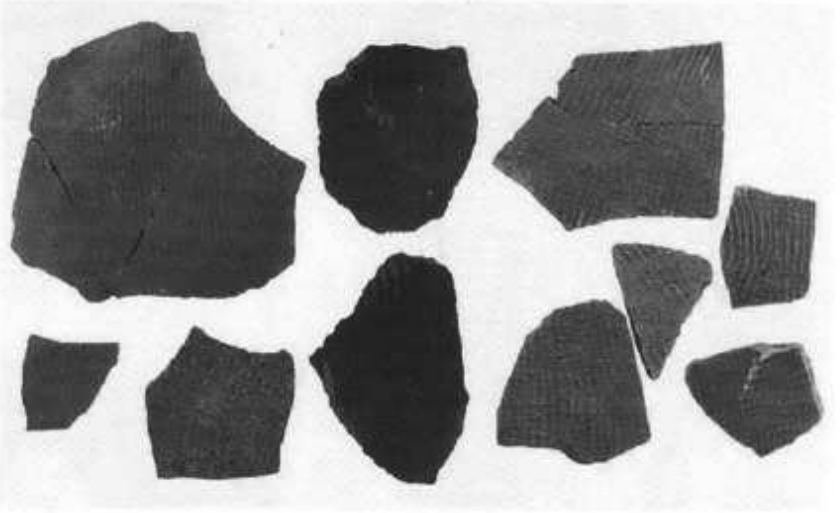


同　上

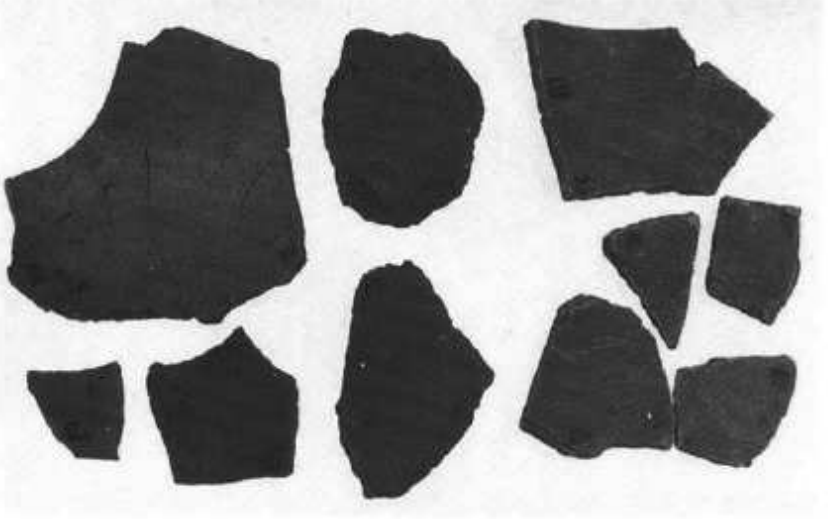
図版13



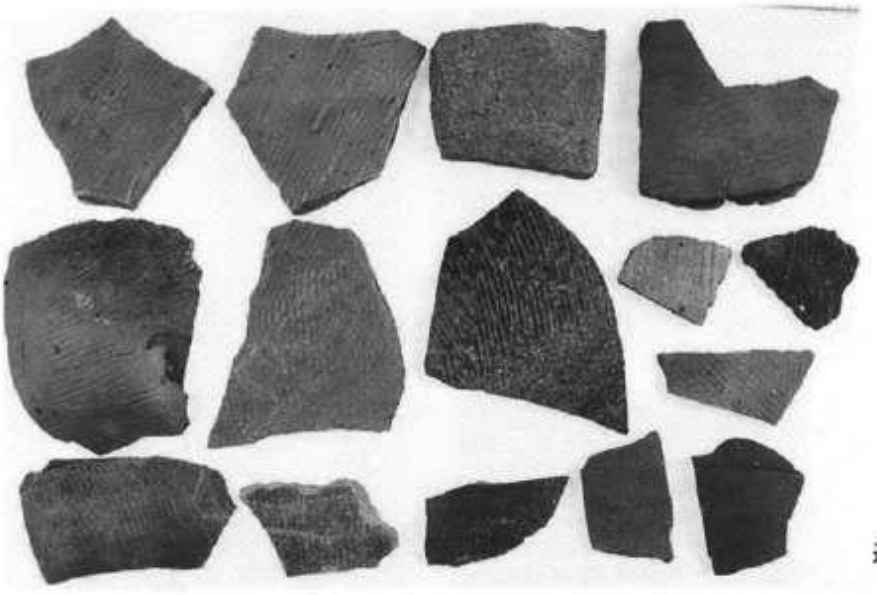
遺構外
出土須恵器



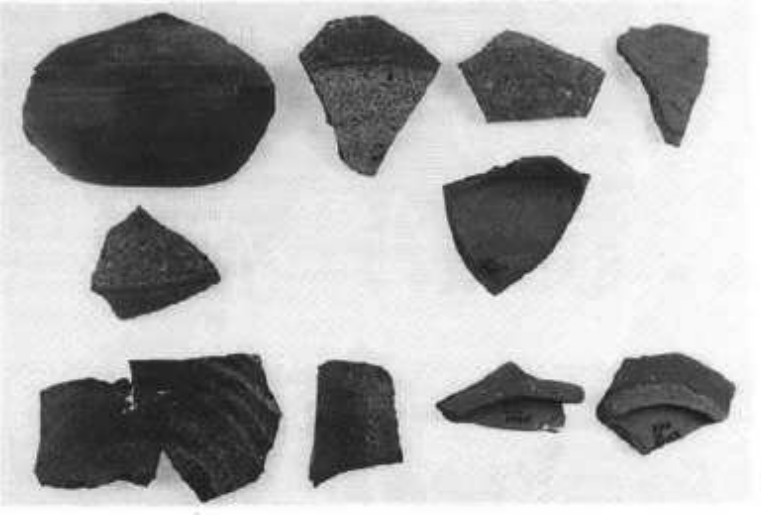
遺構外出土須恵器



同上内面



遺構外出土須恵器



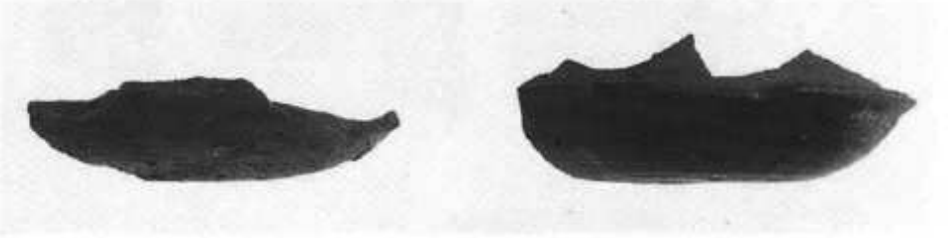
同　上

同　上

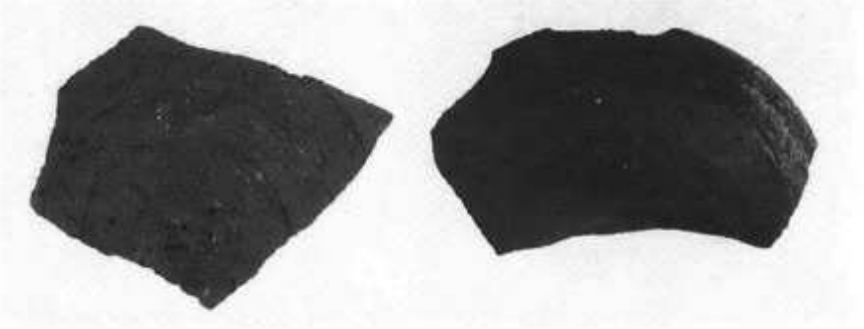
図版15

遺構外
出土須恵器

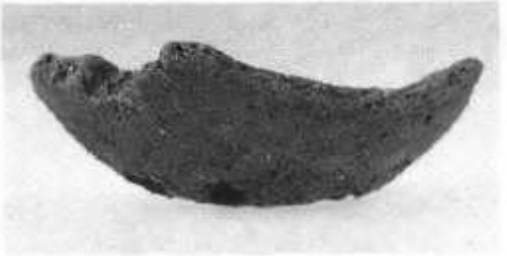
同上底部



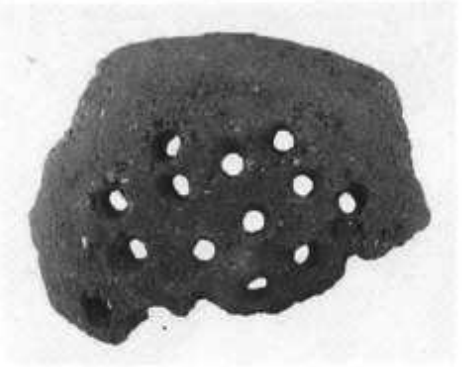
遺構外出土
須恵器



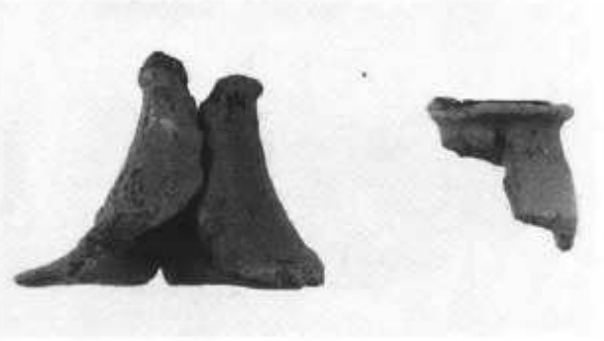
同上
底部



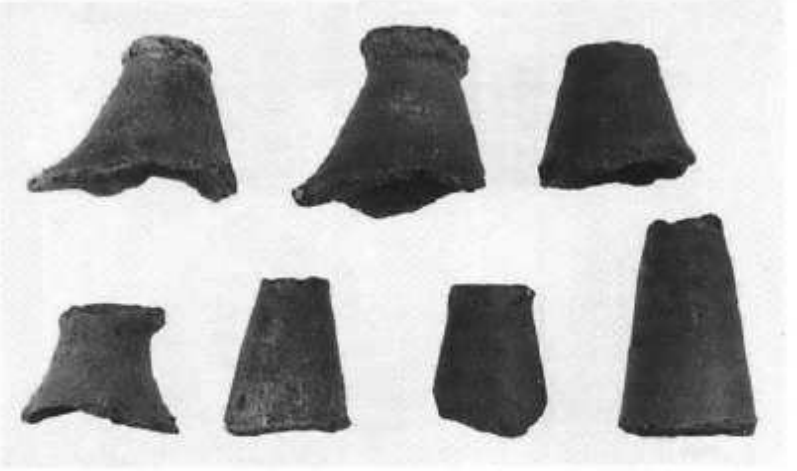
遺構外出土土師器



同上底部



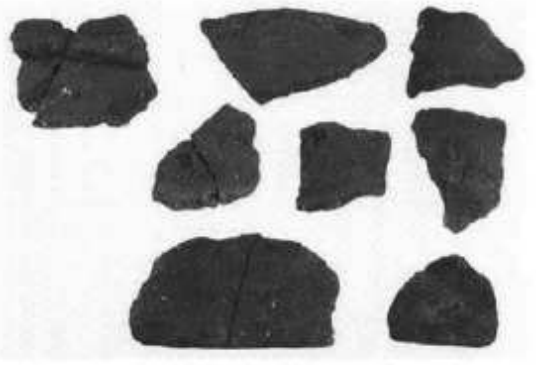
遺構外出土土師器



同上

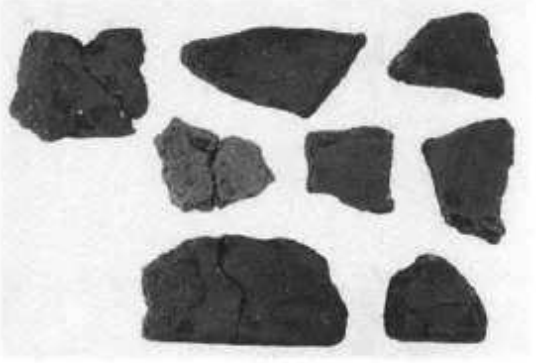
同上

図版17

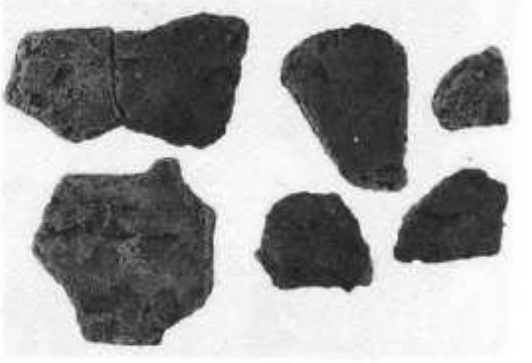


遺構外出土埴輪

遺構外出土埴輪

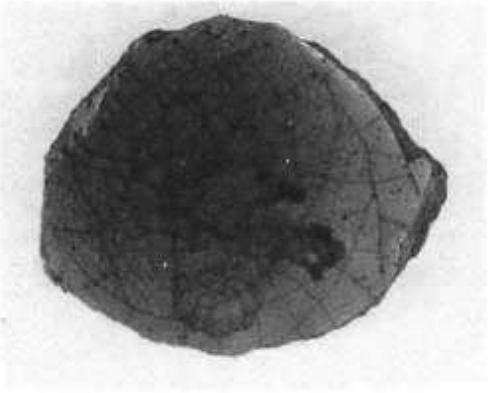


同上内面



同上内面

遺構外出土瓦（外面・内面）

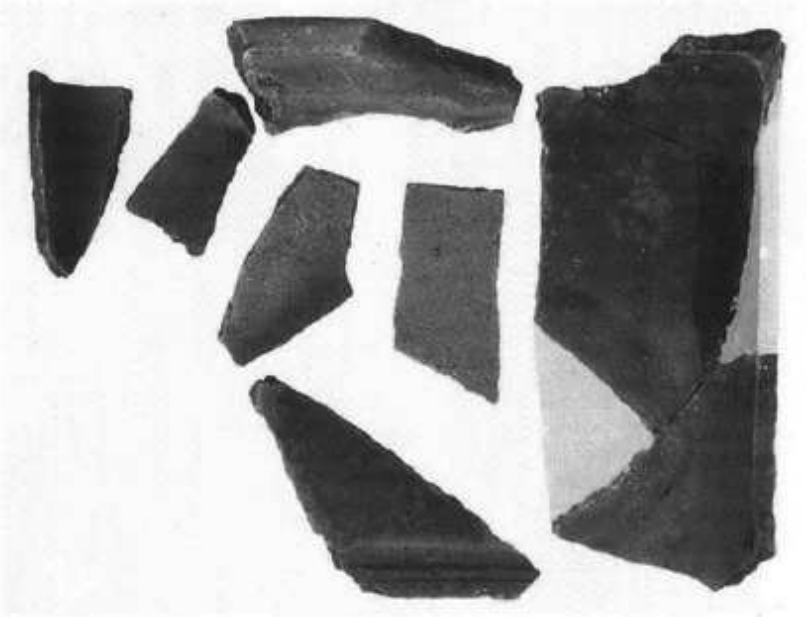


溝状址１出土土器

遺構外出土遺物（火鉢）

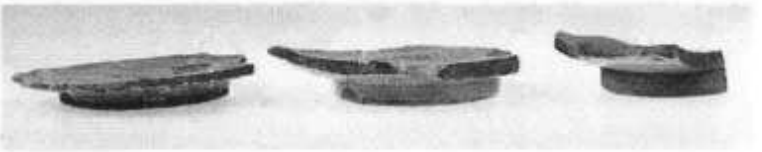
同上底部

同上底部



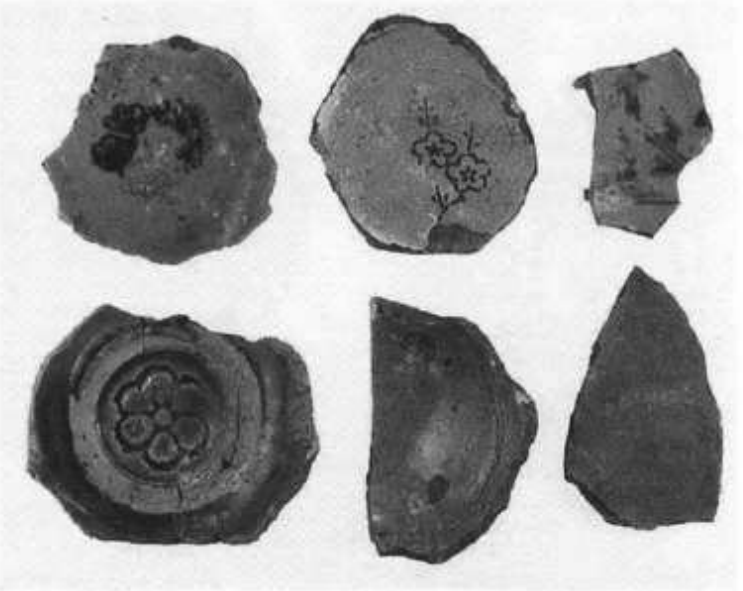
遺構外出土遺物
（瓦　搭）

図版19



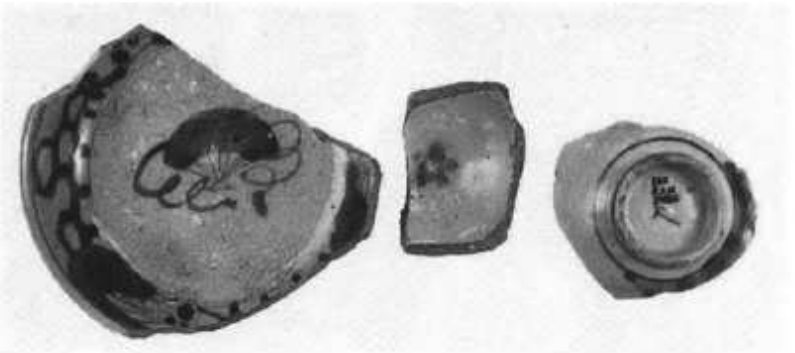
遺構外出土陶器類

同　上



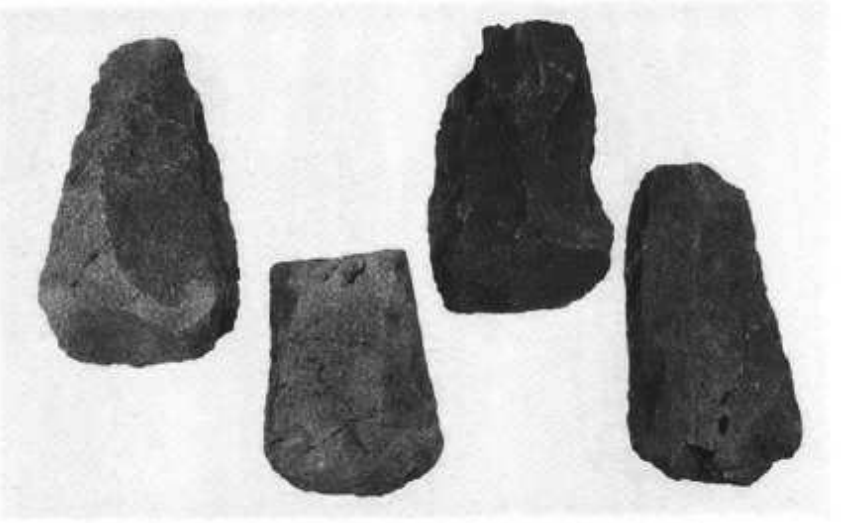
同内面

遺構外出土磁器

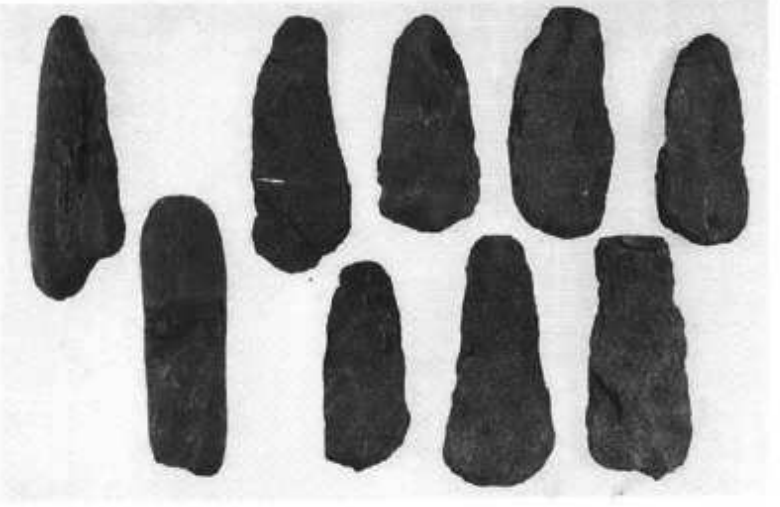


同上内面

遺構外出土石器

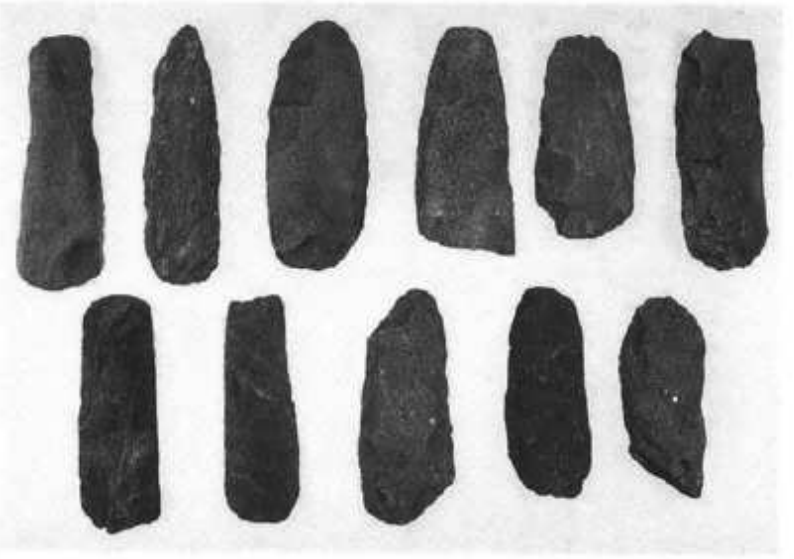


同　上

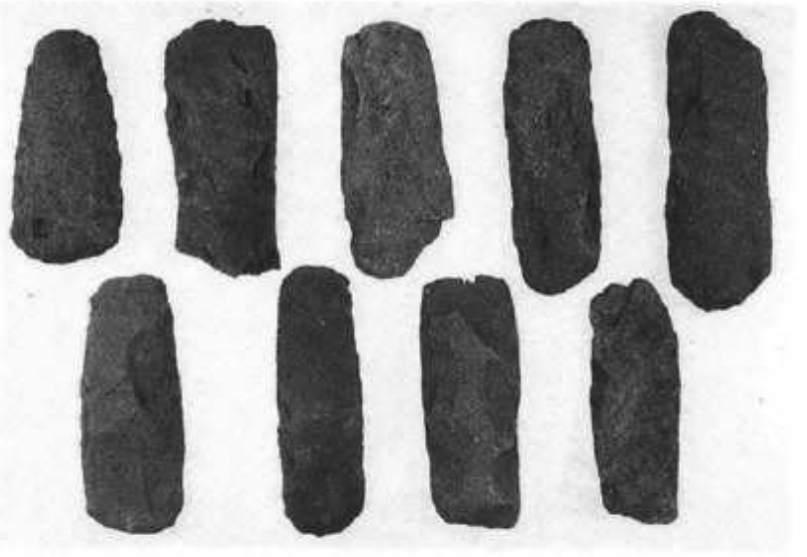


同　上

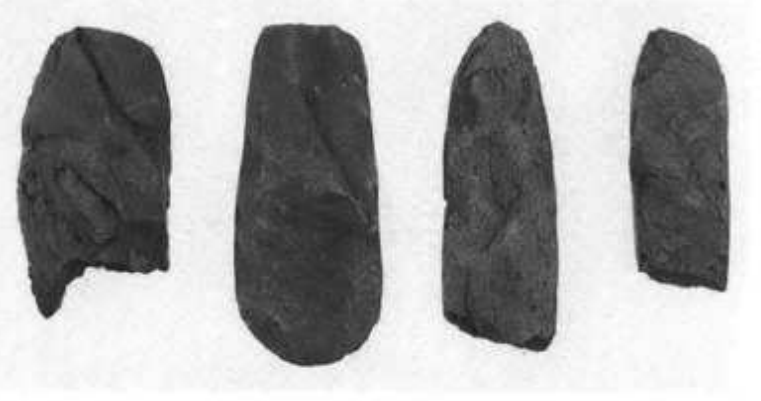
図版21



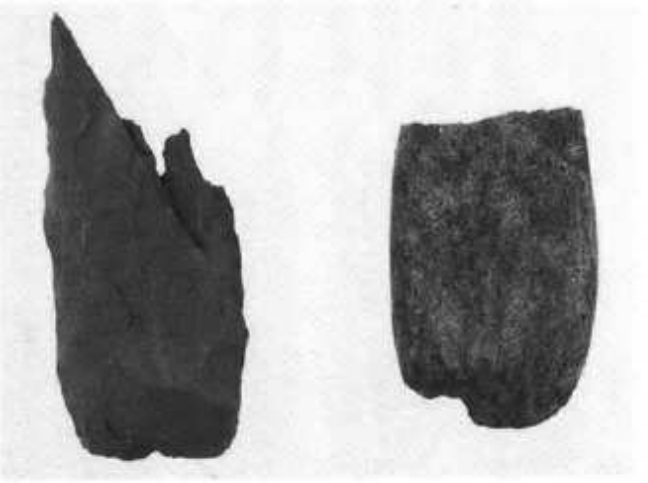
遺構外出土石器



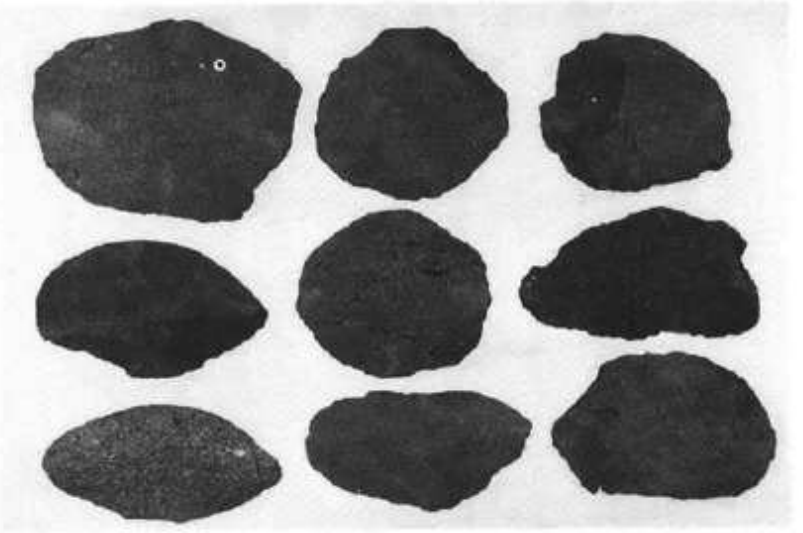
同　上



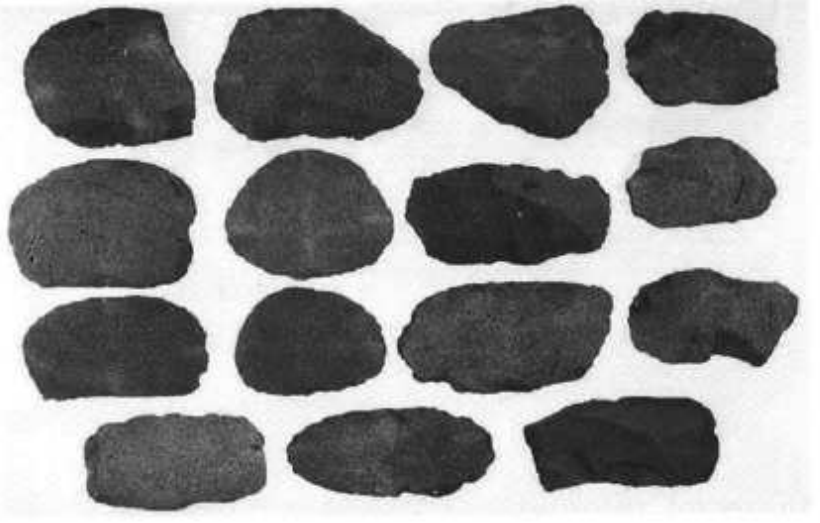
同　上



遺構外出土石器

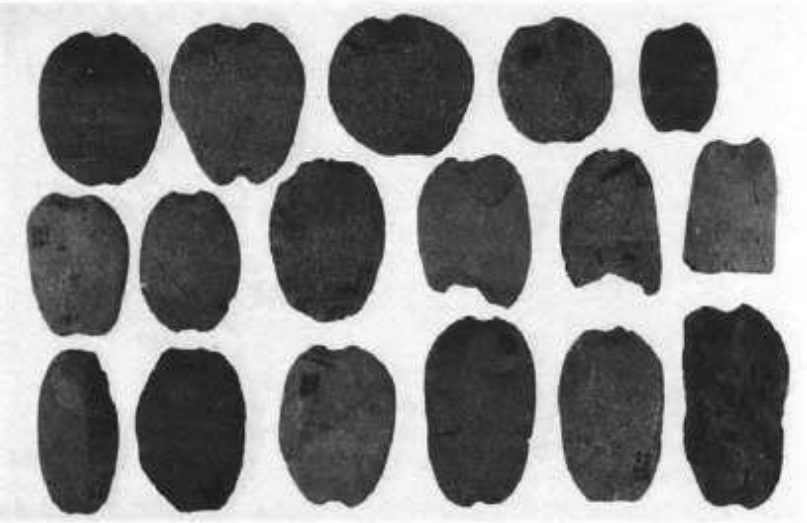


同　上

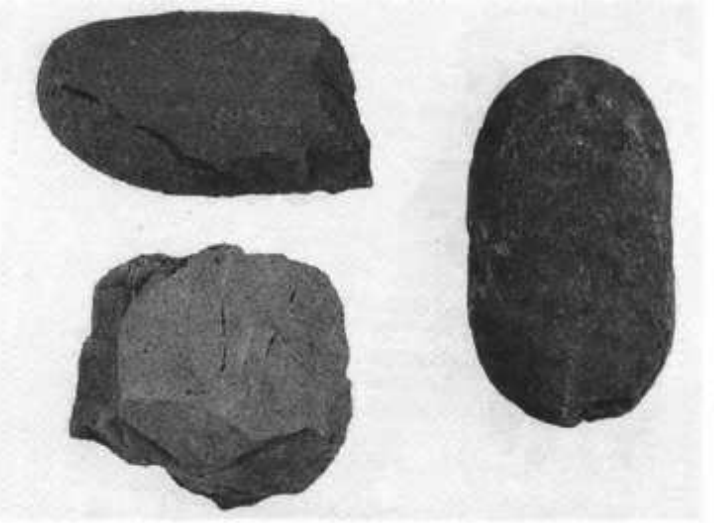


同　上

図版23



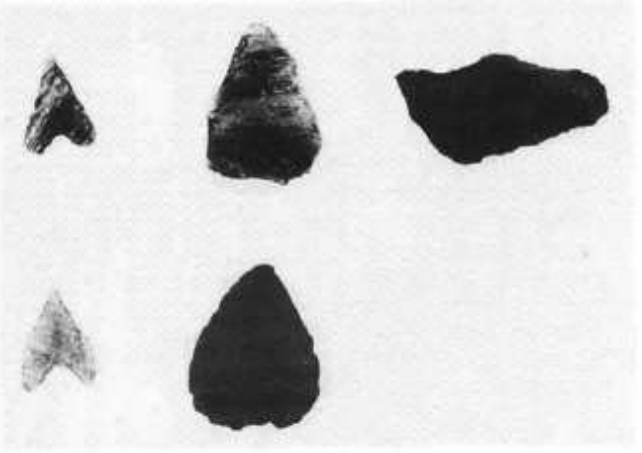
遺構外出土石器



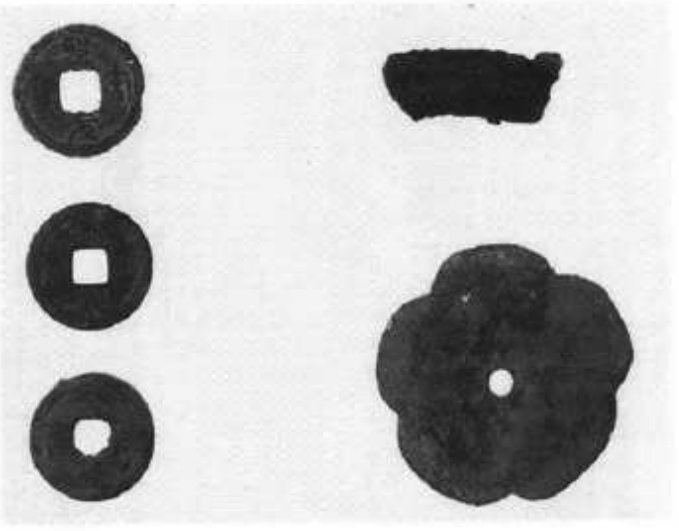
同　上

同　上

遺構外出土石器



同　上



遺構外出土鉄製品

図版25

調査風景

同　上

同　上

飯田市上川路公民館建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

開善寺境内遺跡

平成3年3月31日　印刷
平成3年3月31日　発行
編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会
印刷所　ヨシザワ印刷株式会社